んと共居城に行啓する。（以上第一幕）。

國王の臨幸中マクベスは妻の助力を得て、王を弑する。二人の王子は恐怖のあまり國外に逃げ延びる。マクベスは王弑害の嫌疑を二王子に歸せしめようとする。二王子が逃亡したので、マクベスは王位後繼者として、スコットランド王となる。魔女等の第三の豫言は、流血の高い代價を拂つたにせよ、これで的中したのである。（以上第二幕）。

然しマクベスは尙不滿で、魔女等がバンコーの子が將來王位に卽くと約したことを思ひ浮べる。彼は王位を己れの子孫に代々受繼がせたいので、さう思ふと氣が氣でない。遂にバンコー父子を殺害しようと企て、その陰謀を成就させるために大饗宴を催して、特にバンコーと共一人息子を招待する。二人は招かれて行く途すがら、マクベスに傭はれた刺客達の待伏を受け、バンコーは敢なく最期を遂げるが、息子は危地を脫する。

殺されたバンコーの血未だ冷かならざるにマクベス王卽位の祝宴が張られる。それは如何にも王らしい宴會であるが、マクベス王は、顏が一人足りない——主賓のバンコーが見えないと自ら云ふ。バンコーが非業の最期を遂げたといふ報知を彼は旣に受取つてゐるので、嫌疑を他に外らせようとして斯う云ふのである。だが此言葉の終らぬ中に、バンコーの幽靈が彼の居る場所に現れる。幽靈はマクベス以外の者には誰にも見えないが、彼の恐怖が折角の饗宴を混亂に陷らしてしまふ。（以上第三幕）。

マクベスは疑念と恐怖とに惱まされて、例の魔女達に洞窟でもう一度會見すると、貴族マクダフ（Macduff）に氣をつける樣にと警告を受け、「女から生れた人間は決してマクベスに害を加へない」と約され、そして「バーナム（Birnam）の森が彼に向つて來ないうちは、何者をも恐れるな」との助言がある。それでも尙不滿なので、彼はバンコーの子孫が將來王位に卽くかどうかを再び尋ねる、そしてその實現されることを確信するに至る。

魔女達の許を去るや否や、マクダフが先王の長子マルコム（Malcolm）と兵力を併せんためイングランドに逃れ去つたと云ふ報告をうける。怒り心頭に發して、マクベスは、マクダフの城を襲擊し、マクダフ夫人とその子供達を刄にかける。（以上第四幕）。

兎角する中に、マクベス夫人はマクベスを助けて先王を弑した罪の恐しさに良心を責め立てられて亂心し、睡眠中に歩き廻つて、妄念で生じた血痕を手から洗ひ落さうとしたりして氣を揉む。

マクベスも矢張り生に飽き、殊に夫人に逝かれて人の世を厭うて來るが、妖姿の最後の豫言が彼を新たな努力へと驅り立てる。そこで、バーナムの森が己れの方へ動いて來るといふ報告を聞く

と、勇氣が全く挫けてしまふ。そんなことの萬一にも有らう筈がなく、それは魔女の嘯かしだと思つてゐたのである。動いて來るのは事實バーナムの繁れる森の伐り取られた木々の枝で、マルコムとマクダフとの侵入軍が、敵前の曝露を防いで安全にマクベスに向つて肉薄するために、てんでに之を翳してゐるのである。マクベスはいまだに己れを不死身だと信じて「女から生れない人間」の外には何者をも怖れず、猛然と戰ふが、やがてマクダフに出會するに及んで、魔女に警告されてゐた事を思ひ出す。最初はマクダフと戰ふに逡巡するが、いざ尋常に勝負と追つめられて「おれには魔法をかけた命がある、女から生れた者にや渡されぬ」と叫ぶ。「汝の魔力を斷念しろ。マクダフは母の腹から人並に生れたのではない、時ならぬ時に飛出したのだ」と敵將が言葉を返す。次いで起つた決鬪でマクベスは殺される。そして先王の長子マルコムが王となる。(以上第五幕)。

「マクベス」は一六〇五年に筆を起し翌年成つたものと推定せらる。「ハムレット」「オセロー」「リーヤ」の後に書かれたものであらう。

此作は沙翁劇中最短なもので、最長の「ハムレット」に比較すれば約半分の長さである。

尙この篇は一六二三年のFolio版に載つてゐるだけで、他に比較するものがない、不完全なテキストたるは免かれぬが、今更致し方がない。

一六〇三年エリザベス女王沒し、後繼者なく、蘇格蘭のジェームスを迎へて王となした折柄、作者は蘇國に對して起されたる世人の興味を捉へて、この蘇國の物語を題材としたのであらう。

悲劇的 Tragic 又は悲壯なといふ言葉は、單に人の惱みの上に與へられる言葉ではない。天災の爲めに父母を失ひ、財產を失ふた人は、慥に大きな惱みを受けた氣の毒な人である。我々は其人に向つて厚く同情する。しかしそこに悲劇的な何ものもない。事の悲劇的な爲めには、そこに責任を負ふべき行爲がなくてはならぬ。或る行爲が原因をなして、そこから生ずる結果としての惱みが初めて悲劇的である。

行爲の下には動機が隱れてゐる。人はその意慾に動かされて樣々な行爲をする。彼が一個の人間であれば、その行爲に對して責任を負ふべきである。社會的には法律が行爲の責任を規定する。他人の物を盜めば、その盜むといふ行爲の責任を問ふて、法律は彼を懲役に處する。しかし法律は往々淺薄である、形式的である、又あまりに力弱い事が多い。物を盜むものは刑に服せねばな

らぬが、一國を盜むものは王位の尊榮を受ける、といはれる如きは其れである。

人の行爲の最後に責任を問はれるところは良心である。良心の起原、良心の本體、良心の組成分子、それ等を思索するのは倫理哲學の主要な仕事であるが、それは今問ふ必要はない。倫理的にいへば、人間であるといふ事は良心を有つてゐるといふ事である。良心のないものは、人非人である、若くは精神的の不具者卽ち白痴である。そこで良心に問はるゝ惱みが最も痛ましい悲劇的な事でなくてはならぬ。

悲劇「マクベス」は良心の悲劇である。若しマクベスの代りにイアーゴーが置かれたならば、殆ど悲劇となり得ないであらう。イアーゴーはそれほど良心の囁きの力弱い男であつた。「マクベス」が良心の悲劇である事の最もよき說明は、旣揭の史劇「リチヤード三世」と比較するに如くはない。あの殆んど良心といふものが無いかと思はるゝリチャード三世と比らべて見ると、マクベスに於ては、問題は單に王位を奪ひ之を持續するといふが如き外形の事でなく、實に魂を得るか失ふかの問題である。永遠に地獄に落るか否かの問題である。

悲劇「マクベス」は場面が多くは夜である。そこに夜の不思議さと夜の恐怖とがある。外敵ノールウェー王と內通せる叛徒を征討した將軍マクベスとバンコーが凱旋の途次、荒凉たる平野を橫ぎる時は、旣に日の傾きかけた薄暮であつた。兩人とも蘇格蘭が內亂外寇に惱むの際に一國の興亡を賭して鬪つた戰に捷ち、意氣昂然たるものがある。眼中ダンカン王はない。齡ひ六十に近いダンカン王は健康な身體の持主であるが、性質は柔和、それも稍過ぎて優柔不斷と見えるところもある。王といふ尊號を別にしては、マクベスが鎧の袖を一度び振れば、わけなく取て代れるといふ感じを與へる。「ヴェニスの商人」に於て見た三つの匣のうち、銀の匣の示すところに從ひ、人は値ひするだけのものを得られるとすれば、マクベスの今回の戰爭の勳功は確にスコットランドの王たるだけの値打はある。マクベスとても王族の出身、王位繼承の幾分の權利は有つてゐる。時代が戰國爭亂の世の中であれば、信長を本能寺に殺して天下を明智が桔梗の旗印に靡かせる事は、我々の今日考へるほどな不可能の大野心大望ではないのである、奇計を弄して總理大臣の地位を覬ふ位の事である。

誇りに誇つた心を抱いて兩大將は、馬の轡を並べて荒野にさしかゝると、不思議な三人の魔物(妖婆)が薄ら暗い岩かげに、こちらを見てゐるのを發見する。彼等は沼の毒氣や夜の惡風や人の猜みやから出來た惡の權化である。ではあるが、彼等は必ずしも自から惡を行はない。たゞ惡意

を人の心に唆かす丈けである。

今日二十世紀の東京に魔物などは出ない。そんな話は大昔のお伽噺であると聞き流すも差支ない。只忘れてはならぬ事は、今日は魔物が或は三越のショウ・ウィンドウのなかのパラソルとなつたり、同級の誰彼が數學がすぐれて上手であつたりする時その影にかくれて之を妬む心になつてゐたり、罪のない妹をいぢめる心に變じてゐる事を考へねばならぬ。マクベスが王を殺すの殺さぬのは、我々に少しも關係のない事のやうに考へられてはならない。遠き世界を、吾々の現在の世界に翻譯して考へねばならぬ。官吏などの收賄は、多く夫人の虚榮心が原因といはれてゐる。

かの魔女達は、或る意味から云へば、我々の心の底に人知れずある sinful desire 罪ふかき慾望を具象したものでもある。彼等はマクベスに惡意を起させる爲めに道に現はれるのでなくて、マクベスの驕ぶれる心に既に充分芽ぶいてゐた惡意があつたから、彼等は之を出迎へたに過ぎない。シェークスピアは之を示すの用意を決して缺いでゐない。マクベスの口を開く第一の言葉——

"So foul and fair a day I have not seen."

「こんな曇つて又晴れた日はついぞ見た事がない」

は三人の魔女の手をつないで唱ふ次の歌の反響である。——

Fair is foul, and foul is fair:
Hover through the fog and filthy air.

奇麗はきたな、きたなは奇麗、
もやと汚ない空氣を通つて飛びゆかう。

此「よいは惡い、惡いはよい」などいふ言葉は無意味として看過してはならぬ。斯く善惡醜美を混同することが惡魔の領土への出發點である。『惡よ、汝はわが善たれ』とミルトンの魔王は喝破してゐる。奸婬が惡だと明かに決つてゐれば、よし之を犯しても問題は單純に解決がつく。ところで、本能滿足で是認する場合もあることの理由にて、その善惡が未決定であるとすると、混亂は免かれない。社會の進展に伴ふて善惡の標準もおのづから變化してくる。その過渡期に惡が善やら、善が惡やら、明瞭な觀念が多數人の心にないとなると、惡魔は自分の世界の來たことを、手を叩いて喜ぶであらう。

さて此魔女等を最初に見つけるのはマクベスでなく、バンコーであるのだが、バンコーの誰何に何も答へず、痩せ細つた指を皺だらけの唇にあてゝ、何も問ふな沈默せよとの意味を示す。即ち迎へに出たのはバンコーをでなくマクベスをであるの意に外ならない。そしてマクベスが一度

口を開き、何者かと問ふと、三人は直ぐに口を開く、

1. All hail, Macbeth ! hail to thee, thane of Glamis !
2. All hail, Macbeth ! hail to thee, thane of Cawdor !
3. All hail, Macbeth, thou shalt be king hereafter !

第一の妖婆　萬歳、マクベス様！　お目出度う。グラーミスの御領主！
第二の妖婆　萬歳、マクベス様、お目出度たう。コウドアの御領主！
第三の妖婆　萬歳、マクベス様、ゆくゆくは王ともなられる方！（第一幕第三場）

學者は此の三人の魔女をスカンディナヴィアの神話に合せて、第一は Urda＝「過去」、第二は Verdandi＝「現在」、第三は Skulda＝「未來」と解釋する。兎に角第三の魔女が曲者で、その述べるところは皆將來に關し、第三場でも此だけはどこに行つたか報告しない。

此の三魔女の挨拶を、バンコーは大して氣に止めずに、疲れた心の迷ひ位に考へるが、マクベスは深く之に心を煩はされ、殆ど茫然として戰友のそこに居るのも忘れたかの如き有樣である。そこへ王の使者が來、マクベスの今回の大勳功を賞し、取敢へずコウドアの領主に任ずるといふ恩命が下つた。コウドアの前の領主は叛軍に加はりし爲め討たれ、その領土は空となつてゐたのであるが、その事は戰場にあつたマクベスの知らなかつたところである。此一事のためマクベスは忽ち大なる錯覺に陷つて、Two truths are told「二つは適中つた」云々とて將來の尙大なる宿命を期待する。

何故に錯覺といふか？　此魔女等の言葉は不思議の如くにして決して不思議でない。マクベスは元からグラミスの領主である。魔女がグラミスの領主萬歳と述べるに何の不思議はない。次にコウドアに至つては、王がマクベスをコウドアの領主に任ぜん事を表明したのは第二場の終りで、此時よりも前の事、魔女等が早くも之を聞き傳へてゐた事はあり得べき事である。すべて當るも八卦當らぬも八卦といふが、數學上から云つて、半分當るのはあたり前の事で、半分當つたからとて、不思議な豫言者でも何でもないのである。客觀的に考へて、魔女等のいふところは、第三の者の豫言の外、豫言らしいものはないので、前の二つの當つた事を不思議とし、第三も必ずしかあるべしとなすのが、既に怖ろしい慾望の反映と見るの外ない。「うちの子供は無邪氣ですが、つい惡い誘惑にかかつて」といふ事の不合理を思へ。誘惑は心の反映のみ。

しかし是れが普通の人の心理描寫である。すべての野心、功名心には手附が必要である。豫言

の適中らしいことがどれ程の自信をその人に與へることであらう。賭博をするものが偶した暗示の力に、家倉ほうりだして一か八かの爭ひをするのもそれだ。株の賣買者が御籤を賴みにするのもそれだ。吉凶の占ひを信じ、好い前兆などいふものを當てにする者は危い哉。マクベスは化性の魔物の催眠術的暗示に罹つたのである

もはや三十五六歳と思はるゝマクベス夫人は鋭い神經と、強い意志と、そして存外キャシャな脆い體格の持主であるらしい。彼女は曾て子をもつた事はあるが、今は死んだのか、子供はない。良人出征の留守をして本國の居城に居ると、良人からの使者が良人の書簡を齎らす。その手紙には日出度き凱旋の喜びだけでなく、不思議な魔女の豫言なるものが細々と記されて、末段に

This have I thought good to deliver thee, my dearest partner of greatness, that thou mightst not lose the dues of rejoicing, by being ignorant of what greatness is promised thee. Lay it to thy heart, and farewell.

この事は、わが將來の光榮を頒つべき親愛なる御身に、お知らせするがよいと思ふ。どんな出世が、御身に約束されてあるかを知らずに、當然の悦びを失つてはならないからである。

この事をとくと含み置かれよ。さらば。」（第一幕第五場）

とある。此手紙を讀むや否や、彼女は最早その豫言通りに行くに相違ない、否行かせなくてはならぬ、しかするにはどんな手段を取らねばならぬか、と冷靜に沈着に、實際的に、直ぐその手續に着手してしまふ。そして良人の性質の弱點を見て、自分が之を補はねばならぬと覺悟する。

虚榮！　人の前に自分を偉らがらうとする心。自分の社會上の地位を一階段だけ高めようとする願ひ。友人僚輩が大臣になつてゐるのに、まだ局長であるのつらさ。殊に官吏軍人階級などの、その嫉み、その願ひ！　人間も存外つまらぬ事に心を燃やすものである。

マクベス　彼は四十歳に近く、Bellona's bridegroom「軍神の花聟」と呼ばれるほどの勇敢な武將。體格も頑丈、併し氣質の特徴は幻影を見ることで、迷信に傾きがちなところがある。Bulwer Lytton の評言が一番簡單に要を盡してゐる。——

「マクベスは超自然的なものに對する信仰によつて最も影響せられ勝ちな性格、すべての印象を鋭く感受する人間。その意志よりも力ある、焦々する(restless) 想像力を有つた人。道德上の弱さと肉體上の勇氣とをもち、斷えず恐怖と斷行の間を交替する人、——良心の反對

を受けると戦慄するが、仇敵に挑まれると勇士になる男である。」

彼はリチャード三世のやうな、イアーゴーのやうな徹底的な惡人ではない。道德を全部捨て去つて野心に一切を捧げる事は出來ない。中途半端な善心が、事をやりかけては引とめに出る。計畫は立てるが、愈々やるのは多くは衝動で、盲目的にやる。夫人の「あなたは偉くはなりたいのです、野心がないわけではないのです。が、たゞ野心に伴はねばならぬ腹黑さがないのです。欲しくてたまらなくてゐながら、清淨無垢でありたいのです、曲つた事はしたくないが、それでもやつぱり、不正なものをお望みになる。」といふ批評は餘程當つてゐる。

慾望――それを滿たさんとする無理な手段――そして無理な手段で手に入れた慾望が果してどんなものであるか。吾々はそれを想像しなくてはならぬ。マクベスは幾分かそれを想像する。然るにマクベス夫人はそれを殆ど想像しない。夫人は良人の氣質を知つてはゐる。しかし彼女も多くの婦人と共通性をもつて、想像的よりも實際的である。

しかもマクベス夫人は自分が黃金の冠を得たいが故に無理に良人を唆かしたと思ふのは間違ひ。此場合夫婦とも同じ願ひである。たゞ良人はその性質上餘程躊躇し、逡巡するのに反し、夫人は斷々乎としてその遂行を迫るだけである。

王ダンカンはマクベス、バンコー二將軍の勳功を喜ばれ、就中マクベスの功を犒らはれ、まづ彼をコウドアの領主に昇進せしめ、その上いかにマクベスを信任してゐるかを示す爲め、その居城に臨幸される事になる。此報知は、良人の手紙を見て我を忘れて冥想に耽つてゐる夫人のところへ齎らされる。やがて凱旋の夫を迎へて、夫人は O,never shall suu that morrow see!「おお、決して、その明日といふ日を太陽にみせてはなりません。」（第一幕第五場）と、直ちに王冠を得る手近い道を決心して了ふ。

ダンカンは王である。忠節を神に誓つた王である、それを殺す法があるか。――

ダンカンは慈愛深い王である。マクベスの勳功に對し充分に報いてゐる。――

ダンカンは白髮の老人である。赤兒の手をねぢ老人の寢首をかくのは、武士の道に反き、男たるものゝする事でない。――

ダンカンは我家へ招いた客である。すべての注意を以て保護すべきである。――

是等の明々白々の事柄も、一旦惡意に滿ちた心には、一切反省の材料とならない。只この際を此上ない好き機會と見るばかりである。

斯くあらんとは知るよしもたきダンカン王は、機嫌麗はしくマクベスの居城に臨幸あつて、やがて盛宴は初まる。

夜は更ける。十二時を打つて酒宴は果てた。王と王の臣下一同も、旅の疲れと饗宴の酒の爲めに、それぞれ枕を高うして眠つて了つた。眠らないのはマクベス夫婦である。幻象を見るに慣れたマクベスの目には、二本の短劍が空に下つて、こちらへ來よとダンカンの居室の方へと導くやうである。合圖の鐘は鳴る。チーン。マクベスは、まツしぐらに短劍のあとを追ふて、奥殿さして闇のなかに消える。

入れ代つて、酒に半ば醉つて夫人が出てくる。氣丈な夫人も、此場合大膽になるべく酒の力を借りたのであつた。

マクベスは王の寢所に押入つて、いよ〳〵事を成し遂げて退つて來て、やつてしまつてからの樣子などを夫人と物語つて居るうち、どこからか門を叩く音が聞えてくる。

シエークスピアが寂寞を破つて戸を叩く音を入れ悲劇の深味を加へた手法は「オセロー」（第五幕第二場デズデモーナ殺害の場）にも見るが、「マクベス」の此戸を叩く音は、殊にすぐれた効果を與へる。叩く、叩く、叩く。誰が叩くのか。實際は、前夜からの王命により早起きして推參したマクダフとレノックスの兩將が叩くのであらう。しかし詩的にいへば、神が叩くのだ。人の社會に秩序を與へる宇宙と人類の大なる法則が叩くのだ。燈火をもつて戸の外に立つ神秘の人の叩く音だ。叩く、叩く、叩く。その音は、地獄のドン底より立ち上る恐ろしい呻き聲のやうに、深く恐ろしく耳から這入つて心の底の底に響く。此音に耳をかす人が人間である。此音に耳を藉せばこそ、人間の社會は成立する。イアーゴーは是を聞く耳を持たないか、若しくはわざと蔽ふて聞くを欲しないであらう。

叩く、叩く、叩く。戸の神秘性――夜と晝との境、生と死との境。此事に關して具さに說いたDe Quinceyは、On the Knocking at the Gate in 'Macbeth' と題する其名論文の中に白狀して「自分は幼少の時から此叩く音に、何故かは知らず不思議な影響を受け、それは殺人者に對し特殊な怖ろしさと莊嚴の深さとを反映した」と云つてをる。重い戸を隔てゝ、一方には人殺し君殺しの夜と、一方には之を明るみへ持出さうとする晝とが相對峙する。それは此世と地獄とを隔てる戸である。まだ泥醉の醒めやらぬ寢ぼけた門番が、半ば夢見心地に自分は地獄の門番をしてゐる積りになつて、ふざけて冗談を述べてゐる言葉ほど、戸叩きを象徴化して怖ろしくも藝術的な

ものは他にあまり見ない。近年メーテルリンクは之を學んでか "The Interior"「內部」や "Death of Tintagiles"「タンタジールの死」を書いて、戸に神秘の意を寓してゐるが、そこに心を迷はす不可思議さは十分にあるも、沙翁の此れほどに眞實性と迫力とを持つてゐない。

城門は開かれる。いつものやうに現實の世界が現はれる。もう東はほの〴〵と白んで、魔の夜は明ける。同時に大逆事件は發見せられる。混亂、騷擾、叫聲、狼狽、不安、疑惑、その眞只中にマクベスは豫定の如く、うろ〳〵する二人の侍從を下手人と見做して、たゞ一ト太刀に斬つてしまふ。これ彼等を教唆した罪を二人の王子に被ぶせんとの策に出たものと悟つて二王子は身の危險を虞れ、どさくさ半ばに、それぞれ逃亡する。

この弑逆の變事に就いてマクベスに幾分の疑を抱かぬ者はないが、力が正義のやうな觀があつて、誰も此威勢並びなき大將に向つて、露はに嫌疑をかけるものはない。マクベス夫婦の筋書き通り、王冠は彼等の頭上に與へられる。そして第三幕の初めに於て、莊嚴なる樂の音につれて、群臣を從へ、王冠を戴き、兩人手を取つて出て來るマクベス夫婦を見たものは、もう皆な默つてしまふ。

マクベスは大事を成すの發端に當つて幾度か躊躇した、が、夫人にけしかけられ、異常の力を振つて事は遂げた。然し一旦やつた上、再びその恐ろしい結果を見るべく短劍を置きに元の部屋へ行く力はなかつた。仕終るか否かに、反省して、しなければよかつたと悔いた。

けれど夜が明けて、同僚どもと面と面と見合せた時、彼れの勇氣は——夫人の氣遣ふ要もなく——回復して、諸將の前に跡始末をつけるに臨んで彼は凜然として男らしく事を運び得た。然るに今や王位に卽き王冠を戴いて見ると、更に不安と心配が附纏ふ。之れさへあれば凡べての望み足ると信じ切つた者の如何に空しい事よ。

マクベスは王を殺すと共に、自分の最も重大なものを殺してしまつた。彼は王を弑し了つた時、どこやらに「二度と眠るなよ、マクベスは眠を殺したのだ、マクベスはもう二度と眠れないぞ」と叫ぶ聲が耳に響いて來たと彼れ自ら云つてをる。斯うして最早安眠を惠まれないマクベスの身體が——精神が荒まないで何とあらう。眠を殺した彼は深更人無きとき悔恨の念に打勝つことできず、罪の意識は蠍の如く日毎に深く胸に喰ひこむ。と同時に彼は次第に夫人からも遠ざかつて來た。荒みきつた彼には、顏を合せ瞳を合せるのも何となくをぞましくあるかの樣に、いつの間

にやら夫人と疎ましくなつてゐた。

Nought's had, all's spent,
Where our desire is got without content.

「みんな使ひ果して、獲るところは一つもない、望みは叶つても、滿足はないんだから」（第三幕第二場）

とマクベス夫人は呟いて溜息をつく。夫人は無論善人ではない。さりとて良人を漫りに唆かし兇惡無殘の行ひをさせた人非人のやうに解釋するのは、當らない。自らも、一國の王后たるの榮譽を一度は擔つて見たいと思ふ虛榮心は勿論あつたが、しかし此立派な實力のある良人に一度は天下を取らしてあげ度いと思ふ平凡な而かもまじめな、妻たるのやさしい願ひもあつた事は、忘れてはならぬ。兎に角、それは正しい方法に由つて得られても、存外空虛なものである。況んや不法な方法にて之を得たに於てをや。幸福の誤算！　その幻滅！

しかも惡事に最も恐ろしいのは、只一回の惡事で事は濟まない。勢の加はるところ、雪崩の落下するやうに、一歩は一歩と惡の重みを增し加へねばならぬ。マクベスも王を弑した丈けでは止められず、其結果を安全にし己れの地位を確保せんため、かねて秘密を知つてゐる僚友のバンコー、及び王位繼承者と魔女に豫言せられた其の男子を殺さずにはゐられぬ。そこで卽位の披露に催す饗宴に彼等父子を招き置き、人殺しを專門とする兇漢を雇ふて、これを出席の途上に要し、バンコーを暗討ちにしてしまふ（但し其子は遁れ去る）。此は夫人が承知の上の事ではない。

バンコーは四十七八歲。正史によればマクベスと心を合せて王を弑するのであるが、作者は時の英王ジェームス一世がバンコーの後裔たる關係から、同情的の筆鋒で餘程その性格を善く描いたといはれる。けれども正直忠誠の士とは思はれない。進んでマクベスの惡意を豫防せんとする意志は少しも見えない。寧ろマクベスに事を成立させ、自分はその甘い汁だけ吸はうといふ老獪なところが見える。が、それほど惡く腹黑くはなく、寧ろ弱い、曖昧な風見靈洞ヶ峠の人とも見られる。それで今斯くマクベスの爲に暗殺されても、觀衆はあまり深く氣の毒にも思はない。

然るに幻を見るに慣れたる想像力强きマクベスは、この宴會の席上に、衆人稠座のなかで、バンコーの亡靈を見る騷ぎに、折角の卽位祝ひの盛宴も滅茶滅茶。人々去つたあとのマクベス夫妻のさびしさ、二人は生きた屍に過ぎない。否それよりも惡い。

それからマクベスは、もはや誰れ一人腹心と呼ばるべき者もないまゝ、例の魔女達を相談相手にと、其の洞窟に訪うた時、特に硬骨の將軍マクダフに油斷するなとの注意を受けたところへ、今や自分に取つて唯一の恐るべき人物なる此將軍が英國へ落ち延びたとの情報に接したので、その不在中に刺客を遣はして、彼れの居城を奇襲し、彼れの妻子一族を鏖殺する。これも勿論マクベス夫人と協議の結果ではない。

此あたりから、さしも千軍萬馬の間を鍛へに鍛へて來たマクベス王の體力にも、著しい衰へが目立つてきた。焦燥、疑懼、片時も安んずる能はず、言ふこと爲すことが屢々顚倒し、食卓には毒のあらんを氣づかひ、晝はひねもす敵の討伐に餘念なく、夜は夜もすがら刺客の刄を怖れ、すこしまどろめば、惡夢に驚かされて冷汗褥を濕ほす。この底しれぬ悶を遣るものは、僅に血の酒宴があるばかりである。あれも殺せ、これも屠れ！　マクベスはそこに強いて慰みを見出すが、さて夫人はどうあらう？

彼女は今までのところ、良人が示すやうな煩悶を漏らさない。それは或る批評家のいふやうに彼女に良人の缺ける證據ではなくて、彼女が彼れの如き想像癖を持たぬことを語るのみである。マクベスの如く幻影を見て戰慄するのは、實際的な彼女の事ではない。彼女には彼女らしい悔恨の表現がある（後に知らるゝ如く）。

もと〳〵頑健な婦人でなく、只神經の興奮の力と意地の强さとのみで支へてきたマクベス夫人は、遂に病を得た。いかに氣丈でも、いかに意地張りでも、使ひ過した神經は、もう耐える力を失つて、病氣となるのは無理もない。the body takes revenge upon the soul と Arthur Symons の曰ふ如く、肉體が魂に復讐する時が來た。

誰か曰ふマクベス夫人に良心なしと。見よ、良心を缺く者に次の如き事があらうか。

第五幕に入つて作者は、我々が第三幕の終以來姿を見失つたマクベス夫人の物凄い、不可思議な、醫師も匙を投げる病狀の描寫に第一場全部を充てゝ居る。

「寢床から起き夜のガウンを羽織つて、戸棚をあけて紙を取出し、疊み、其上に何か書いて、讀んでから封をして又寢床に歸る、しかも其間中全く熟睡のまゝ」。――一種の精神病、夢遊病(sommambulism)！

城中の息のつまるやうな闇と靜けさが、長く、長く、續いた後、高い階段の奥の奥に、一點の光が現はれた。光は靜かに、全く靜かに、階段を一つ一つ降りてくる。その近づくにつれ、光は、

闇にはえる白い或るものの姿を伴ふてゐることが分かる。寢衣を纏ふた病める夫人である。その純白な寢衣に劣らぬ蒼白い顏に、眼ははつきりと、大きく見張つてゐるが、その瞳孔に物の影の映るのではない。彼女の心は眠りながら、その手は高く灯火をかゝげ、その足はしと〳〵と階段を踏みしめて、降りてくるのである。

降りつくして燭臺をかたへに置き、彼女は血を洗ふかのやうに、しきりに手を擦り又擦る。そして深い〳〵溜息と共に「まだ茲に汚點がある」、「さ、やつつける時刻ですよ」、「地獄は暗いつてねー」、「全く思ひがけませんでした。あの老いた人に、あんなにまで澤山血があらうとは」、「お手をお洗ひなさい」、「どうしても此手は綺麗になるまいて？　もうよし、ね、あなた、もうよしませう」、「まだ血の匂ひがする」などと或は囁き或は呟く。忽ち夫人は「あッ」と叫んで、醫師と見とりの婦の立聞きしてゐるのに氣づき、驚いて、燭を取りあげ、つと飛びのく如く見えたが、それはほんのさう見えただけで、彼女の神の眠りはまだ覺まされない。再び靜々と歩みを運んで、長い〳〵階段を上つて、遠ざかつた光はまた闇に消えてしまふ。

夢中遊行！　赤い血、白い衣、灯の光！　何等の凄愴、何等の沈痛、こんな印象の深い場面が他に何處にあるか。眞に古今を絶する靈筆ともいふべし。

此場の畏ろしい、シーンとした、ゾツとするやうな光景は、古來幾多の名女優が演ぜんと志して而して皆な絶望したところのものである。

蓋し、あの氣象の夫人として、無意識的にこれほど心の底の秘密を曝露し、語るまじき魂の惱みを語ることは、「眠りの惠みを享けながら、同時に目覺めの行ひをする」この不思議な病ならでは、あり得ないことである。彼女の意識が少しでも働いてゐる時、その行ひに、その言葉に、此告白の千が一でも彼女が示すやうな事があれば、それこそ性格上の自家撞着である。いかなる場合にも人には示すまじき其純白の寢衣姿こそ、本來の良心をさながらに象徴して、我々は茲に嚴かなる天の配剤そのものを視る心地がする。

果然マクベス夫人は良心無きにあらず。しかも良心の惱みに命を墜すことゝなるのは、マクベスではなくて、却つて彼女である。

罪、それに對して良心が必然的に科する罰、これを示すのが劇「マクベス」に於ける作者の着眼點である。

却説、かゝる間にもマクベスは兵を督して寄せくる敵兵に當らねばならなかつた。曩きに危難

を知つて早くもイギリスに亡命した先王の長子マルコムは、來り加はつたマクダフその他の諸將と力を合せ、イギリス王の援兵をすら乞ひ得て、今や旗鼓堂々、暴君を倒せと勇みたつてスコットランドに攻めよせたのである。風を臨んで行き投ずる者日に夥しく、マクベスの旗下は次第に手薄になつたが、傷ける猪は少しも怯まない。しかし彼とても鬼神ではない。來る報知も、來るしらせも、味方の不利を告げぬことのない時、さすがに心許ない、寂しい。左右を顧みて、共に兵を語るべき對手さへない。代々武器係りを勤める身分卑しい男を、唯一の友でもあるかのやうに、彼はしんみり述懐を漏らす——

I have lived long enough: my way of life
Is fall'n into the sear, the yellow leaf;
And that which should accompany old age,
As honour, love, obedience, troops of friends,
I must not look to have; but, in their stead,
Curses, not loud but deep, mouth-honour, breath,
Which the poor heart would fain deny, and dare not.

俺も長過ぎるほど生きて來た。わが世も
既に傾いて、萎れた朽葉だ。
しかも老年に當然伴ふべき
名譽も、愛も、忠順も、群をなす友も、
望むにも望めない俺なのだ。その代りに有るのは
呪詛だ、聲は高くないが根深い呪詛だ。口先だけの尊敬や追從だ。
可愛さうに、それを拒みたくても拒み得ないのだ。（第五幕第三場）

彼は最早何の悦も望も抱き得ず、生きるに疲れた心は、只本能的に生に執着するばかりである。そして遺に凛々しく冑ふて出陣の用意をする。そこへ、時もあらうに、祝つて送らるべき首途に、奥にはワツと女共の泣聲がする。惱み煩うた夫人が、遂に最後の息を引取つたのである。それは夫人が手づから奪つた命であるとも噂せられた。手にした王の笏杖をマクベスは思はず落す。

愛妻（然り、どんなに疎ましく離れ〴〵になつてゐても、マクベスに取つていつまでも愛妻たることに變りはなかつた）に先きだたれて流石の荒くれ男も、

She should have died hereafter;
There would have been a time for such a word.

To-morrow, and to-morrow, and to-morrow,
Creeps in this petty pace from day to day
To the last syllable of recorded time,
And all our yesterdays have lighted fools
The way to dusty death. Out, out, brief candle!,
Life's but a walking shadow, a poor player
That struts and frets his hour upon the stage
And then is heard no more: it is a tale
Told by an idiot, full of sound and fury,
Signifying nothing.

もう少し生かして置きたかつた、
さうした報らせを聞くべき時もあつたであらうに。
翌日、翌日、翌日といふ日が、
このつまらない人生の旅路に、日毎靜かに歩み去つて、
遂に時の記錄の最後のところに達するのだ。
そして我々の昨日といふ日は、愚劣な人類共に
塵に歸する死への道を示すに過ぎない。消えよ、消えよ短い蠟燭！
人生は畢竟歩む影、慘めな俳優だ。
わが時とばかり舞臺の上を濶歩し又怒號するが、
やがて二度とは聞えなくなる。それは白痴の語る物語同樣、
聲もあり、騒ぎもあるが、何の意味もない。（第五幕第五場）

と、身に泌みて人生の無常を觀ぜずにはゐられぬ。涙も今は冷たい。

彼は今や唯適當な死に場所を求めるばかり。絶望ながら武者ぶり由々しく攻擊軍と戰ひ又戰ふ。そして血みどろになつて、不圖マクダフ將軍に遭遇した。マクベスは願はくはマクダフと鬪ふを避けたいと思つた。恐れではない、罪なき彼の妻子を虐殺した良心の責苦は、彼をも同じ刄の錆とするに忍びないのであつたが、やがてマクベス自身遂にマクダフが恨みの刄に倒れる。そして王位はマルコムによつて繼がれ、闇く冷たい夜は、やうやくほの〴〵と明けそめる。

薄暮に初まつて月夜に閉ぢた此一篇の劇は、全く夜に終始する劇であつた。

斯くして、怪しげなる神託の吉凶に大義公道を忘れた者の報ひは來た。信ず可からざるものを盲信し、賴むまじきものを恃んで、暴虐を恣にしたる暴君の末路、それ此の通りである。

ヂョージ・フレッチャー此物語の教訓（レッスン）を説明して曰く――

『簡約して言へば、此悲劇の主要發動點は、かの怪しき妖婆等を興奮せしめる兇惡な精神の中にも、若くはマクベス夫人の熾烈な、そして意志の强固な野心の內にもあるのでなく、主人公自らの全く平均を失つた魂そのもの〻中に見出さる。彼の如き極度に主我的な性格に加へて、心をいらつかせる如き妄想に耽る人物は、普通の場合に於ても病的な恐怖を極量に起すに相違ない。然し此恐怖の念は、彼れの場合に吾人の見るが如く、盛なる肉體的の勇氣と必ずしも不調和でなく、却つて必然的に全然たる道德上の卑怯者を生むのである。故に此樣な、人生の眞直な仕事にも充分資格のない人物が、一個の大なる血なまぐさき犯罪を行つて、野心の目的を把むやうになつた時、此成功に由つて得た新しい虛僞の位置そのものが、彼を嚇かし、怖れしめ、怒らしめて、彼がいふが如く「身震ひのつく想像」から脫却する爲に、更に大なる恐ろしい事を行はしめ、遂に避くべからざる破滅に到らさればやまず。』

一たび一身一家の私慾の爲に神人共に容れざる罪惡を犯して、そこに止まるに由なく、罪は罪を生んで、更に僚友を屠り、無辜を刑し、老幼婦女を亡ぼし、民を虐げ、弱きを害して、自から制する所以を知らず、「不朽の寶たる己れの靈魂を敢て人類共同の敵たる惡魔の手に付（わた）し」（彼れ自ら曰ふ如く）、自家胸底の「小やかなる靜けき聲」の呵責の中に、天地の呪咀の裡に、永劫の闇黑地獄へと墮ちてゆく。嗚呼これ野心の悲劇、而して又良心の悲劇！

此作の特徵を擧げると――

第一　魔女の出現。超自然的な亡靈出現などは他にも幾らもあるが、Fate 宿命を如實に具象化したやうな魔女の出現は、他に見ざる著しい點である。「マクベス」に於ては、環境と性格の接觸が最も巧みに取扱はれてゐる。迷信的な北方のスコットランド、殊に人を迷信にし易い戰爭內亂の時代、多くは霧のたち込めたる、ほの暗い黃昏又は夜、そこへ現はれるあの妖婆達。若しも此等の魔物が現はれなかつたら、マクベスは或はあの弑逆はしなかつたであらう。魔物が現はれても、マクベスでなかつたら、あの大事は起さないに相違ない。若しくは魔物はマクベスに向つてのみ現はれるものでもあらう。そこに不離不卽の關係がある。

第二　幻象 visions の多く出る事。主人公があの通り想像力過敏症で、十人並はづれて想像强く、假想妄想をさへ觀、遂には明滅する炬火のもとに有り〳〵と亡魂を看るほどであるから、幻

影異象が屢々現はれる。「……それを假に生靈の姿と現ぜしめ、その幻の力をかりて、マクベスを破滅に引導してくれよう。あの男に、宿命を侮り死を嘲らせ、空な望を抱かせなくてはならぬ」と第四幕に於て魔物の女王が歌ふやうな次第で、幻象はマクベスの運命に與かつて力あること少なからぬのである。亡靈なんて馬鹿々々しいなどと謂ふのは、藝術を知らぬ者のこと。それはホーマーの昔しから文豪の多くが使用する、無形の情念を有形に表現する一種の手段である。

第三　局面展開の快速。事件が矢繼ぎ早に進行してサッサと片づき、主人公が忽ち旭日昇天の勢で立身するかと思ふと、忽ち夕日の如く沒落する、其の興亡の神速さ！

第四　最も深い詩藻(poetry)が多量にある事。第三幕に於ける門叩きのくだり、第五幕に於けるマクベス夫人夢遊病の描寫、同じくマクベスの絶望的悲觀の述懷、同じく彼れが人生のはかなさを感ずるところなど。

尙前記の如く作者が此劇に魔女を使つて居るのは、當時の英國新王ジェームス一世が頻る迷信深く魔物魔法の存在を信じてをり、又當時次第に勢力を得つゝあつた淸教徒 Puritans も迷信的で、矢張り巫女などを信じてゐたので、それらの事情と關係があらうと云はれる。

此ジェームス王は嘗て花嫁をスコットランドで迎へる時、暴風雨が起つて果さなかつた。これ巫女の所業であると二百人を捉へ、之を火刑に處し、その處刑の場に自ら臨んだ。此等の妖婆は箒や其他見えない車に乘つて飛行する事が出來、又空に消える事が出來ると白狀したが、此際は實際空にも消えず刑に就いた。一五九八年には六百人の巫術使ひの老婆が燒殺された。又此王は Demonology（怪力魔神論）といふ著書を出版し、魔物魔法の事を記述してをる。

「マクベス」篇中の三人の魔女には名がないが、その外にヘケティ(Hecate)といふ名の「魔物の女王」が登場して、三人の「師匠」となり指揮者となつて居る。此は古き希臘神話中の不思議な神で、力强き女神。天に於ては Luna, 地に於ては Artemis, 下界に於ては Proserpine であるといはれ、觀音式に、三人並んだ像が出來てゐる。三體神又は三頭神と稱せらる。彼女は Proserpine の探索に殊に力を入れたので下界の神となり、夜になると怖ろしい下界の惡魔を地上に送り出すし、又魔法を敎へる神とせらる。其住所は二叉路、墓場、人殺しの血の流れた所。時に死人の魂と共に地上にさまよひ、その來る時犬の遠吠でわかる。Athens では月々の終に十字路に皿を備へて此神を祭る。それを貧民が食ふ。供物は犬、蜜、黑い牝の小羊。

28. Timon of Athens.
「アセンスのタイモン」

五幕、一七場、總行數二三三五。

アセンスの貴族タイモンは限りなき豁達大度の富豪である。彼は客を好みて豪華なる饗宴を催し、饗宴には常に金銀珠玉を分散して惜まず、且つ純直の性質なれば來り集まる者を悉く眞の友と思ひ、彼等の爲に盡すを無上の樂とする。然し財源には限りがある。彼の宰領フレーヴィアス(Flavius)は之を憂ひて屢々彼の反省を求むのであるが中々聽かれぬ。(以上第一幕)。

債主等の督促漸く急なるに及び、初めて我が財政狀態を悟つたタイモンは愕然として驚いた。然し彼は思ふ、彼には幾多の恩を施した友がある。急に際して喜んで援助を與へて呉れるであらうと。よつて僕を四方に遣はし友の助けを求めしめる。(以上第二幕)。

財によつて集つた不義の友は色々の口實を設けて謝絶する。中には逆に融通を賴み來る者もある。初めて人の背恩にして賴む可らざるをつくづく感じたタイモンは、改めて最後の饗宴を張る可く招待狀を發する。饗宴を聞いて集つた不義の友等は、昔の豪華に代へて食膳に只一椀あるのみに驚く。而かも其一椀には湯が盛つてある許りである。タイモンは飽氣に取られた會衆の顏に其湯を打ちまけ、激しき叱責の辭を述べて彼等を室外に追ひやる。(以上第三幕)。

あらゆる人間を惡み初めた彼は市を去つて、森中の洞穴を家とし、木の根を掘つて食とする。彼は食を得る爲に土を掘る時、圖らずも莫大なる金銀を發見する。然し今は此財寶も已が宿昔の愚を思ひ起さしむるに過ぎぬ。彼に二人の眞の友がある。一人はアルシバイアディーズ(Alcibiades)といひ、アセンスの貴族等がタイモンに對する所置を憤り、義軍を發して彼等を懲罰しようと將に進軍中である。他の一人は彼の宰領で、窮厄の間に主を棄てず、彼を森に尋ね出して、彼に隨從してゐるのである。彼は今發見したる金銀を半ばを分けてアルシバイアディーズに送り、其成功を祈り、半ばを宰領に與へ、再び來て彼れを見る可らずと命ずる。(以上第四幕)。

アルシバイアディーズの近づくを聞いたアセンスの議官等は、再びタイモンの事を想ひ起こし、其援助を乞はんがため森に彼を訪問するのであるが、此嫌人者は辛辣なる罵詈と咒詛とを以て彼等に應へ、彼等は得る處なくして再び市に歸り、遂にアルシバイアディーズに降服する。勝利者が已れとタイモンとの數々の仇敵をそれ〴〵擇り出して處罰してゐる時に、タイモンが自らを憐れむ辭世を彫んで森の洞穴に死んだといふ報知に接する。(以上第五幕)。

此篇の著作年代については、一六〇七年説、一六一〇—一一年説などがある。

友を過信し寛仁大度に産を失ひ、精神主義と物質主義との衝突に破れて、果ては世を憤り人を咀ひ、山に入つて人間を避け、遂に狂せる如くにして倒死(のたれじに)した大憎人家(ミサンスロープ)の一生を描いて、辛辣を極めたものであるが、作中の幾部分は沙翁の筆ではないとの推定が多い。

29. Antony and Cleopatra.
「アントニーとクレオパトラ」

(巻末附錄所載著者の本篇第一幕譯稿參照)

五幕、四一場、總行數三〇二四。

シーザーを暗殺したブルータスの一黨は戰に破れ、羅馬の大領土はアントニー、オクテーヴィアス、及びレピダスの三頭政治に移る。其一人なるアントニーはその支配下の埃及の女王クレオパトラ(英音クリオペートラ)の妖美に迷はされ、歷山府に伴ひ行きて豪華なる肉慾的生活に耽溺してゐる。羅馬よりの使者梯の齒を引くが如くに到るのであるが、彼は更に顧みない。遂に其妻フルヴィア(Fulvia)死し、又ポムピイアス(Pompeius)が兵を擧げ海軍で故國を攻撃するといふ報知を受けて、漸く戀々の情を後に遺して歸國する。(以上第一幕)。

アントニーは歸國して不在中の事故に就き他の執政官等に詫び、尙連盟を固くする爲、オクテーヴィアスの妹オクテーヴィア(Octavia)と結婚し、ポムピイアスとも和睦が成立する。(以上第二幕)。

併し此結婚は不成功であつた。彼は一方に埃及女王に心が殘ると共に、妻の兄オクテーヴィアスが眞に和を欲しないと考へ妻を家に歸し、自らは又東方を指して旅立つ。かゝる間にオクテーヴィ

アスは次第に其勢力を加へ來り、ポムピイアスに宣戰して之を破り、レピダスを囚虜となし、天下統一の邪魔になるは此アントニーあるのみとなつた。彼は妹を棄てたアントニーの不信を責め、問罪の師を擧げる。

戰爭はアクチアム(Actium)に於ける海戰に初まり、埃及の海軍は散々に破られる。アントニーは一旦和睦を欲したが、其成らぬのを見て却つて挑戰する。(以上第三幕)。

次いで起つた決戰に於て、アントニーは第一日の陸戰には目覺しき戰捷を得たが、第二日に至り友軍にも部下にも次第に彼に叛きて敵に降伏する者が出來、流石勇猛の大將も大いに敗れて志氣全く沮喪し、自殺を圖り、クレオパトラの膝を枕に死んでしまふ。(以上第四幕)。

クレオパトラは堅氣でなく浮氣女ではあるが、アントニーには熱愛を持つてゐた。今や何を樂しみに生きながらへん。且つ傳ふる所に由れば、オクテーヴィアスは彼女を人質として羅馬に連れ行き其凱旋を飾らんとする心である、最早躊躇すべきに非ずと、侍女を從へて靈廟の内に閉籠り、兼ねて用意し置ける毒蛇に身を咬ませて死ぬ。(以上第五幕)。

吾々の祖先に、五千石の旗本三浦肥後といふ人があつて、一首の俗謠を作つたといはれる。それは

君と寢ようか　五千石とろか　何の五千石　君と寢る

といふので、「寢る」といふ言葉がいかにも肉感的に響く嫌ひがあるが、兎に角一種の戀愛至上主義を唱へたものである。

三浦肥後は只五千石の收入ある一小領土を戀に代えたに過ぎないが、わがマーク・アントニーは當時の天下の三分の一を棒にふつて—否、考へ方によつてはローマ大帝國全部に代えて—一婦人の戀に獻げたのであつた。普通アントニーは天下の遊蕩兒、世男的色男の標本であり、クレオパトラは古今の妖婦の典型であると考へられる。そして「アントニーとクレオパトラ」の一篇は、此の蕩兒と妖婦との肉慾生活と其の滅び行く徑路を素晴らしく又すさまじく書いた慰みの讀物であると考へる人もある。果してさうであるか。

哲學者であり詩人であり、そしてシェークスピア批評家中の最も天才的な批評家たるコールリッヂの、此劇に對する批評は屢々引照せられるところである。曰く——

『シェークスピアの歴史劇全部のうちで、「アントニーとクレオパトラ」は遙か傑ぐれて最も驚歎すべき作である。彼がこれほど詳細に史實を辿つた作は他になく、しかもこれほど天人的な

力といふ考へ（the notion of angelic strength）を印象させる作は他に殆どない――大方これ以上力強くそれを印象させる作は一つもないであらう。これ大にその樣式（manner）に負ふてゐるので、火の如き威力が始終を通じて弛みなく支へられてゐるのである。』

コールリッヂの此言葉は最負のあまりの狂熱的な讃語であるか。

シェークスピアが此劇を書いたのは恐らく一六〇七年又は一六〇八年で、彼れ四十三四歳の頃、四大悲劇を書いて人の魂の底の底を覗いた後である。此圓熟の頂點にある作者が、單に一遊蕩兒と一娼婦との荒淫生活を描いて滿足したであらうか。

私は此悲劇を考へると同時に、根本の問題卽ち藝術とは何か、戀愛とは何か、といふ大きな難かしい、人生そのものの如く幾度びか尋ねられ幾度びか疑はれ而かも到底十分な解決に達し得ない一大問題に當面せずにはゐられない。

アリストートルは廣義の Art（藝術といふ制限した意味でなく廣く「人の營み」「人工（ひとわざ）」といふほどの義、卽ち Nature と對立するもので、生育と荒廢との二作用をするのが「自然」、荒廢に打克つて生育を昌んにするのが「人のわざ」である）を下の如く分類する――

Art
- useful art――人生の生存に必要なものを供する術（わざ）
- fine art――快樂
  - 無害の快樂、休養
  - 理智的享樂（rational enjoyment）

　を與ふる術

此の快樂といふ言葉は非常に曖昧に又誤解を起し易い。無害有害の區別も甚だ明白でない。理智的と云つて見ても、もともと感情の問題である快樂であれば、兩者の交渉は更に他の制限を要求するかも知れない。サンタヤナ教授も美を定義して、pleasure objectified（客觀化された快感）といふ語を用ひたが、此 pleasure もいろいろの定義と制限とを要して初めて筆者の眞意と合することになるであらう。

さて此の人間の營む事――art「人のわざ」には、物的生存に役立つものと、心的生活に役立つものとある。

人類の進化を考へて見る。石や土くれの所謂無生物から植物となり、それからアミーバなどの高等植物か原始動物か區別の分らないやうな時代を經て、次第に本能的生活を營む動物となり、その間からボツボツ意識生活の端緒を作り、人間に到つて殆ど完全な意識生活を營むやうになつた。かく心といふ靈妙な働きが、岩の間から砂の底から次第〳〵に現はれて、滲み出て來て、今

表面に流れてゐるが、その流れは遂にはどこへ行くのであらう。物的生存の終ると共に、はたと杜絶えして、姿も形もなくなるのであるか。それとも永遠に流れ續いて止まぬものであるか。

此人生の物的解釋と心的解釋とは、どうしても吾々のその孰づれかに味方せねばならぬ一生の關ケ原で、いづれに附屬しようかと風見をし洞ケ峠に立籠つてゐる事を許さぬものである。

そこで、精神卽ち心の永遠性、換言すれば魂の存在を假定し若しは信仰することにより初めて藝術は存在すると信ずる。エマースンの詩の定義は全く私の云はんとする所を謂つてゐる。――

『詩とは物の精神を表現せんとする努力である。卽ち獸的な肉體を過ぎ、肉體をして生存せしめる生命及び靈智を探知せんとする不斷の努力である。』

もとより「肉體をして生存せしめる生命及び靈智を探知せんとする」ものは、獨り詩のみではない、藝術家のみではない。思想家も宗教家も矢張り人生の意味を知らう、生命の根元を究めよう、とする人々である。

兎に角、私は人間の營みを五十年の此肉體的生命を支へるに役立つ努力と、百年千年を以て終らない靈的生命を顯示し培養してゆく努力との二つに分ち、後者の努力の一部分として、藝術といふものが存在し人生に役立つてゐると信ずるものである。之に反して、若し「人生は五十年である。此肉體の暖く、此心臟の鼓動し、此呼吸の規則正しく行はれてゐる間のみが人生である。それ以上にあると思ふのは夢を信じてゐるのである」と考へるならば、個樣な人々に取つては藝術は存在しない、しても僅に此肉體を强め暖め若くは休める道具の一種に過ぎない。それは煙草の如く、疲れた時の一服によつて、腦の働きを一時休息せしめる効用はあるかも知れない。それは酒の如く、我々の冷えたる血管を暖め、若き妾を訪づるゝ際に便利な狀態に我々を置くかも知れない。しかしそれ以上はない。私は藝術が個樣なものである事を拒否する。

私の藝術の定義は――

『藝術は魂の永遠性を信ずることより生ずる人生を愛する心の具體的表現である。』

卽ち藝術は、魂の永遠性と人生愛と具體的表現と此三條件を具へねばならぬ。

汝の生を愛せよ、汝の一日を愛せよ、あの日光、あの空氣、あの清らかな水を愛せよ、あの無心の小兒、あの眞面目な動物を愛せよ、勿論汝の同胞を愛せよ！　すべて斯ういふ心から藝術は生れる。しかしそれが單なる現世享樂、快樂追求と區別せられるのは、魂の永遠性を信ずるといふ事に由らなければならない。一方に於て我慾と卑賤な娛樂、他方に於て美と藝術、この二者が區別せられるのは、全く此點にある。

そして私は更に一歩を進めて敢て曰ふ、――藝術と同様に、戀する人も又、その恍惚の間に人生の意義を把み、人生に於て朽ち果つべきものと、朽ち果てざるものとを端的に悟るものであると。戀愛にはそれほどに、單に肉體上の子孫を作る作用の一つの現はれといふ以上に、一種の神秘な深遠な意義があるやうに私は解釋するのである。

「アントニーとクレオパトラ」は、沙翁の戀愛悲劇で男女の名を冠してある三つの劇――「ローミオーとジューリエット」と「トロイラスとクレシダ」と此篇――の中の最も絢爛な、最も豐潤な、そして最も興味ある作である。此劇は「ジューリアス・シーザー」の書かれてから六年を經た後の作であるが、「シーザー」に於て閉ぢた幕の殆ど直ぐ次に幕が上がるのである。

痛ましい錯誤の悲劇、そして大きな政機の移りゆく興味ある見ものである「ジューリアス・シージー」に於て、既にマーク・アントニーは華々しい、目さましい大立者であつた。それからブルータス等がマセドニアの平原フィリッパイに於て戰敗の後、ローマの大帝國――當時の天下は、大シーザーの養嗣子オクテーヴィアス・シーザーとアントニーの二人の掌中に歸したが、ほんのデク人形としてレピダスを加へ三頭政治 triumvirate といふ事になり、そしてアントニーは東方を、オクテーヴィアスは西方を、レピダスは南方アフリカを領することになつた。

アントニーはその三十九歳の時、其領地小亞細亞のシリシアに於て、その支配下たる埃及の女王、芳紀正に二十八歳のクレオパトラに、シドナス(Cydnus)河上に初めて會見し、兩人は何ものを以てするも斷じて絶つことの出來ない緣(えにし)の糸を結ぶのである。當時畫舫を浮べた天下無双の美人と初對面の光景は、第二幕第二場の中に、極彩色のやうな豐艶華麗な筆で描かれてをる。

無論アントニーはフルヴィアといふなかなかの女丈夫の妻があり、子供もある身である。ローミオーの如き純潔な無垢な心から湧き出た戀ではない。クレオパトラとても先きの夫の子供が居り、大シーザーとの間に生れたといはれる男子さへもゐる身である。うぶなジューリエットではない。そこで沙翁が此劇に描いた此兩人の關係は肉慾一方の關係であると做し、男は女性といふものを、女は男性といふものを知り盡した揚句のはての腐れ爛れた肉の交らひであるといふのが、普通の解釋のやうであるが、私は之に同意することができぬ。第一に、「お互に歳を取つて來て此先き享樂の時日長くないから今の内に大いに性の歡樂を極めよう」といふやうな淺いセンシュアルな氣持のみで、男女の間がそんなに熱意を以て深く且つ固く結ばれ得るものであらうか。第二に、沙翁の靈筆といふも、雪を墨に書けるものではない。單なる爛熟せる肉慾的快樂への耽溺が、さう

容易く筆先きで美化するとは思はれぬ。靈筆たる所以は、そこにはない。斯くの如く謂ふのは、作者の狙ひ所の分からぬ議論ではないか。

アントニーのクレオパトラに對する惑溺ぶりは、迚も秀吉の淀君寵愛どころではない。フアイロー(Philo)といふ彼れの黨員が

Nay, but this dotage of our general's
O'erflows the measure: ……
……. . …his captain's heart
…… is become the b llows and the fan
To cool a gipsy's lust.
……you shall see in him
The triple pillar of the world transform'd
Into a strumpet's Fool ……

「いや大將のはまりかたと來たら全く圖拔けだ。あの將帥らしい心臟も、エジプト女の情慾を冷すだけの風櫃となり扇となつて居る。世界を支へる三柱の一本が變り果てゝ遊女の幇間となつてる樣だ」（第一幕第一場の初）

と口惜しがるのを始めとして、僚友や幕下の間に之を慨げき之を遺憾とする者多く、アントニー自身も

These strong Egyptian fetters I must break,
Or lose myself in dotage.

「此强いエジプトの足鎖を斷ち切らなくてはならぬ、さもないと痴情の爲に身を亡ぼす。」

I must from this enchanting queen break off.

「是非ともあの妖婦と手を切つてしまはねばならぬ」

Would I had never seen her !

「あんな女に逢はなければよかつた！」

などと言つてゐる。

是等は第三者の普通人、又はまだ自らを發見しない前の當人のいふ平凡の言葉である。

殊にオクテーヴイアスはアントニーの此狀態を半ば悔んでゐるやうなものの、實は喜んでゐるのである。彼にはアントニーの此行動は殆ど解し兼ねるらしい。なぜならば彼れの求めてゐるも

のと、アントニーの求めてゐるものとは、全然違つた性質のものであるから。

オクテーヴィアスの求めるところは、支配することである。彼は權力慾の凝り固まりである。これを得、之を支持するためには、すべてを拋つて悔いぬ男である。考へて見れば、後にオーガスタス帝となる彼も一個の the Man of Destiny で、此ローマの大帝國を統一する運命を擔ひ、そのために造られた人である。クレオパトラは曰ふ、"Tis paltry to be Caesar; not being Fortune, he's but Fortune's knave, a minister of her will.「シーザーになつたつてツマらない。彼は運命の神ではない、其の奴僕、其の意思の奉行者に過ぎぬ」。丁度あの場合にナポレオンが出ることがフランスの國家の運命上必要であるやうに。

此權力慾に全身を支配されてゐるオクテーヴィアスから見れば、アレキサンドリヤにクレオパトラを抱擁し、朝に夕に酒と色の香に浸つてゐるアントニーの氣は解からないのである。が、アントニーはどうも左ほどに權力慾はない。ずつと、あつさりしてゐる。彼とても軍人として政治家として、所有慾も征服慾も或る程度にない事はないが、しかし其れ等は、あの多才な、力の有る彼に、をのづから來た如くで、彼は之を心のたけを以て購ひ求めたのではない。彼は其れ等に全身全靈を捧げる氣になれなかつたらしい。

彼が求めたのは何であるか。戀といふ語で示すのには不充分であるほどにも、その魂のすべてを捧げ血潮の一滴々々をも捧げて悔いない對象物を求めてゐた。嘗ては大シーザーの爲に死をも惜まなかつた。それを今はクレオパトラの愛にと捧げるのである。

Kingdoms are clay: our dungy earth alike
Feeds beast as man: the nobleness of life
Is to do thus; [*embracing.*] when such a mutual pair
And such a twain can do't; in which I bind,
On pain of punishment, the world to weet
We stand up peerless.

帝國王國なぞは泥土ぢや。この糞土の大地は人間も養へば禽獸をも育てる。人生の貴さは斯うすることにある、想ひあふた二人が斯うして番ひ離れず樂しむのは、何といつても、天下無類ぢや。（第一幕第一場）

と彼がクレオパトラに語る所は、「功名や權勢が何だ、世界が何だ」と之を土芥視する彼れの心意氣を見せて居る。彼は一種の戀愛至上主義の最も勇敢なる最も徹底的なる實踐家である。「ジューリアス・シーザー」の劇の中にも見られる通り、オクテーヴィアスが飽まで冷かな、理智

的な、打算的な、主我的な人物であるのと大いに違つて、アントニーは情感の人。熱情漢である。感激性に富んで、純情によつて動くといふ風がある。オクテーヴィアス黨のアグリッパとアントニー黨のイーバーバスとの二人が、

When Antony found Julius Caesar dead,
He cried almost to roaring; and he wept
When at Philippi he found Brutus slain.

アントニーはあの大シーザーが死んだのを見た時には大聲あげて泣いたぜ。それからフィリッパイでブルータスの斃れたのを見た時にも泣いたんだ。

That year, indeed, he was troubled with a rheum;
What willingly he did confound he wail'd,
Believe 't, till I wept too.

實際あの年には大將泣き病に罹つてゐた。自分で進んでやつつけて置きながら哭いたので、ほんとに俺までも泣き出したよ。（第三幕第二場）

と噂しあふ如くで、彼は餘ほど涙脆い。斯樣な彼が、全世界に覇を稱へんよりは、寧ろ一情人の情けにあこがれるのも、別に異とするに足らぬ。オクテーヴィアスは偏へに權勢慾のために一切を犠牲にするを辭せず、アントニーは熱烈なる愛慾のために萬事を放棄して惜しからずとする。オクテーヴィアスは權力崇拜の權化であるが、アントニーは戀愛憧憬の化身である。彼がその全身全靈を權力慾のために、所有慾のために、支配慾のために捧げなかつたといつて、どうしてアントニーを非難すべきであるか。なぜ悪いのか。なぜ彼のために惜しいのか。寧ろ mortal な、物的な、朽つべきものを追ふ事をやめて、朽ちざるもの、immortal なもの、心的なものに其の身も其の魂も捧げたのではないか。

私は彼に咎むべきものがありとすれば、それは、彼がその眞に求めてゐたものに忠實でなかつた——その衷心（ハート）に忠實でなかつた事を以て責めたい。それは何か。

アントニーは埃及に滯在中、使者は櫛の齒を引くが如くにやつて來て、彼の長夜の宴より起きんことを求める。が就中彼を動かしたのは、男まさりの妻フルヴィアと弟のルーシアスとがアントニーを埃及より起たせるためにオクテーヴィアスに向つて戰を挑んだことである。これ只事ならぬと出立の考へになつてゐるところへ（史實と違つて）、そのフルヴィアは急に死んだといふ報知

がくる。愛してゐた妻ではないが、死んで見れば可愛さうな心は起る。

She's good,being gone.

逝つてしまつて見れば、善い女である。

と手向けの言葉を述べて、埃及を去る事にする。此時イノバーバス――皮肉な哲學的な彼れの部下の大將――は「やめたらよからう、埃及で女の人死にが澤山出來るから」と冗談半分に留めるが、アントニーは存外事もなげにクレオパトラに別れて出立する。それが「くせもの」で、彼は心の底に、副意識的に、ほんの一寸の別れである又歸つて來るとの確信をもつて出立してゐるのである。

彼はローマに久し振りに歸る。政機は一轉化してゐる。第三者ポムペー(大ポムペーの子、セクスタス・ポムピーアス)が出現し、シ、リーに亂を起してオクテーヴィアスに戰を宣し、現に海上の全權を握つてローマに攻め寄せんとする有樣。そこで性格上にも經歷上にも合同を許さないらしいオクテーヴィアスとアントニーが仲直りをする。そしてオクテーヴイアスの腹心アグリツパの献策で、オクテーヴィヤスの妹オクテーヴィアとアントニーとを結婚させ、之を絆として二人の聯盟の鞏固を計らうとする。アントニーは承諾する、――その承諾を口にしてゐる最中にもクレオパトラのことは寸時も心を去らぬにも拘らず。

之がアントニーの第一の失錯(しくじり)で、己れの裏心(ハート)に忠實であつたら、こんな心にもない馬鹿なことはしなかつたであらうに。

これから失錯の續發、亡びゆく時を知らせるかの如く。

第二の失錯は、アントニーの母がシ、リーでポムペーの懇切な優遇を受けたといふ一件から、アントニーの好意はポムペーに在りながら、己の心の向てゐないオクテーヴィアスと合體して、ポムペーの沒落を急がす(ポンペーに對して劍を拔かうとは思ひがけなかつたと云ひながら)こと。

政略結婚は何にもならず、やがてアントニーは妻オクテーヴィアをアセンス市に置去りにして、又アレクサンドリアに歸る。

オクテーヴイアは「まじめな、靜かな、おとなしい、貞淑な、婦人の鑑ともすべき賢女」との評判(クレオパトラと好個の對照)で、弟に性質も大に似てゐる。愛のない名ばかりの夫よりも、弟を愛してゐる。彼女のローマに歸る事は、豫期せられた通り、オクテーヴィアスのアントニーに對する宣戰に辭柄を與へ、兩者の開戰となる。

希臘アクチアムの海戰が又アントニーの何番目かの失錯になる。彼が陸でオクテーヴィアスに

對抗したら、敗けようとて敗けられない程、彼は優勢である。それにも拘らずオクテーヴィアスの例の身勝手な要求で、海戰で勝負がしたいと云ふ希望と、又クレオパトラが少しは手傳ひの出來る海戰を欲するので、諸將の諫も聽かずに海で戰ふ。それでも五分五分の戰爭をしてゐるのに、實戰を知らない女王に率ひられた埃及軍が逃出す。そのあとを追ふて總大將（アントニー）の御座船が眞先に逃出す。もう總崩れの外はない。

此の見苦しい敗戰でアントニーは急轉直下に悲運に向ひ、悄然として自ら慚ぢ自ら責め頻りに煩悶するが、クレオパトラは「まさかあなたが跟ておゐでになるとは思ひませんでしたので」と辯解しつゝ船を戻した卑怯の罪を泣いて詫びるので、アントニーの心も解ける。

それからシーザーに講和を申込んだところ、アントニーの身柄を引渡せば女王は優遇するとのことに、アントニー憤然としてシーザーと一騎打ちの勝負を挑む。シーザーこれを一笑に付して相手にせず。やがて女王の許へシーザーより勸降使が來たが、間もなく再びアレクサンドリア附近の海陸に決戰（わが關ケ原の役にも比すべき天下分け目の一戰）開かれ、海戰でアントニー大敗し萬事去る。

此戰敗に就てアントニーはクレオパトラの二心を疑ひ、彼女がシーザーの方に內應して豫め手筈を協定し置いたものと猜して、

All's lost; this foul Egyptian hath betray'd me:
……. Triple-turn'd whore! 'tis thou
Hast sold me to this novice;

萬事休すだ。あの埃及女めが裏切りをつたんだ。內股膏藥の淫婦め、あの青二才に俺を賣つたのは汝だ。

と哮り、

O Sun, thy uprise shall I see no more:
Fortune and Antony part here; even here
Do we shake hands. All come to this?

あゝ太陽よ、俺は最早汝の昇るのを見まい。運命とアントニーは此處でお別れだ。丁度今手を振りあふところだ。まあこんな事に成つてしまつたのか。

と悲憤し、

Follow his chariot, like the greatest spot
Of all thy sex; most monster-like, be shown
For poor'st diminutives, for doits;

女一同の面汚どしになつて彼奴の凱旋車について行け、そして化け物のやうに一文二文で見せ物にされやがれ。

と罵り、

……. The witch shall die:
To th' Roman boy she hath sold me, and I fall
Under this plot; she dies for't.

あの魔の女めは生かしては置かぬ。雛馬の小僧（シーザーを指す）に、あいつが俺を賣つた、それ俺は亡びるのだ。その懲しめに、あいつも殺してやる。

と荒れ狂ふ。餘りの事にクレオパトラは身の危險を恐れ、宮殿内の靈廟に逃げ込んで錠を下ろし、アントニーには自害したと告げさせる。自害と聞いてはさすがにホロリとして、「クレオパトラ、やがて追ひついて、泣いて詫をするぞ」とて、部下のイーロスを呼び、自分を刺殺せと命ずる。

イーロスは劍を拔いて主人を斬ると見せて、其劍で自ら死ぬ。アントニー太息して其雄々しさに感激し、己れも刄に伏したが、死に切れず、衞兵を呼んで仕果（しおほ）せてくれと頼むところへ、女王より使者來り、彼女が實は死なずに廟内に居ること、又シーザーに内應云々の件が全然無根なる由を傳へる。それから彼れの望みによりクレオパトラの居る高き處へ瀕死の身を引き揚げられ、彼女の胸に抱かれて、幾たびか最後の接吻を受け、

The miserable change now at my end
Lament nor sorrow at; …… …
Now my spirit is going; ……

末路のみじめさを嘆げいてくれるな……。あゝもう今魂が出てゆく。

と今生の訣れを告げつゝ、クレオパトラの

Noblest of men, woo't die?
Hast thou no care of me? shall I abide
In this dull world, which in thy absence is
No better than a sty?

人間中の最も高貴な人、もうあなたは逝くのか。わたしを置去りにするのか。あなたが居

なくば豚小屋同然な此つまらぬ世の中に、わたし獨り殘るのか……

と言ひも終らぬうちに、彼は瞑目する。まことにアントニー其人らしき詩的な悲壯の最期である。

やがてクレオパトラも後を追うて自殺することゝなるのである。

アントニーとクレオパトラの破滅には、何となく三成、淀君等の豐臣黨の滅亡が聯想される。そして彼等を亡ぼして天下を已れ一人の掌中に握るに至つたオクテーヴィアスは、正に家康といふ趣がある。

實に第三幕の末頃から第四幕の終りへかけて、アントニーの運命の下り阪より、その最後に至るまでを描きたる、大嵐のやうな幾個の場面は、全く老いたる手負獅子の畏ろしさと壯烈さと氣高さとを示してゐる。今までアントニーの心の底に潛伏してゐた善きもの、高尚なるもの、敬すべきもの、肉體と共に朽ち果てないものが、悲運の近づくに從つて愈々強く光を發して來た。此光に照されて、名もなき兵卒も老功の大將の如く振舞つた。曾て奴隷であつたイーロスはローマ人中の最も高邁な人物にも劣らぬ自殺を遂げて、却てアントニーに手本を示した。一旦シーザーに降參して見たイノバーバスも、遂に悔恨の心に打たれて憂鬱のあまり途に倒れて死んでしまつた。そして其光はクレオパトラの心にも、迷ふまじき導きの燈となつた。

今までほんの現世享樂者であつたアントニー、ほんの衝動のまゝに何の目的もなく、單に才に任せ力に任せて來たアントニーは、その五十の歳に於て、眞に人間の何を差置いても求め尋ぬべきものを求めた。最後の僅かの間の、しかも強い惱みによつて、此尋ぬるものを探し得た、――掴んだ。それを私は眞の戀と云ふ。それは戀を通じて得た魂と呼ばるべきものである。テニスンの所謂「戀して敗れるのは、全然戀しないのにまさること萬々である」といふ境地である。こゝに於てか戀愛は一種の神秘な、靈的な、深い或るものを人間に與へるといふことが知らるゝであらう。そこに戀愛悲劇として「アントニーとクレオパトラ」の意義がある。

あはれ四十の坂も過ぎ五十路に近き身を以て、煩惱の犬逐へども去らず、功名權勢も何のその、現世の有らゆるものを一擲して、止むに止まれぬ愛着の一念に殉じ、「ナイル河の毒蛇」と共に浮名を流して悔いざりし彼れ多情多恨の英雄兒。げに實行的戀愛至上主義者の隨一人！

まだ一人重大な人物が殘つて居る。

此人の爲めに此の倍も倍もの時を費して述べて見たいといふ氣もあり、又いか程費しても述べ

足りないといふ氣もする。

普通クレオパトラは、娼婦である、淫婦である、妖婦であると、最も汚らはしい名で片づけられ、獨逸の批評家 Ten Brink は彼女を目して"a courtesan of genius「天才妓女」といつた。成程クレオパトラは普通娼婦が有つてゐると せられる技能を十分に、十二分に、天才と呼ばるべき程にも有つてゐる。それは否まれない。しかしそれにも拘はらず、私はクレオパトラに於て普通の正常(ノーマル)の女性を見出さうとする者である。否、普通の正常な婦人といはれる者のうちにクレオパトラを見出さうとする者である。

女性は吾々男性に取つて永久の謎である。謎である故に、吾々は無茶苦茶に引きつけられる。Leonardo Da Vinci の畫いた名高い謎の女 La Gioconda（普通 Mona Lisa として知らるゝ）は何故に興味があるか。Walter Pater はShe is older than the rocks among whi:h she sits といひ、凡べての經驗の總括せられたものであるといつた。

我々は女性の情熱を知らんと力(つと)めて、Mrs. Browning の "Sonnets from Portuguese" や S. Brönte の Jane Ayre を讀んで見ても、或は Jane Austin や George Eliot に徵しても、存外得るところがない。女性には男性の有する如き荒れ狂ふ情感はない。女性の主要な働きは矢張り母たる事である。大地は最も大なる母である。大地は凡べてのものを受入れる。女性も或程度まで、大地の如く凡てのものを受入れるべく出來てゐる。大地の如く、靜かに待つてゐる——種の下ろされるのを。そして大地の如く、測り難い。

教授 MacCallum はクレオパトラを評して曰ふ、——『彼女を、しつかりと見つめることは、殆ど不可能である。彼女を正しく評價しようとて、頭をぐらつかせずにゐることは、殆ど不可能である。』

實際我々が魅せられる程の婦人は、どこか奥底のわからぬ所謂端倪することの出來ない或るものを有つた婦人である。妻にしても、戀した初めには、そんな感じがあつた。それが、どこからどこ迄も分つてしまふ樣になると、少し嫌氣がさして、他の端倪することの出來ない婦人に心を送るやうになる。

同教授は更に語を續ける——『クレオパトラは義務のない、美と優雅とによつて讃美される人生の詩の權化である、教養と智力によりて氣品を得たる、主義なき衝動(インパルス)の權化である。』

實にその通りであるが、或る程度に於て、女性といふものは皆さうであると思ふ。女性に全然義務の觀念がないとはいはないが、少くとも男性が有する如き社會に對する義務、理想に對する

義務、天職などの考へは、女性にはない。家に盡し子に盡すも、多くは本能により衝動による。その點に於ても女性は、より多く詩的である。

日本で小野小町か照手姫か、支那で西施か楊貴妃かと云はれる樣に、西洋では希臘のヘレンか埃及のクレオパトラと相場が定まつてゐるのであるが、沙翁はクレオパトラの肉體上の美は割合に高調してゐない。第一に、七難かくすと謂はれる色の白さがない。茶褐色の南洋風である。これ彼女がシェークスピアの十四行詩中の「黑婦人」Dark Ladyと關係して說かれる所以である。それに比較的ふけて、はや目尻の皺を怨み、雙鬢に交る白髮を歎くに近い婦人にしてゐる。實際婦人の魅力は必ずしも三十二相具足圓滿の美人といふところにない。顏立ち揃つて居て一向引きたたぬもある。單に容色上での所謂名妓は不可。

クレオパトラの魅力は、その魂の活力にある。寸時も動いて止まぬ心の働きにある。彼女のすぐれた智力は常人の思ひ設けぬ方面に働き、道極まる如くにして而かも決して窮しない。彼女が此次に何といひ、何とするか、第三者から容易に豫想されない。しかもそれは單に智力の働きだけでなく、彼女自からの氣分が千變萬化してくる。暗にひらめく稻妻のやうに、決して一所に又一定の形に輝かない。

試みに見よ。第一幕第二場に於て、クレオパトラはアントニーの見えないので、ひどく氣にして、臣下に命じ所々を探させてゐる。すると、そこへヒョイとアントニーがやつてくる。侍女が My lord approaches「あゝ、殿樣がお見えになりました」といつても、

クレオパトラは　We will not look upon him; go with us.「わたしや逢ひますまい。ついておいで」

と、さつさと出てしまふ。この心憎さ。

同じく第三場にて、侍女チャーミアンがクレオパトラに諫言するところ——

Char.　Madam, methinks, if you did love him dearly,
　You do not hold the method to enforce
　The like from him.

Cleo.　What should I do, I do not?

Char.　In each thing give him way, cross him in nothing.

Cleo.　Thou teaches like a fool; the way to lose him.

「奧方樣、わたし存じまするに、若しあの方を眞實おいとしいと思召すなら、あなた樣のなされ方はあの方のお心をお引つけなされる道とも存じません。」

「では私のしない事で、どうしたらいゝの？」

「何でもお氣任せにし、何にもお心に逆はぬやうになされませ。」

「お前、阿呆のやうな事を敎へるの。それこそあの方のお心を失ふことになるのぢや。」

彼女は、ちやんとアントニーの、廣くは男性の、心理狀態を十分に理解してゐる。我々は妻に斯樣な手管を求めない。誠實を求める。勿論誠實が大事である。が、誠實誠實ばかりで人生が單調に一本調子に興味ないものに成つても困る。そしてクレオパトラに誠實がないとは云へない。唯それが堪へ難き無味の單調に陷つてはならぬ事を彼女はよく心得て居るのである。Arthur Symonsの所謂 The long, intolerable monotony of friends は、夫妻の間にあつても宜しく警しむべき所である。

同じく此場面に於て、アントニーはローマに歸り行かねばならぬ事をクレオパトラに話す。それを豫知してのクレオパトラの一擒一縱。そして愈々彼れの決意の堅きを見て、いともやさしい別れの言葉。何といふ變幻自在の妙ぞ。

最後に近くアントニーの敗戰も確實となつた際に、シーザーの擇りぬきの使者がクレオパトラを訪づれ、アントニーを捨てゝシーザーに臣屬せんことを勸告する條がある。此時クレオパトラは充分好意を諒とする返事をなし、使者を犒らひおのが手に接吻させるほどの特別待遇を與へる。之を偶然來り合せて見たアントニーは烈火の如く憤り、さんざんに罵倒して双方に當りちらす。かういふ場面は、どこでも珍らしくないことで、日本の歌舞伎にも又小說にも、金のある間ちやほやし、一旦凌落に向ふと冷たい背を見せる、それが薄情な娼婦の常であるとて腹を立てる騷ぎは、よくあるやつ。アントニーにして見れば、次第に落ちぶれかけて味方にも部下にも見放されて來た折柄、敵手に流盼を送るやうな此の態度に激怒するのは無理もなからう。

此あたりから最後近くに至るクレオパトラの態度につき、批評家中にもいろいろ解釋を異にしてゐるが、

一　クレオパトラは、あはよくば牛を馬に乘かへようとした、が機會が次第に非運に傾き、止むを得ず遂に自害して果てるのである、との說（歷史に、クレオパトラはアントニーの失墜後ローマ大帝國の女王たらんとしてシーザーを誘ひ試みたがシーザーは其の術中に陷らなかつた、と記せるものもある）。

二　すべてシーザーに向ひ完全な復讐を試みようとする智謀すぐれたクレオパトラの策で、策

は十分に成功し、シーザーに立派に自殺して見せて鼻明かせ、其の折角の好意を無にして非常に苦がい煮え湯を呑ませた、との說。

此二つの解釋の中間に、眞のシエークスピアの狙ひ所――眞意があるやうに考へられる。第一に、女性の最も强い本能は保存である、產出である、建設である、平和である、和解である、妥協である。男の兒が竹ぎれ木切れを以て障子でも茶碗でも叩き壞して快としてゐる頃に。女の兒は布切れ一つも仕舞つて、ねゝさんごつこに使用する。決して捨てること破ることを好まない。此保存の本能がクレオパトラをして一時、身の行末と、自分の子供の事と、自家の王位の事を考へさせ、他方に自分の並々ならぬ魅力、曾て大シーザーを、次に大ポムペイを、次にアントニーを生擒つた腕の覺えの誇りと、此二つが結ばれて、一時、ホンの一時、アントニーに殉ずるといふ心よりも、アントニーなき後の事について一寸色目をシーザーに使ふ心になつた事は、女性全體の本能として又クレオパトラとして自然であり、當然の事であると信ずる。

しかし其れはホンの一時。アントニーが最後に近づくにつれて、その高邁な心が潔い死を決心させて、寶にも權力にも代え難い或るものを摑むに及び、その氣高さに感激し、それから他方に小僧つ子のオクテーヴイアス・シーザーの心もガラス箱の中味を見るやうに見えすいて見れば、彼女の決心は堅くなつた。クレオパトラはアントニーに殉ずるのは勿論、シーザーに女性らしい復讐をしてやらうといふ決心になつた。

シーザーの意中には、此「ナイル河の蛇」(アントニーは常にクレオパトラを my serpent of old Nile と呼んでゐた)を生擒りにして凱旋の飾物にし、ローマの市に連れて行き妹オクテーヴイアの嘲弄するがまゝにさせる事が、東方諸國全體にも代え難い戰利品であつた。そこで其の爲めに充分の用心をしてゐた。クレオパトラはそれを知つて一手上に出た。彼女はシーザーの計畫の裏を搔き、廟內で自害などさせないやうに警護する衞兵等の知らぬうちに、かねて窃かに取り寄せて置いた二疋の毒蛇（無花果の枝を被ぶせた籠の中に忍ばせてあつた）に身を咬ませて、息絕える。

クレオパトラの末路は、大阪落城の際に於ける淀君以上の悲劇である。此有樣を見て、さすがに冷血のシーザーも

She shall be buried by her Antony:
No grave upon the Earth shall clip in it
A pair so famous.

女王はアントニーの傍に埋葬しよう。地球上のどの墓でも此れほど名高い男女が納まつて居るのはなからう。

と感動し、世にも比ひ無き比翼塚を見ることゝなる。

クレオパトラは吾々の理想の女性でもなく、又吾々の敬意を大いに買ふに足る婦人でもないであらう。否、寧ろその反對かも知れない。彼女は「我等の最も憎むものと我等の最も感嘆するものとを兼ね備へてゐた」と云はれる位だから。

彼女は歡樂を念ふて、その義務を考へなかつた。母たるの本能をも忘れたかの如く、その生める子等の注意をもしなかつたやうである。此點に於て彼女に淫婦の名を冠らせるも隨意である。

クレオパトラは先に埃及國王トレミーの妻であり、そして大ポムペーをも知り、大シーザーをも知つてゐた女である。之を娼婦といつてもよい。

彼女はアントニーを熱愛しながら、彼を善導して靜かな健かな人生に歩ませる手傳をしようともせず、又しもしなかつた。之を妖婦と呼ぶもよい。

併しながら彼女のうちに、女性といふものの此世に與へ得る大なる賜物が、十分に輝いてゐる事を忘れてはならない。女性は何と云つても、人生に喜びを持來たすものである。にこやかな微笑は女によつて教へられ、女によつて充たされる。女は常に歌をうたふ。女はいつまでもお化粧を忘れない。女の嬌態、女の媚、女の一種の捕捉し難さ。それらは少くとも吾々男性に對して、常に人生を興味あらしめる重大な要素である。

イブセン以來の女性解放論者は、不思議に平氣で明瞭な錯誤をしてゐる。男性が財布の口を握つてゐて金づくで女性をいぢめる、それの惡いのは云ふまでもない。男性が女性の意向をも汲まないで、その情慾の向くまゝに女性を虐げる、それも勿論惡い。そんな事の覺醒を促すことに於て女性解放論は十分に役立つ。けれども女性が何から何まで男性同樣になる事が人生の進歩だと考へるのは、大なる間違ひである。丁度年が年中お天氣續きであればよいと願ふと同樣、愚にもつかぬ議論である。同じであつては相牽く引力はない。無論犬の雄と雌は大した違ひはなくても犬屬の種は盡きないから、女性が風采服裝すべて男性と寸分違はなくなつても、大方人種は盡きまい。その心配はない。畢竟戀愛はなくても生殖はある。しかし其の狀態が、男女どちらに取つても願はしい狀態であるか。それで人生はどれだけ進歩した事になるであらう。アフリカの土人は大抵そんな風ではないか。寧ろ兩性の異る特點が愈々明瞭に分化し、補足し、調和してこそ、よ

り善き世界は求められるのではないか。

吾々には、靈と肉との爭、ギリシヤ主義とキリスト教主義との爭ある如く、戀愛に於ても肉慾一方とするのと、神聖視するのと二つの態度があつて、此二者の調和に進むより外に道はない。女性には男性の此惱みはないやうに見える。彼女は肉慾であり、又靈でもある。彼等は昔も今も更に變らぬ忍耐深い母、若くは母たらんとするものである。彼等の前に戀愛は問題ではない。その本能であり、きまり切つた事である。

かのオディシウスの如く天地の間を冒險し、惱み、泣き、病み、苦しむのは男性である。そして、とゞのつまり家庭に歸つて來る。そこに貞操な妻が十年一日の如く機を織りながら待つてゐる。彼の歸るのを待つてゐる。之が建設的 constructive な愛である。萬一アントニーとクレオパトラの場合の如く、吾々が破壞的 destructive な愛を味はねばならぬ時も、我々にはクレオパトラの最後の言葉の樣な境地が與へられてゐる。

クレオパトラは王后の最後にふさはしい金冠禮服を侍女に持ち來らせ其を着けつゝ曰ふ——

……

Immortal longings in me: …… I have
Antony call; I see him rouse himself
To praise my noble act. ……

……

I am fire and air; my other elements
I give to baser life.

私は心のうちに不死不滅のあこがれがある。

どうやらアントニーが呼んでゐられるやうぢや。自身席から立つて

私の氣高い行ひをほめて下さるのが目に見える。

……

もう私は火と空。ほかの要素は賤しい此世にくれてやる。

私は死を讃美しない。しかし生よりも死の一層高尚な場合がある事を忘れたくない。我々は一躍生死の秘鑰をつかむ事のあることを忘れたくない。

技巧方面から見ると、コールリツヂが

「シェークスピアの他の作の文體と比較して、此作の筆法にふさはしいモットーは feliciter

audāx (happily audacious 巧みに大膽な) といふ語であらう」

と云つた通り、全く此劇は構成の不均合などの事を更に心配しないで、思ふ存分に大膽に書かれたものらしい。長場はなくして、短い場の數が非常に多く、第三幕は十三場、第四幕は十五場(その中には僅かに四行で一場を成すものもある) の多きに及び、場面の展開の頻繁なる、看る者をして應接に遑なからしむるほどである。

例の如く凱切な如實な其の描寫には、文學上の寶玉とするに足るものも少なくない。その一例として、第三幕第一場の初めにアントニーの幕下ヴェンチディアスがシリアスといふ部下の士官に語る次の一節の如きは、昔しも今も變らぬ官吏軍人などの心理狀態そのまゝの寫實である——

Ventidius..... a lower place, note well,
May make too great an act; for learn this, Silius:
Better to leave undone, than by our deed
Acquire too high a fame when him we serve's away.
Caesar and Antony have ever won
More in their officer than person: Sossius,
One of my place in Syria, his lieutenant,
For quick accumulation of renown,
Which he achieved by th' minute, lost his favour.
Who does i' the wars more than his captain can
Becomes his captain's captain; and ambition,
The soldier's virtue, rather makes choice of loss,
Than gain which darkens him.
I could do more to do Antonius good,
But 'twould offend him; and in his offence
Should my performance perish.

よく聽きたまへ、下役といふ者は兎角功を立て過ぎるよ。君、上官が居らぬ時には、あまりすぐれた功を成して名を擧げるよりも、無爲にして居る方が安全だぞ。シーザーやアントニーの成功は、實をいふと自力で得たよりも下官の力で得た方が多いのだ。アントニーの副將のソッシヤスは、シリヤでは丁度僕の位置にゐたのだが、矢繼早に功を立てゝ、急に名が高くなつたので、遂にアントニーの寵を失つてしまつた。戰爭で大將以上の手柄をする者は、大將の大將になる。そこで軍人といふ者に大切な功名心からして、自分の前途を暗くする勝利よりも寧ろ敗北を望むのである。僕なぞも是れ以上アントニーの爲めに盡せば盡されるのだが、さうすると不興を釀す、不興を釀せば手柄が消え失せるわけだ。

以上で、シェークスピアの劇の中でも變幻複雜極まるクレオパトラ其人の如く全く端倪すべからざる此「アントニーとクレオパトラ」の中に含まれた色々の意味にの百が一、興味の十が一も述べたと思はない。實にゲーテのいへる如く、或る藝術品は不可測であればあるほど偉大な作であるらしい。「測り難い」といふ言葉は全く沙翁の作に適用せられるので、私は此劇の全部を測り之を述べ盡し得たとは無論思はない。たゞ本もので讀んで見たいと思ふ心が起し得られゝば、それで私の使命は果されてゐる。

30. Pericles, Prince of Tyre.
「タイアの王子ペリクリーズ」

五幕、二二場、外に序詞と閉幕詞。總行數二三五七。

シリヤの首都アンティオーク（Antioch）の王アンタイオカス（Antiochus）には容姿花の如き王女がある。美貌に誘はれて多くの貴公子達が結婚を求めて來るのであるが、嘗に之を許されぬのみか誰一人命を全うする者がない。といふのも此父子は竊かに道ならぬ交りを結び居り、求婚者を斥けんが爲に一つの謎を作り、之を解き得ぬ者は悉く死に處するからである。茲にフィニシアのタイア（Tyre）市の王子にてペリクリーズなる智勇兼備の若者あり。死を恐れずして王廷に至り、謎を解いてアンタイオカス王の大罪を指彈する。王は驚いて此王子を殺害せんとするを、彼は早くも身を脱して故國に歸る。王の毒手の此處にも及ぶに至り、轉々して所々を放浪し、小亞細亞シリシア國の首都ターサス（Tarsus）に至りて、恰も饉飢に苦しめられて死に瀕せる市民を救助する。（以上第一幕）。

ペリクリーズは風浪の難に逢ひて從者を悉く失ひ、身を以てペンタポーリス（Pentapolis）の

海岸に脱れる。此處にて國王サイモニディーズ（Simonides）が其娘セイイサ（Thaisa）のため、比武競技を行ふと聞き、乞ひて之に參加し、大いに武名を擧げ、無名の一寒士を以て王女の撰びに叶ひ、其女婿となる。（以上第二幕）。

かくて數ケ月の後、ペリクリーズは故郷よりの通信に接し、仇敵アンタイオカス王は死し、又自らは連かにタイアに歸つて王位を繼ぐべき事を知り、初めて本性を明かにしセイイサを具して故國へと出帆する。

海路未だ央ならざるに一行は颶風に逢ひ、波に揉まれて浮きつ沈みつする間に、妻のセイイサは後にマーライナ（marina）と名けられたる一女を擧げ、苦惱の餘りに失神する。船人は此夫人を海神の贄にせずば船は難破を免れんやうなしと主張するにぞ、詮方なくペリクリーズは涙と共に死せる妻を箱に收め之れを海底に委して、船は漸くターサスに到着する。玆にて彼は嬰兒のマーライナを港の長クリーオン（Cleon）と其妻に托し、自らは故郷タイアへと急ぐ。（以上第三幕）。

十四回の春夏が過ぎて、ターサスなるマーライナはいとも美しく雅びたる姫に成長する。才色あまりに優れて、クリーオンが娘のいたく見劣りせらるゝにつけ、彼女は養母の妬みを受く。危く殺害せられんとする所であつたが、圖らず海賊等の手に囚へられて、イージアン海レスボス島のミティリーニー市（Mytilene）に送られ、心曲れる人々の手に落ちて賣淫窟に渡されたが、幸に童貞を守ることを得る。

父なるペリクリーズは絶えて久しき娘に逢はんとて、ターサスを訪れたが、彼女は既に此世の者ならぬと聞いた。（以上第四幕）。

妻に別れ娘を失ひ、殆ど慰むすべもなくて、彼は再び故郷へ歸らんとしたが、又途に嵐に逢ひてミティリーニーの港に吹き寄せられる。港の長ライシマーカス（Lysimachus）は武勇の名あるタイア王子に敬意を表すべく、船中に來て見れば、ペリクリーズは悲哀に沈みて人の言葉に耳をも藉さぬ有樣である。氣の毒に思つた港の長は、當時其町にて歌と踊の上手にて名あるマーライナを送つて、王を慰めんとした。玆に親子は別れて久しき對面をする。喜びの餘りアイオニア國の首都エフェサス（Ephesus）なるダイアナ（Diana）女神の神殿に參拜したところ、此處には一旦海底の藻屑となつた妻セイイサが、神に仕ふる祭官となつて居るのに逢ふ。かくてマーライナをば此港の長に與へて其妻とする。クリーオンと其妻はターサス人の怒に逢ふて殺される。（以上第五幕）。

本篇は疑問の作で、其作者に就いて古來異論紛々として、沙翁の作たることを全然否認する説の多いと同時に、全部を沙翁に歸する説も出たが、近年までのところでは、其中の幾部分に沙翁が執筆してゐると見做すのが、まづ學者間の定論のやうである。作の年代は一六〇七——八年とされてゐる。

此劇は傳奇小説風の一種の浪漫劇で、劇詩よりも寧ろ叙事詩的分子が多く、種々非難もあるが、物語は大衆向きに出來てゐて、通俗的に面白いので、上演しては人氣を博したらしい。その形式も特異なもので、一幕毎に(のみならず第四幕では第四場の初にも、第五幕では第二場の初にも)説明役の序詞(プロローグ)があつて一寸荒筋を述べ、尚又第二幕の初め、第三幕の初め、第四幕第四場の初めに於ては、序詞の間に默劇 (dumb-show) で筋を運ぶやうになつてゐる。

此の默劇なるものは、「ハムレット」の第三幕第二場「劇中劇」の中にもあるが、前以て仕科だけで荒筋を呑み込ませ置かうとするのである。當時の習慣として其れは鈍感な觀衆に必要でもあり、隨つて彼等に喜ばれもしてゐたので、丁度日本の能狂言に、中途狂言方が出て話の續きを繰返へし語るのと同様のものである。

31. Coriolanus.
「コーリオレーナス」

五幕、二九場、總行數三三一八。

タークィン王族 (Tarquins) を羅馬から追拂つた後に續いて大凶年が來る。政府は倉庫を開いて穀物を人民に給與し僅かに飢餓を免れしめる。然るに人民は之れに增長し益々地主なる貴族階級に多大の要求をもち出して止まぬ。そこで仲裁策として人民の間より五人の保民官(tribunes)を撰びて彼等を代表せしめる。其内の二人、ヴェルータス(Velutus)とブルータース (Brutus) とは煽動政治家で、妄に人心を得るに努め、勢ひ傲岸不屈なる武將マーシアス (Macius) と意見が合はぬ。此マーシアスは幾度か戰場に武勳を建てた貴族の豪傑で、飽迄自己中心の武力主義者であるから、どうも人民の間に人望がない。併しいざ戰爭となると全く彼に依賴せざるを得ぬので、時恰かも隣州ヴォルサイ人 (Volscians) との戰爭起るに際し、彼は人氣を回復し再び持囃される。殊に彼がコライオラー (Corioli) にて戰つた奮戰には、平生の敵も味方も舌を捲き、彼にコーリオレーナス (Coriolanus) といふ稱號を奉つる。(以上第一幕)。

彼れ羅馬に凱旋して市民熱心に之を歡迎し、元老院は彼を執政官（Consul）に選擧する。併し此執政官に任ぜらるゝには、先づ人民の前にて一場の演說を試み、彼等の同意を經ねばならぬ。高慢ではあり、不慣れではあり、遠慮深くもあり、且つ口の人でない彼には、此は容易の業でない。漸く口を開いて述べるのであるが、いかにも拙で人民は滿足せぬ。煽動派が少しく油を注げば民衆はどうにでもなるといふ有樣。（以上第二幕）。

愈々採決の日が來ると、變り易い人民は彼の執政官たるを承認せぬ。激怒したコーリオレーナスは民權といふものに反對して過激な辯論をする。此機會を捉へて二人の煽動派保民官は人民をして彼に追放の刑を宣告せしめる。（以上第三幕）。

此愚民共の背恩の行爲に深く感情を傷けられ、復讐の念烈火の如きコーリオレーナスは、羅馬の仇敵ヴォルサイ人の本據地アンシアム（Antium）市に逃れ、敵將オーフィディアス（Aufidius）に和解を申込む。オーフィディアスは折しも羅馬侵入の計畫を立てゝゐた矢先き、百萬の士卒を得たにも增してコーリオレーナスを歡迎する。そして二將相合し轡を並べて羅馬へ進軍する。（以上第四幕）。

羅馬軍は殆ど術の出づる所を知らぬ。周章の極、羅馬の近くに陣取れるコーリオレーナスのもとに講和使を送ること數度に及べど、彼は頑として聽かぬ。遂に其切愛する母と妻子とが喪服を纏ふて、相携へて來り乞ふに及び、涙を揮つて漸く圍を解き、オーフィディアスの下に友軍は元のアンシアム市に退却する。コーリオレーナスも次いで同市に歸り、この突然和議を結んだ事の申開きを市の元老貴族達になさんとしたが、初めの協力の後やがてコーリオレーナスの勢力を嫉視して漸く彼を忌むに至つたオーフィディアスは、ヴォルサイ人の爲に不利益なる此の講和を口實に利用して、彼を倒さんと圖り、公衆の前で彼れの辯解を遮ぎり、彼を逆賊、賣國奴と罵つて激昂せしめ、双方の大喧嘩となる。此機に乘じてオーフィディアスと共謀の暴漢共は、殺してしまへと叫びつゝ群衆を煽り、コーリオレーナスは遂に暴漢等の襲擊の下に斃れて了ふ。（以上第五幕）。

此篇は作者の悲劇の最終の作で、一六〇七年乃至一〇年の間に書かれたものと推定せらる。

今日の謂はゆる「階級鬪爭」を逸早く實現した古代の國家は、紀元前四百八十餘年の頃、王政滅びて共和政體の起りし時代の、羅馬であつた。この古羅馬の史上の事實に基づき、武勇赫々たる偉大なる軍人を代表者とする貴族階級と、彼れが輕蔑する平民階級との鬪爭を經とし、平民大衆が代表する祖國と、國家の元勳たる剛愎一徹の將軍との衝突を緯として、その成行きを描いたの

が此劇である。これは一種特殊の、單純なから珍らしい悲劇である。

篇中の頂點、第五幕第三場で、祖國に弓を引くコーリオレーナスが喪服着けたる其の一族と對面する愁歎場——殊に老いたる母が懇々とコーリオレーナスを說き諭すところは、人の子たる者の、將た人の親たる者の涙を絞らせずにはおかぬ悲愴な場面である。

32. Cymbeline.

「シムベリーン王」

五幕、二七場、總行數三二七四。

ブリテン王シムベリーンに二男一女あれど、二男は幼にして行方知れずなり、一女イモーゼン(Imogen)のみ長じて花の如く麗はしく、天晴れ王家の嗣子であつたが、王が友の忘れ遺子にして同じ王廷に育てられたるポスチュームス(Posthumus)といふ若者と結婚する。然るに此若者は王の不機嫌をかひ、放逐せられて羅馬に赴き、此處にて彼は心曲れるアイアキモー(Iachimo)或はヤチモーと云へる伊太利人と友となる。此伊太利人は女の貞操などいふことを曾て信ぜず、ポスチュームスが故國に遺せる妻の美德を褒むるを嘲り、容易く彼女の貞操を破り呉れんと豪語する。爭論が遂に賭となつてアイアキモーはブリテンの王廷に旅立つ。

懐かしき夫の友と聞きてイモーゼンは此アイアキモーを歡待するのであるが、然し彼が豫期するやうな勝利はとても得られぬ。さりとて、をめをめ賭に負けるも口惜しく、一計を案出する。(以上第一幕)。

アイアキモー、彼女に請ふて曰ふには、こよなき寶を收めたる旅行李あれば、旅館に置かんは心許なし、曲げて一夜を寢室に置きて安全を計らせ給へと。かくて其行李の中に自ら潜み匿れ、寢息を窺つて現はれ出で、姫の手より竊かに腕輪を拔き取り、部屋の様子など篤と見定めて又行李に隱れる。かくて羅馬に歸り行き、誠しやかに姫の不貞を說き誇る。（以上第二幕）。

輕信の夫は之を聞き絶望のあまり、忠僕ピサニオー（Pisanio）に書を送り、イモーゼンを亡きものにせよと命ずる。賢き僕は此命には從はず、却て姫に逃走して羅馬に夫を尋ね行けと勸める。イモーゼンは一つには繼母の密を包める毒言に耐へ難く、二つには繼母の連れ子なるクローテン（Cloten が道ならぬ横戀慕に苦しめられてゐたので、喜んで此勸めに從ひ、男裝に身をやつして王宮を立退き、心細き旅路を南ウェールスのミルフォード港（Milford Haven）へと志すが、山路に途を失し、飢渴に迫られて、とある洞穴に立ち寄る。こはベラリアス（Belarius）と呼べる流謫せられたる老貴族の假りの住居にて、此貴族は王が不當の刑罰を憤り、王の二子を奪ひ取り、杣人となつて已が兒の如く育てゝゐるのである。互にそれとは知らねども、同じ血を曳く同腹の愛情に、此二人の王子と男裝のイモーゼンとは親しき樂しき團欒を作る。（以上第三幕）。

クローテンはイモーゼンの跡を追ふて又洞穴に來り、不遜の振舞ひして王子の一人に切り殺され首を刎ねられる。旅の疲れに洞穴に獨り留守居せるイモーゼンは、忠僕の送れる持藥のあるに心付き、取り出して服用する。これは繼母がそれとなく典醫に命じて調合せしめたる毒藥で、イモーゼンに送ると知つて、之をその僕に神藥と稱して與へたのである。藥の反應忽ちにして、イモーゼンは共儘死せるが如くになつた。歸り來て之を見た三人はいたく悲しみ、涙と共に永別の歌を歌ひ、クローテンの死骸と相並べ、上に野生の花をまき散して葬る。

裏の裏行く毒藥の物語に返らねばならぬ。腹黑き王后が只値なき獸類に試むべしとて命じたる毒藥を、典醫は心の内に深く怪しみ、毒と稱して實は長き眠り藥を調劑したのであつた。イモーゼンの夢は醒めた。身は土の上に眠つてゐて、夥しき野花に覆はれてゐる。見ると側に首なき死骸がある。よく〳〵見ると兼ねて夫ポスチューマスの着用してゐた衣服である。愚かなクローテンはかくして姫の心を獲んとしたのであつた。イモーゼンは之を夫の死骸と想ひ悲しくなつて其上にうち重なり、又失神の狀となる。折りから通りすがりたる羅馬侵入軍の大將の認むるところとなり、彼は彼女を助けて已れの侍臣とする。（以上第四幕）。

シムベリーンの王軍と侵入軍との間に激戰が行はれる。ポスチューマスは農民の如く裝ひ王軍に味方して戰ふ。ベラリアスと二王子も有力なる加勢をなし、一旦危かりし王軍を助けて勝利を

得せしめる。そして王と和解して二王子を返へす。羅馬軍の捕虜の中にはアイアキモーもイモーゼンもゐた。そしてアイアキモーの白狀によつてポスチューマスの心解け、王も彼を許して新に寵愛を加へる。惡心の王后は計畫の齟齬したのに絶望して死ぬ。（以上第五幕）。

此篇は一六〇五年――〇六年又は一六〇九年――一〇年の作と云はる。

此からの三篇は作者劇作上の第四期浪漫劇（本書三九頁參照）に屬するもの。その中でも殊に此「シムベリーン」は何だか夢の連續――一貫してはゐるが――のやうな氣持がする。

詩聖テニスンは此篇を愛讀して一生卷を放たず、遺言して死後自分の柩の中に之を收めしめたといふ。

33. Winter's Tale.

「冬の物語」

五幕、一五場、總行數二九七六。

シ、リヤ（シシリー島の伊太利名）王レオンティーズ（Leontes）は竹馬の友ボヘミヤの王ポリクセニーズ（Polixenes）の訪問を受け、大いに喜びて歓待するのであるが、友の切りに家鄕を思ふて歸らんとするを止め兼ね、后ハーマイオニ（Hermione）に囑して友を引き留めしむる。そして幼き一子マミリアス（Mamillius）と戯れ乍ら妻のボヘミヤ王を手厚く待すを親ひ見つゝ疑心稍々動き初める。此嫉妬の心はボヘミヤ王が愈々出發を延期するに至つて益々鋭く、遂にはカミロー（Camillo）と呼ぶ廷臣を説き、友なる王を毒殺せしめんとする。カミローは切に其疑ひの無根なるを諫めたが聽かれぬ。止を得ず毒杯を準備することゝつたが、ポリクセニーズを見るに及び、遂に始終の物語をなし王に勸めてシ、リヤを逃れ出でしめ自らも同行してボヘミヤに伴ひ歸る。（以上第一幕）。

王の逃走は益々レオンティーズの荒める心を固くなし、怒を罪なきハーマイオニに移し、命じ

て獄に投ぜしめる。程なく王后は一女を擧げ、侍女ポーライナ(Paulina)をして王の許に連れ行かしむるのであるが、王は之を以て不義の子となし、臣下に命じて遠き人なき境に捨てしめる。(以上第二幕)。

パーディタ(Perdita)と名けられたる此不幸の嬰兒はボヘミヤの海岸に棄てられ、貧しき牧者の手に拾はれる。

嫉妬の焰に心を燒きつくした半病の王は、使を送つて希臘デルファイのアポロー神殿に神託を求めしむる。使者歸り來つて之を披くと「ハーマイオニは貞淑にして、ポリクセニーズに罪なし。カミローは誠ある臣下にして、レオンテイーズこそ嫉妬深き君なれ。彼の罪なき嬰兒は正しき生れにして、若し此失はれたる子の歸り來るに非ざれば王は遂に嗣子なくして終るべし」とある。アポローの神勅こそ讀むべきかなと王后等の喜ぶ程もなく、一人息の王子マミリアスの逝去を報じて來る。后ハーマイオニは失神して運び去られる。侍女ポーライナは程なく后の崩御を報じて來る。初め神託を信ぜざりしも此打擊にはじめて己が罪の怖ろしさに目覺めた王レオンテイーズは、後悔慚愧に胸を打ち髪を掻(むし)れども、逝きし者は歸らず、一念發起して日毎懺悔の戒行に一生を送らんと決心する。(以上第三幕)。

十六年が過ぎ去る。ボヘミヤの宮廷では王ポリクセニーズと其友カミローと、近頃王子フロリゼル(Florizel)が鷹狩りに事よせ羊飼ひの小娘の許に繁々足を運ぶといふ噂につき心配してゐる。實否を見定めんと二人は變裝して牧者の家を訪れると、恰も羊飼共の質朴な踊りがあつて、其後にフロリゼルはパーディタと末變らぬ誓をする所であつた。王は怒つて兩人を引き離すのであるが、カミローは哀れと思ひ、竊に兩人をシヽリヤに逃れしめる。(以上第四幕)。

若き二人はレオンテイーズの宮廷にて歡迎せられるのであるが、程なく父王の追及に逢ふ。此時十六年前の古き衣類や寶石が發見せられて、牧者の娘は實に失はれたるシヽリヤ王女であることが分かる。二王は此奇遇にいたく喜ぶのであるが、只慰め兼ねるのはレオンテイーズで、失せにし娘の歸り來るにつれて、歸らぬ妻ハーマイオニを嘆くの涙のみ滋い。そこで侍女ポーライナは一同を菩提所に招き、新に成れる故王后の立像を見せしめる。少しく老いたりと思はるれども、生けるが如き立像に皆々驚歎の眼を睜つて居るうちに、其立像が動き出す。驚いた王がかき抱くそれは、冷たき大理石ではなくて、生きて溫き眞の妻であつた。彼女は竊かに隱れて生活し、神託の成就するのを待つてゐたのである。(以上第五幕)。

此稿は一六一〇年――一一年頃の作と云はる。「シムベリーン」と姉妹篇ともいふべき浪漫劇（三九頁參照）。

34. The Tempest.

「あらし」

五幕、九場、總行數二〇三三。

大嵐が吹き荒れてゐて、其たゞ中に一艘の立派な帆船が木の葉の樣に翻弄せられてゐる。之を望み見てゐる孤島は不思議にも平穩で、童顏白髮の老人と、其愛娘なる金髮豐頰の美人とが立つてゐる。やがて老人が肩なる外套を脱ぐと、風は次第に收まる。そして老人は初めて娘に身の越方を打明ける。

老人の名はプロスペロー(Prospero)といひ、もとミラン(Milan)の領主であつたが、學問に耽り內政を擧げて弟のアントーニオー(Antonio)に委任した所が、アントーニオーは漸く野心を生じ、遂にネープルス王アロンゾー(Alonso)に朝貢を約して其援助を求め、或る夜プロスペローと其幼女ミランダ(Miranda)を綱具なき小舟に乘せ、いづくともなく放ちやり自ら其領土を橫領した。小舟は幾日か波に漂うた後、とある絕海の孤島に漂流する。此島にはキャリバン(Caliban)と呼ぶ半獸半人の野蠻人と、其母なる無慚のシコラックス(Sycorax)の爲に割けたる大木に夾ま

れたまゝ日夜に泣き叫んでゐる詩の精靈エーリエル（Ariel）とがゐる許り。プロスペローは茲に上陸して次第に仙術を修行し、エーリエルを解放して其仙術の使ひとし、キャリバンをも教育して、言語を教へ、勞役を學ばしむるのであるが、只獸性の本能にのみ從はんとする此怪物は、幾度か鞭を加へても中々訓練六ケしく、勵もすれば美しきミランダ姫を辱しめんとする。

かくて十二箇年が經過して姫は漸く成人する。茲へネープルス王は其娘の婚儀に列する爲、一子ファーディナンド（Ferdinand）を初め多くの侍臣を率ゐ、ミランの領主アントーニオー一行をも加へてチュニスに赴き、其歸途計らずも此大暴風に逢ひ、親子主從別れ〳〵となつて此島に打上げられるのである。

實はこれ皆プロスペローの仙術に由る出來事で、彼はかくして王子ファーディナンドと娘ミランダとを結ばしめ、且つは惡心の弟及び之を助けしネープルス王などにも先非を改悛せしめやうとするのである。己が方寸の中なる仙術と、姿は見えずして或は戒め、或は怖れしめ、或は時ならぬ天に妙音を起さしむる精靈エーリエルの助けとにより、此目的は幾多の經路の後に完全に成就される。

そして一同がプロスペローの洞穴に集つた時には、何れも惡夢から醒めたやうに善心に立ちかへる。一旦失はれた筈の帆船は少しの損害も受けずに一同の故國に歸つて行くを待つてゐる。久しくプロスペローに仕へて報恩の道を全うしたエーリエルは自由の樂天地に解放せられる。

これが「あらし（テムペスト）」のホンの荒筋である。我々をして再び本文の跡を辿りつゝ更らに此劇の委曲を究めしめよ。

吹きまくる風、逆だつ波、空は松脂にも似たる黑雨を注ぎ、海は負けじと水打あげて應戰する。晦冥暗澹、人の世忽ちに終るかと驚かれた大暴風雨が、地中海の一隅に忽如として起つた。今まで、ほんの數分前まで、油を流した海面に、うら〳〵と照りわたる日の光を受けて、靜かに、伸んびりと滑べつてゐた數艘の船の、搖られること、揉まれること！　水夫等は、乘せたる客のはいざ知らず我が命惜しと懸命に働くが、帆綱は切れ、柱は折れ、もはや神明の加護を祈るの外に途はない。さるにても不思議な突發の『あらし』ではある。海上思ひもかけず水波揚がるの例は多々あるが、これほど何の豫兆もなしに襲來したためしは曾てない。

舟人等の不思議に思ふのも無理はない。實際これは或る法術にたけた學者の魔術によつて起された暴風雨である。學者は名をプロスペローといひ、ほど近き無名の孤島に住んで、茲に一新天

地を創造してゐるのである。彼れもと伊太利ミランの領主であつたが、生來の讀書癖に煩ひせられて思はぬ災厄に逢つたのである。一國を領して政治を行ふことは、萬民の幸福と安寧とを左右することで、人の努力のうち最も尊いものの一つであるが、政治を行ふに必要する權力が、ともすれば阿諛の渦卷のなかに暴威を振ふの醜惡に墮してくる。そして目前現下の利益や權勢に大した執着を持たない超俗非凡の人は、やうやく此境地に倦怠を覺える。民を思ふの必ずしも薄きが爲めでなく、理想の成り難く、人心の思ひの外に醜きに驚き、寧ろ心を更に悠久不變の事に注がんとするのである。かくてプロスペローは國事を弟アントーニオーに托し、專ら書室に閑居して、當時の魔術、今日の科學の研究に沒頭したのである。アントーニオーは思ひもかけず大任を托せられ、次第に統治の權力に慣れるにつれ、之をいつまでも自己の手中に收め、代理でなくて眞の領主になりたいといふ慾望を起した。そして次第に腹心の者を樞要の位地に据ゑて自己の勢力を培養し、やうやく時の熟するを待つてゐた。そして或る日、俄に叛旗を翻へし研究に專念する兄を幽閉し、みづから僭してミランの領主と稱した。

プロスペローは弟の不信を怒り、委托の裏切られたのを悲んだが、同時に、自分も天の委托を重んぜずして自からの好みに偏し、民の安寧を觀るの薄かりし責を痛感せずにはゐなかつた。しかし左樣な反省に恥る暇もなく、一身の危機は目睫の間に迫つてきた。實際彼が平生人民の間に非常な尊信を得てゐたればこそあれ、さもなくば彼はとくに弟の送る刺客の手に斃れたに相違なかつたのである。弟アントーニオーも、さすがにそれはなし得なかつた。彼は祕かに兄と、唯一人あるその娘ミランダといふ嬰兒とを船に乘せて沖遠く漕ぎ出させ、果は帆も舵もなき老朽の小舟に移し、波のまにまに漂ひゆくに任せたのである。今やプロスペロー父子の生命は全く運命と呼ぶ不可知力の手中にある如く見えた。

人の世を悲觀する者は、人生を以てまことに舵なき舟に譬へた。思へらく、人の努力はすべて何のかひもない。どんなにあせつても、もがいても、波の乘せゆく方向を一寸たりとも轉じ得ないと。プロスペローの場合、一見此悲觀論者の說をそのまゝ說明して居るやうであるが、しかし、なほ細かに觀察すると、他の要素もかなり見過ごし難い力を以てゐることが判る。第一に彼れみづからの決して絕望しない心である。學問とか、修養とかの役立つのは、そして眞に證明せられるのは、多くは平生無事の時ではない。此際若しプロスペローが、全く度を失つて、悲憤の涙に我を忘れるやうであつたら、彼の學問は死學問であつた。彼の研究は無用であつた。しかし幸に彼の修養は生きた眞劍の修養であつた。彼は廣き達觀する心を以て此難局に處するを得た。そし

て涙のなかにも、無邪氣なミランダの無心のほゝ笑みを見るとき、彼の勇氣は百倍した。我々が、爲めに働くべき愛する者を持つてゐることは、どんな祝福であるかわからない。

次には、彼が過去に行うた愛の行ひが、思ひもかけぬ陽報を齎らしたことも、忘れられぬ人生の一事實である。彼がさきに殺害の厄に逢ふことを免れたのも、平素の行爲の反映に外ならなかつたが、もつと直接な一事はこれである。王の朝廷にゴンザーロー(Gonzalo)と呼ぶ滑稽多辯な老臣がゐたが、此男表面の輕薄げなに似ず、甚だ誠實な正しい心の持主で、プロスペローの此災厄をいたく悲み、秘かに小舟に清水、食糧、その他の日常必要品、並にプロスペローが王侯の領土よりも尊重する典籍若干を積込んだのである。

かうした樣々の人の力が加はつて、無論主として運命の恩寵により、プロスペローの舵なき小舟は、地中海の波にも覆へされず、とある孤島に流れついた。全く人住まぬ離れ小島で、茲にはアルジールから追放された獰惡な妖女シコラツクスが、唯一人暴威を振つてゐた。彼女は誰を父としてか、キヤリバンと呼ぶ怪奇愚鈍の伴を有つてゐるが、この者こそ所謂自然人の標本。若し人が全然理性の指導を無視し、ひたすら本能の刺戟するがまゝに動いたなら、其人は丁度キヤリバンのやうなものになつたであらう。飢ゑればのこ〳〵出かけて食を漁るが、滿腹すると共にごろりと寢そべつて惰眠を貪る。性慾に壓迫せられて異性を追かけまはすことは知つてゐるが、愛の戀のといふ高尚な感情を理解する筈はない。彼の有つてゐる唯一つの感情は恐怖である。肉體の苦痛に對する恐怖である。恐怖は彼の神である。彼れの肉體に痛みを與へる力ある者は、彼の最も敬畏する至上の存在物である。しかし考へれば我々の間にも多數のキヤリバンの今なほ存在することは否定できない。

島に來たシコラツクスは、エーリエルと呼ぶ少年を從へ、下僕としようとした。エーリエルはキヤリバンと正反對に、精妙空靈な大氣の精、思想の如く一瞬にして千里を走り、よく空を飛行し、又大地の胎内を潜り、想像力そのものに似て、常に融解自在である。そして殆ど地につける何ものをも有たない。それは丁度キヤリバンが靈につける何ものをも所有せぬのと同樣である。若し詩そのものを形あるものとしたら、エーリエルはそれであらう。彼は雲雀の如く歌ひつゞけ、翔りつゞけて、常に樂しく、常にうららかに、更に肉の願ひをもたない。彼は幼少の故を以てむざ〳〵と醜惡な妖婆の從者とさせられたが、到底彼女の命ずるやうな下劣賤惡の仕事を果すことはできない。遂に彼女の怒を買うて、割かれた松の太幹の間に閉込められ、終日終夜泣きわめいて、其聲野の狼を驚かしたが、そのうちシコラツクスが死んでしまつたので、再び彼を苦難から

救ひだす妖力をもつたものが居ず、彼は叫びながら十二年の春秋を迎へた時、プロスペロー父子を乗せた小舟が漂着したのであつた。

荒凉たる孤島に上陸したプロスペローは、昨日の榮華に引かへて、それこそ辛酸のかぎりを嘗めた。しかし彼は空に漲る黒雲のかなたには、太陽が常に美しく輝いてゐることを知つてゐた。彼は殆ど望みなきが如く見える狀況の間に、なほ望みを捨てなかつた。彼は一歩一歩無秩序な自然を征服して之に秩序を與へ、そこに新しく生きるの途を見出した時、再び學問研究に專念した。そして次第に法術を修得し、或は雲を呼び、風を起し、又よく千里の外を透視し、人心の機微も忽ち直觀して誤ることがなかつた。かくてプロスペローはまづ松の生木に死もやらぬ苦みをしてゐるエーリエルを解放し、彼に、徒らに自由奔放、無規則無制限であることの不可なるを敎へ、一定期間お禮奉公として彼に仕へしめ、法術を行ふの手助けとした。第二の彼の仕事は、半獸人キヤリバンを敎育することであつた。人類が此キヤリバンの狀態から、兎もかくも今日の文化人に進化するまで、どれほどの時の力と、人の努力とが要せられたことであらう。それを僅か一時代で、せめて人間らしく、感化薫育して行かうといふには、プロスペローの偉大な力を以てしてもほゞ絶望に近い。彼れの敎育法は最も實際的のものであつた。彼はキヤリバンを動かすには、理窟でも、訓戒でもなく、唯笞があるばかりであることを知つてゐた。賢者は人によつて法を說く。笞による敎育法を以て時代後れとした現代は、甘やかされた柔弱無氣力の青年を造つて、そのために惱んでゐるのは笑止である。

しかし笞はやうやく生ひ育つたミランダ姫には用ひられなかつた。わが兒かはゆきが爲めではない。彼女は生れながらに無邪氣に、すなほに、美しく伸びゆいて、更に笞の用を見ないまでゝある。友はなくとも、師はなくとも、父プロスペローを師とも友とも賴んで彼女は健かに美しく人と成り。今や花羞かしき妙齡の乙女となつた。父は生きがひあつた事を悅ぶと共に、此無人の孤島に彼女の伴侶を見出さねばならぬ事を考へた。恐るべし、野獸のキヤリバンは隙を覗つて彼女に暴行を加へんとした。事は未然に防がれて彼は重き罰を受けたが、彼はもとより問題にならず。エーリエルは性を超越した空華な夢の子である。

待つ道を知る者には世界がその手に來る(The world comes to one who knows how to wait.)といふ諺があるが、待つ忍耐と、いかにして待つべきかを知るの賢さは、恐らく我々が世に處するに當つて一番心がけねばならぬ德目であらう。絶海の孤島にも春來り秋去つて星霜こゝに十二年、世に望みなく見えたプロスペローにも待つかひあつて遂に絶好の時が來た。彼が一日として

忘れ得ぬ故郷のミラン市には、弟アントーニオーが悪運未だつきず、兄を亡きものにして（と自分は確く信じてゐた）からは誰憚るものなく、宗主侯たる強大なネープルス王には、兇行を問はれざらん代償に年々貢物を納めることにして當面を糊塗し、小康を樂んでゐた。さるところ、ネープルス王アロンゾーは、長女クラリベルを、海を越えたるアフリカのチュニス王に嫁することとなり、長子ソアーディナンド、弟セバスチヤン（Sebastian）を初め、多くの一族郎黨を引具して、その盛典に臨んだが、アントーニオーも阿諛追從の心で此一行に加はり、帆船數艘、舳艫相銜んで渡航したのである。そして目出たく盛儀を終へて再び歸途につき、潮に流されて此孤島まぢかを航行した。茲にプロスペローは又と得難き好機に際會したのである。彼は法術をもて暴風雨を起し、同伴せる舟を四散せしめ、ネープルス王一行の座乘せる舟のみを島の岩角に顚覆せしめ、乘組員一同を鹹き鹽水に溺らせてしまつた。

舟を覆へし、人命を亡ぼしたと、陸に同情の涙に眼を曇らせてゐたミランダはさう思つた。舟人も乘組員も皆さう信じた。實際さうすることは、プロスペローに取り、何でもなかつた。そして彼れの幾年か鬱積した怒は、此復讐によつて甘い喜びを感ずるであらうと推察しても、誰もそれを咎めはしないであらう。しかし彼はさうしなかつた。彼は復讐すべくあまりに大きな心を有つてゐた。彼は復讐するよりも彼等の罪を許すことの、いかに大なる意義あるかを知つてゐた。

キリスト教の教ゆる最大の德は何かと問ふ人あらば、それは人の罪を許すことであると答ふるに誰も躊躇しないであらう。英語の幾萬語のうち、最も高尙なる言葉は何であるかと訊ねらるれば、それは forgive「恕」の一語であると、恐らく多くの人は答ふることと思ふ。君父の仇を報じ、おのが怨みを晴らすを一個の德の如く考へたのは、遠き古へのことでなくてはならぬ。仇を報ずれば、やがて又仇とねらはれる身となる。めぐる因果の火の車が無際限に廻轉して、混亂の止む時はあるまい。許すことは泣寢入りすることではない。犯された惡を看過することではない。一面に人間の弱さ淺ましさを悲み、他面に惡を轉じて善としようとする努力である。日常生活に應用せられた宗教の眞髓は、心から他人の罪を恕すことになくてはならぬ。

船が火を失したと見て皆々海中に飛込んだが、そのなかから九死に一生を得て陸に這ひ上つた第一の人は、ネープルス王の愛長子ファーディナンドであつた。鹽たれ衣を乾しもあへず、渚に蹲まつて今や亡き父の運命を悲んでゐると、いづこともなく妙なる音樂が聞える。此の人影を見ぬ離れ小島に不思議な事よと、思はずその音樂に導かれて行くと、更に〳〵思ひもかけぬ姿に逢會した。一人は白髯を長く垂れて、威容冒し難き高貴な老翁で、他の一人はその娘と見える容姿甚

だ端麗な乙女である。王子は歎聲を放つて、これこそ島の女神よと跪き、試にいかなる方かを訊ねると、乙女は立派なネープルスの言葉で答へる。そして一言二言言葉を交すうち、更に不思議とも不思議なる若き男女の心の動きよ！　二人ははや一目見ての戀に陷つてしまつた。しかし老翁は、何を憤つてか、面上朱を注ぎ、ネープルスの王子と稱するは僞りで、此島を奪はんために來た惡漢であらうと、一も二もなく彼を引立てゝしまつた。これまでが第一幕。

フアーディナンドは自分が生き殘つた唯一人の者であると思つたが、島の他の所に打上げられた彼の父アロンゾーは、群臣皆恙なく、身につけるもの一つさへ失はれぬのに、末の頼みとする長子と死別し、身の救はれた喜びを忘れて、悲歎の涙にくれてゐる。好漢ゴンザーローは、持前のおしやべりで、月並の慰め言葉を並べるが、王は氣のない返事をするばかりである。そのうちどこからともなく、不思議に莊重な音樂聞え、それに耳うち澄してゐるうちに、一時に重い眠りが襲ひ來て、王を初め臣下達は、次々に深い熟睡に陷つた。なかに王の弟セバスチヤンとプロスペローを追うたその弟アントーニオーの二人だけは、何故か、少しも眠くない。たわいもなく眠りこけた一同を尻目にかけて腹黒のアントーニオーはそろ〳〵と妙なことを言ひだす。不思議の運命によつて茲にお互に命拾ひをしたが、幸運はなほさら二人を祝福するらしい。所は無人の孤島、時しも一行は麻醉劑でも嗅がされたやうに眠つてゐる。腰なる劔の一ト突きで、自分が兄をさせたやうに、王を亡きものにすれば、王國はセバスチヤンのものになる、報酬にはかねて約束の年々の貢物さへ許して貰へれば、それで充分、一臂のお力添へをしませうと、限りなき慾心はあらゆる時に働いて、兇惡な心に寸分の休みもない。之を聞いたセバスチヤンも、もとより耳に快い言葉である。では氣を揃へて、さあ一緒にと刀を抜き放つと、夢見心に王にかゝる一大事を警戒されたゴンザーローが目を覺ます——

Gonz. Now, good angels, preserve the king! [To Sebastian and Antonio] Why, how now! [To Alonso] Ho, awake! [To Sebastian and Antonio] Why are you drawn? wherefore this ghastly looking?

ゴンザーロー　あゝ、善天使、王を守護せしめ給へ！（兩人の樣を見て）よ、どうしたのです？（王をゆり起す）おゝ、お目覺め遊ばせ。（又兩人に）なに故方々は抜劍しておいでなされる！　このすさまじい御樣子は何事です？

王も醒めて之をいぶかり、群臣一同騷ぎたてるので好機は逸してしまふ。あわてた二人は奇怪に

猛獣の叫聲を聞き、萬一を怖れ、かく警護してゐたのだと、苦しい辯解にやうやく共場を繕ふ。

いふまでもなく、すべて是等の事柄はプロスペローの法術により、エーリエル共命を受けて行はれたのである。實にそれは天の攝理そのものの縮圖のやうである。自然は無目的に無秩序に人間の福祉安樂に全く無關心に、動く。しかし天は――若し我々が天を信ずるとすれば――目的をもち、秩序を定め、人類がよりよくなり、より親しくなるやうにと行爲するに相違ない。だが人間は目前の利害に惑はされて、此の大きな目的がわからない。暗中に摸索して、用もなきに悲み、怨み、企み、憤る。達觀する者の目からすれば、達觀せざるものの行ひ感ずるところの、何と淺はかにて憐むべきことよ！

プロスペローの法術が機會を與へて、その平生の心を遺憾なく曝露した最後の一組は、トリンキュロー(Trinculo)と呼ぶ王に仕ふる幇間達であつた。彼れやうやく危難を免かれて磯に辿りつき、のこのこと見物氣分に歩きまはつてゐるうち、恐ろしい雷雨に出逢つた。をちこち見廻しても身を隱すべき木の根も岩蔭もない。と、甚だ變なものが地にへばりついてゐるのを見つけた。やや人の形相を備へてはゐるが、鰭の如く尾の如きものを引きずつて、生臭い匂ひからして一種の魚とも見られる。これぞシコラックスが遺兒キャリバンである。彼れ日課として薪を運ぶことを命ぜられてゐたが、性來のなまけ根性に、ぐづ〳〵時を過ごしてゐるうちトリンキュローの來るを見又精靈が奇妙な姿に變じて自分を責めさいなむぞと思ひ、觸らぬ神に祟なし、地に平伏して難を脱れんとしたのである。それとは知らぬトリンキュローは、何はともあれこれとても避雷物とキャリバンの腹の下にもぐり込んで桑原々々。

と又現はれいでたる異樣の姿、雷雨も物かはと手に大きな酒徳利を携へ、醉歩蹣跚、赤ら顏の肥滿の小男、給仕頭ステフアノー(Stephano)その人であつた。命から二番目と下世話に云ふが、あの驛ぎの間に、どこをどうもぐつて來たか、徳利を手放さない。お蔭で雷雨のなかをびくともしないで高歌放吟、いよ〳〵驚いたキャリバンがぶる〳〵震へてゐるので、こいつ島人が瘧を患つてゐると早合點し、口を開けさせて徳利のものを注ぎ込む。キャリバンは生れて初めての甘味、嬉しさにのこ〳〵這ひ出し、ステフアノーの足を嘗めて、忽ち家來となつて彼を島の王にしようといふ。誰でもよい、黍團子を與れさへすれば、彼は大將だ。（此處で第二幕終り）。

その上此怪物はなか〳〵の惡漢、ステフアノーとトリンキュローをうまく持上げて、自分に安逸の生活を許してくれぬプロスペローに兇行を加へようとする。

Cal. As I told thee before, I am subject to a tyrant, ——a sorcerer, that by his cunning hath cheated me of the island.

.....

I say, by sorcery he got this isle;
From me he got it. If thy greatness will
Revenge it on him,——for I know thou darest.

.....

Ste. How now shall this be compassed? Canst thou bring me to the party ?

Cal. Yea, Yea, my lord; I'll yield him thee asleep,
Where thou mayst knock a nail into his head.

.....Remember
First to possess his books; for without them
He's but a sot, as I am, nor hath not
One spirit to command: .....
And that most deeply to consider is
The beauty of his daughter; he himself
Calls her a nonpareil; I never saw a woman,
But only Sycorax my dam and she;

But she as far surpasseth Sycorax
As great'st does least.

キャリバン　前にも申上げます通り、私は暴君の、魔法使の、家来で御座います。そいつが奸智を以て私を欺まし、此島を奪ひ取つたので御座います。……若しも殿様があいつに復讐して下さいますなら——えゝ勿論あなた様にはできますとも。

ステファノー　どんな手段でやれるかね？　貴様はその者どもの所へ案内することができるか。

キャリバン　はい〳〵、殿様、私はあいつが眠つてゐるところをあなた様にお渡しするから、あいつの頭に釘をぶちこむなり何なりやれます。……忘れちやあいけません、まつ先にあいつの書物を占領しちまふんです。書物せえなきゃ、あいつも私同様の抜作で、精霊一人指図できやしませんよ……それから一番熟考せねばならねえことは、あいつの娘の美しいことですよ。あいつ自身でも絶世だと云つてゐます。わしは他に女で見たことはありません。老母のシコラックスと、あの女きりですが、シコラックスなんざ、あの女の前には、一番俗い人と一番けちな者位ゐの違ひが御座います。（第三幕第二場）

島の王になれるさへあるに、無類の美女が手に入るとあれば、酔ぱらひどもも褌を締めなほさなあらし

くてはならぬ。

第三幕を過ぎて、プロスペローの計畫は着々として進行する。王子フアーディナンドとミランダとの戀は最も純な眞劍なものであることが證明せられた。戀のためには王子の身にありながら、賤しい業に骨身を碎くを意としなかつた。プロスペローは大に滿足して二人に結婚の約束をなさしめる。そして婚約の式の祝ひにと、エーリエル及び部下に命じて假面劇を演ぜしめる。様々の美しく裝うた女神あまた現はれて、ことぶきの詞を述べ、興正に闌である頃、プロスペローは、俄然色を變へ、鞭を上げて催しを中止せしめる。妙なる樂も、麗しき舞臺面も、忽ち消えてあとかたもないのに若き二人はいたく驚く様を見て、老道士は靜かに語る——

These our actors,
As I foretold you, were all spirits and
Are melted into air, into thin air:
And, like the baseless fabric of this vision,
The cloud-capp'd towers, the gorgeous palaces,
The solemn temples, the great globe itself,

Yea, all which it inherit, shall dissolve
And, like this insubstantial pageant faded,
Leave not a rack behind. We are such stuff
As dreams are made on, and our little life
Is rounded with a sleep.

此俳優どもは、
かねてお話し申せし通り、みな精靈、
大氣のうちへ、薄き大氣のうちへ、流れこむ。
此幻影の根なき構造に似て、
雲に沖る高閣も、豪華を極めし宮殿も、
莊嚴無比の堂塔も、此大地球そのものも、
いや、大地のうけつぐ萬物も、皆消散し、
この空なる壯觀の消えしが如く、
あとには殘る片雲もなし。
我等は夢と同じ材より成り、

此のささやかなる一生は
眠りを以て終始する。

此の白は數多き沙翁の名句の中でも、あまりにも有名な一節で、最も屢々引用せられ最も廣く愛誦せらるゝものである。まことに斯かる言葉は、人の世を醉生夢死した徒が決して口にし得られるところでなく、浮世の荒波を潔く、力強く、乘り切つた人の初めて眞に體得し得る所のものである。幼少より人生に奮鬪力戰を續けて來た沙翁の晩年の述懷としてさこそと首肯せられる。傳へいふ、米國の聖人的政治家エブラハム・リンカーンは、大統領として自分の信ずる大道が部下の閣員にさへ認められず、理想の實現し難く、人生の辿り易からざるを痛歎してゐた頃、疲れて休まんとする前に、毎々此一くさりを秘書官をして朗讀せしめて、自ら心を慰めたと。

閑話休題。プロスペローは斯く語り終つて感慨無量である。しかも長く冥想に耽る暇もなく、新しい行爲に着手しなくてはならない。それは愚鈍淺薄なキャリバンに唆かされて、柄にもなく兇圖を抱いた二人の醉漢の、忍び近づく時が來たからである。プロスペローに取りて彼等は鎧袖の一觸にも價ひしない。しかしかのキャリバンが、どれほど導かれ教へられ慈悲を加へられても、少しも恩義を感ずることなく恩を仇で返す樣な淺ましい心を起すかと思へば、あまりに情けない感じを禁じ得ない。それも世の常、キリストを敵の手に渡したものさへある。高き人であればあるほど忍耐しなくてはならぬ多くのことをもつてゐる。彼はいつもの如くエーリエルに命じ、忍びよつて物盜まんとする三人を、獵犬をけしかけて追拂はせる。

第五幕に入つて、すべての事の決算せられる時が來た。アロンゾー王の一行は、狂せる者の如くなつてエーリエルに導かれ、プロスペローの洞窟の前に現はれる。玆にプロスペローは名乘りを上げて一同を歡迎し、とりわけ老ゴンザーローに向ひ、十幾年か前の親切な行爲を感謝する。弟アントーニオーと王の弟セバスチヤンとは強く叱責せられて先非を悔いる。一子を失ふて慰めやらぬ王アロンゾーを麾いて、プロスペローがかなたの幕を排すれば、いとも健かに幸福に見えるフアーディナンドが、美しき姫と棋(チエス)をさして樂み興じてゐるではないか。それこそ夢かとばかりに再會の喜び盡きず、その上に二人の婚約は双方の父親の嘉納するところとなつて、春風忽ち堂に滿ちる。トリンキュロー等は盜みし品を返へし、水夫一同も皆恙なく、船さへ帆綱一筋失はれずして島かげに繫がれてある。かくて、エーリエルは約の如く從僕たることより解放せら

れて自由の身となり、喜び勇んで空氣のなかにいづくともなく飛行する。一同は此の一兩日の經驗によつて、我儘勝手な、放縱な、物慾一遍の生活が、決して人生の望ましい生活狀態でないことを痛感させられ、來し時よりも、二人の最も賢く最も美しき伴侶を加へ、目出たく故鄕に歸航するのである。

「あらし」の書かれた年代は一六一〇――一二年との推定が最も確からしい、卽ち作者四十七八歲頃の作。

此劇は沙翁作中の恐らく最後のもので、篇中ところどころ、作者自らが劇壇に訣別辭を述べるらしい條りがあり、又主人公プロスペローの述べるところに、どこか作者自身の面影があり、又引くるめた最後の人生觀ともいふべきものが、際立たずに、どこかに窺はれる樣な氣もする。つまり一生の總括りと思はせる作で、人事の百般を閲し浮世の甘酸を嘗め盡し、殆んど五十年の人間的修養を經て氣高き一個の宗教人となり、小さき悲喜の世界の外に超然として、高所に世相を靜觀する作者の神々しさが、こゝに髣髴としてゐるやうである。

蓋し我々人間が理性の指導に從はず、若くは理性の明るさを缺き、單に衝動と本能とに盲從するは、人間としての破產を招くことである。斯く云へばとて理性の萬能を說くものではない。又素質の最も純な人にあつては、その衝動的素直な行爲の頗る美はしい事を認めざるものでもない。けれど我々平凡人に取つて、我々が只本能に任せ、只衝動に驅られて行ふの危險なることは、どうしても認めざるを得ない。そこで、我々は宜しく大いに人間的修養を積んで、本能と衝動の自然人より進んで理性人となり、更に進んで忍耐と寬容の宗教人にまで進步することを期せねばならぬ。これを本篇の主人公に見るに、プロスペローは學を嗜むの餘り、學問に沒頭してミランの太公たる職責を閑却し、その爲に腹黑き弟の爲めに領主たる地位を簒奪せられ、梶なき舟に乘せられて孤島に漂ひ着き、玆で前非を悔いて更に一段の修養を積み、遂に融化自在の神通力を得る。かくて隱忍十餘年の後、時は終に來て、同じく此島に漂着する弟等の一行に、自分の神通力を以て樣々身の爲めになる經驗を嘗めさせ、そして彼等の先きの日の罪を宥してやる。是れ卽ち「人間は、己れに取ては學ぶことゝ忍ぶ事が第一の要務であり、他人に對してはその脆く弱きが爲めの罪過を寬恕することが第一の務である」といふ事を暗示するものではないか。プロスペローの一生はよく之れを敎へて、自然人から發達して來た宗敎人は斯くもあるべきかと思はせる。

プロスペローが此島に到る前の先住者なる二人の極端な生物は、實は人間の心のなかにある二つの素質を象徴するもので、彼は之を馴致して共に人生に役立つものとしようとする。その中の一人なるキヤリバンは其性質の中に唯物質上の我慾と、本能的な性慾と、生れながらの怠け根性、泥棒根性があるばかり。プロスペローは此自然人を征御し次第に文化人に發達せしめようと苦心するのである。

今一人のエーリエルはプロスペローによつて解放された者で、詩人であり、藝術家であり、想像の人である。彼はキヤリバンよりも遙かに立派な被造物であるが、彼及び彼に類似したものばかりの世界が來ない以上、彼はそのまゝで我々の手本にならぬ。彼が我々の間にある事は非常に善いことであり、又我々の向上を歌ふのは彼であるが、彼れの歌が直に我々の行爲の模範にはならない。窃かに思ふ、今日の若き人々—殊に文學藝術好きの—の間には一種の誤解がありはしないか。彼等の或る者は詩人の素質、詩人の心の純潔さ透明さがなくて、動もすれば詩人の放縱なる自由解放の理想、例へばシエリーの自由戀愛論、戀愛反復論などの如き)を直ちに自分の日常行爲の標準としようとする。彼等が眞の自由解放を得るためには、なほプロスペローの訓鍊を受ける必要があらう。

35. King Henry VIII.

「ヘンリー八世」

五幕、一六場、外に序詞と閉幕詞。總行數二八〇九。

王ヘンリー八世は肉の人である、奢侈を好み虚榮を愛する。此弱點は王の寵臣たる大僧正ウルジー (Cardinal Wolsey) の或意味に於て同じく有する所で、此要求を充す爲には、苛歛誅求を以て國庫を豐富ならしめねばならぬ。人民怨嗟の聲は只王の耳に入らぬのみである。賢夫人なる王妃キヤサリン (Katharine) は之を憂へ、面を犯して諫める。王は驚いて寛容の令を發せしめる。大僧正も致方なく之に從ふ。

ウルジーの專横を憤るの聲は宮廷に充ちる。殊に罪なきバツキンガム (Buckingham)公をば、只其權勢を妬むのあまり僞證を作つて叛逆人として所刑する事は、いたく人民と貴族等とを怒らしめる。

饗宴を好むウルジーは自邸に朝野の貴族夫人を集めて亂舞の催をする。王も微行して之に列し、ゆくりなく王妃の侍女アン・ブリン (Anne Bullen) を見染める。(以上第一幕)。

王は此戀の熱するにつれて、曾ては兄先王の妃であつたキヤサリンを自ら容れて妃とした事の適否といふ問題を事新しく想ひ浮べ、キヤサリンと離婚せんと欲して、悶々としてゐる。奸智あるウルジーは此機會を見て王に說き、是れを決するが爲に會議を開き、王妃を召して自ら裁判せんとする。賢明にして貞節ある妃は、王命に反かず一旦は席に列したが、臣下たるウルジーの判決を受けぬ。斷乎として之を斥け、法王の判斷を仰がんと席を蹴つて立つ。(以上第二幕)。

ウルジーは賢明な妃の離婚は喜ぶが、新敎徒たるアンの後に來るを喜ばぬ。由つて竊に羊の假面を被つて妃を訪ふのであるが、妃は狐狼の如き彼に耳を藉さぬ。かゝる內に王は僧等が徒に荏苒日を過すを快とせず、自ら裁決してキヤサリン妃を離別し、私かにアンを容れて妃とする。

此時折惡しくも大僧正が羅馬法王に向つて送るべき書簡が誤つて王の手に落ちた。此中には彼が王を操れる次第を委細に記してあつた。又大僧正の夥しき私產の目錄が貴族等の手に依つて王に呈せられる。彼は一時に偉大の絕頂より失墜する。そして突然病死して爲に死刑に處せられるのを免がれる。(以上第三幕)。

憐むべき先后キヤサリンは、百合の如く淸くして寂しき晩年を病み、信仰ある信者の如く靈の慰を得て逝く。アンは公然王后として位に就く。(以上第四幕)。

新后アンは美しき王女を擧げる。今やウルジーが後を受けて君寵を擅にし又有力なる貴族達の嫉妬の的となれるカンターベリーの大監督(アーチビショップ)クラムマー(Cranmer)が、聖き水を此嬰兒に注ぎ、熱ある祝禱をなし、之をエリザベス(Elizabeth)と命名する。かの英明なる女王は是れである。(以上第五幕)。

此史劇の作者と年代のことに就ては四二頁八行目以下參照。

此劇の主人公はヘンリー八世なれども、劇としての興味は寵臣ウルジーの浮沈に集まる。されば輓近名優ヘンリー・アーヴィングが此史劇を復興するや、ウルジーの失墜後は只その筋だけに止めて置いた。

篇中第三幕第二場に於ける沒落のウルジーが告別の長白(ながぜりふ)(次に揭ぐ)は名高いもの、日本でも殆ど五十年ばかりも前に既に外山正一教授の新體詩の譯によつて世に知られたところである。——

Farewell, a long farewell, to all my greatness!
This is the state of man: To-day he puts forth
The tender leaves of hope; to-morrow blossoms,
And be rs his blushing honours thick upon him;

The third day comes a frost, a killing frost,
And—when he thinks, good easy man, full surely
His greatness is a-ripening—nips his root,
And then he falls, as I do. I have ventured,
Like little wanton boys that swim on bladders,
This many Summers in a sea of glory;
But far beyond my depth: my high-blown pride
At length broke under me; and now has left me,
Weary and old with service, to the mercy
Of a rude stream, that must for ever hide me.
Vain pomp and glory of this world, I hate ye:
I feel my heart new open'd. O, how wretched
Is that poor man that hangs on princes' favours!
There is, betwixt that smile we would aspire to,
That sweet aspect ot princes, and their ruin,
More pangs and fears than wars or women have;
And, when he falls, he falls like Lucifer,
Never to hope again.

をさらばさらばいささらば　再び會はぬ暇乞ひ
榮譽に長く別るべし　人の習は皆都て
利運の端の芽出しなば　八重に花咲き花盛り
位に位重りて　榮燿榮華を極むれば
愚かな胸に思ふ樣　祿運强く望みかなひ
天にも登る龍なりと　悅びいさむおろかさよ
冬やゝ深く置く霜の　情け用捨も荒野原
根までも枯す霜枯に　運極まりて身の墮落
見るもあはれな有樣は　我が今日の身の上ぞ
永の年月心なく　名譽の海に浮べるは
板子を頼みうかゝと　游ぐ童子に異たらず
丈の立たざる淵に入り　飽くまで强き我が意地も
堪へおほせず張り裂けて　疲れはてたる精神に

忠を盡して年寄れる　其甲斐もなく今ははや
身の零落に涙川　水屑とこそは成るべけれ
浮世の虚飾や譽れ程　忌むべきものはあらずかし
今に至りて我が胸に　初めて悟る所あり
廣き世界の其内で　王者の機嫌取り取りに
此世を渡る男ほど　憐むべきはなきぞかし
願ふ所は其の笑顔　恐るゝ所は其の不興
彼と是との氣がねして　憂さ恐怖さの數々は
軍するより尚ほ多し　女子の機嫌取るに增す
遂に零落する時は　天より落るルシフアなり
再び浮ぶ瀨はあらず

沙翁と宗教

シェークスピアは人事百般の事悉く攝取して其の劇中に收めてゐるが、たゞ宗教の事だけはない、とは多くの人の謂ふところである。彼れ自からは根づよい清教徒の信仰を持つてゐたとも云はれ、或は否彼れは父祖傳來の舊教徒であつたとも傳へられ、又彼れが聖書の非常なる愛讀者で、聖書によつて育てられ之を能く理解し且つ之を縱横自在に活用した事――シャイロックの白が全然舊約聖書から引用せる言語を使つてゐる事など――も廣く知られてゐることであるが、彼れは、かの舊教の爲めに流謫の身にも拘はらず其の紀念塔を作るべく生命を惜まなかつたダンテや、又は清教主義の爲めに兩眼を失ふてなほ筆を執つたミルトンとは、大いに違ふ。彼れは性格の上からも、將た文藝復興期時代の兒たる上からも、寧ろ左樣な宗派熱を超越してゐた。彼れの筆に殘したところからは、彼れが宗教上どんな意見を抱いてゐたか推測すらもなし難いのである。

彼は爾く宗教を說くことを避けた。併し宗教問題が取扱はれてないといふ事と、そこに宗教がないといふ事とは、自から別問題で、混同してはならぬ。元來が現世肯定者であり生の享樂者である彼れは（但し單なる現世肯定者、生の享樂者であることよりは遙かに遠い）、世相のすべてを

描き盡した彼れの劇作の中の何處にも「如何なる旅人も曾つて其境より歸り來りしことなき不可知の國」のかなたに就ては、殆んど何等いふところなく、ハムレットの臨終の語に謂はゆる「餘は沈默」The rest is silence で、只不可知と見たのが事實らしい。けれども不可知論を以て直ちに無神論無信仰と做すは、無理解の甚だしきもの。信仰は寧ろ知られざる所、解せられざる所、證明を超越する境から起るとさへも云ひ得られるのである。

近代の人々に取て、來世は問題でなくなつた。來世を信ずるものにも信ぜざるものにも、宗教の救ひは同樣に來る。無論或る大きな力に對する信仰がなくては宗教ではない。併しながら宗教の救ひは遠い來世を去つて、直接我々の現下の生活に關係するやうになつた。そこに新しい宗教の意義と威力とが認められて來た。新しい宗教を說く H.G. Wells 氏は說く——

「神を見出す事は奉仕の初めである。そは生活と活動から逃避する事でなく、生活と活動とを通ずべき自我の獄舍から救助する事である。人は須らく一切を擧げて神に自らを捧ぐべきで、其他に救ひの道はない。」

來世を說かない沙翁の宗教味も此の精神に近い。惟ふに若し來世を語り、教義を論爭し、現世を忘却し、若くは一定の時所に集つて特殊の儀式を守ることが宗教ならば、彼には宗教はなかつたと云つてもよからう。だが Walter Bagelot の云つたやうに

There is a religion of week-days as well as of Sundays.

「日曜日の宗教もあれば平日の宗教もある」

とすれば、シェークスピアの描ける世界は、宗教的空氣と情操とに滿ちたる世界であると斷じなくてはならぬ。彼れは直接宗教は說かないが、實際最廣の意味にて宗教的である。彼れの劇中最も多く思想的なものと稱し得べき「ハムレット」を初め其他の重要なる作物に漲るところのものは、廣義での宗教的空氣である。「ホレーショ、この天地間にはおん身の哲學で解けぬものが幾らもある」と云つたハムレットの言葉を、改めて作者シェークスピアから聞く心地がする。

殊に最後期の作三篇に至ると、我々は一段と、しんみりした宗教的境地に誘はれる。love と共に英語の最大な言葉である forgive てふ一語の人間と化したのが「シムベリーン」のイモーゼンであり、「冬の物語」の「ハーマイオニ」であり、「あらし」のプロスペローである。實行的宗教として「恕」の一語の傳へる意味は、甚だ重く尊いものである。基督教道德の最高な精髓は、この寛恕といふ精神に在る（勿論それが基督教の全部とはいはぬ）復讐でない、憎惡でない、心から恕すのである。凡ての罪は人間の脆く弱きから來るのだから、之を咎めるよりも恕さうではないか。

誰も自分を正しとして人を罰するの權利も力量も持つてゐない。寛大、忍從、許容、それが人間として最も人間らしく、人間の社會をして最も神の國に近からしめるものであらう。

概していへば、「人生は涙である、運命は不可抗力である。然かも此涙の道を、不可抗力の重荷を負うて、忍耐して歩む者は、必ず最後の勝利を得る。百歳を誓つた夫婦の語らひも、不圖した誤解から離別せねばならぬこともある。道德を守る爲には親身の同胞をも見殺しにせねばならぬ事情も生ずる。信じ切つた兄弟の惡計に罹つて、破滅の境に追ひやらるゝ事もある。是等は皆浮世の常相である。然し最後迄潔い大きな心を以て、信じて疑はず、自ら忍んで他を咎めず、努めて倦まざる者には、必ず報償がある。天は決して盲目なものではない。運命は必ずしも苦がきものゝみではない」といふやうな、謂はゞ男性的樂天主義が、沙翁の晩年の作物に現はるゝ精神である。これ實に人生を最も健全に解釋した人の最後の最も尊むべき教訓であると思ふ。天命の現はれとしての此世界、其の世界を貫く秩序、その秩序の研究者、その表現者としてのシエークスピアは、最廣義の宗教に對して決して無緣の人にあらずと云はねばならぬ。

然らば沙翁の悲劇に於けるあの「不幸な結末」は、抑も何を意味するのであらうか。

吾々は之を見る初に當つて、少なからず希望を喚起されるが、それにも拘らず青天の霹靂のやうに、言はん方なく悲しき最後の大破局に到達する。何とぞして仕合せな結末となるやうにと望みをかけたのが斯かる不幸に終つて、今更ながら痛ましく涙ぐましく感ずるのであるが、併し又よくよく考へると、此世の我々が見て不幸な最後と思はれるものも、廣義の宗教的な意味からして實は左樣でないのではあるまいかといふ感が強く響く。人事の百般は現下目前の事柄のみでは解釋しきれぬといふ感じである。死のかなたの世界が、神秘的にどこかに強い光彩を六合に遍照してゐて、始めて我々の魂は安んじられることを、しみ〴〵と感得させられるのである。即ち、そこに最も崇嚴なる魂の試錬と淨化を受けるのである。

私は我が近松の「心中物」に腹立たしくなる一人である。「まあお前さん、どうした因果で、魂ぬけてそんな事に身悶えするのだよ。成程お前さんの見方から見れば四方も八方も塞がつて、剃刀を用意する外に道はあるまい、が一轉化して他の角度から人生が見えないか、少し角度を變へて見たらお前さんの前途はずつと開けて行くのだよ」と云ひ度くなる。焦立たしくなる。けれど又翻つて考へると、戀するものには戀が生命であらう。我々の考へとは全く遠ふ境をさまようて

ゐるのだ。「お前さんがそんなに未來で添遂げる確信があるのなら、行きなさい。理想の世界へ急ぎなさい」と又言はずにはゐられない。近松の「心中物」には大抵きまりきつて最後の死樣が思切つて殘酷に書かれてある。實に酸鼻の極であるが、それが故意に左樣にされてあつて、此の闘一つを越えた向ふに、すがすがしい調和の世界、融和の境地がある事を充分に感じさせる一手段ではないかと考へられる。

私は「心中」は嫌ひ。日本人があまりに現世に執着がなく、少し困れば直ぐ死に解決を願ふのを腑甲斐ないと思ふ。が併し悲劇の最も偉大なる機能たる魂の淨化、――卽ち此世につけるもの、瑣屑些細なもの、つまらぬ齷齪たる感情に支配せられる境を超越する事は、近松に於ても充分學ばれ得る。それはシェークスピアに於ては勿論のことである。

沙翁の舞臺その他

沙翁時代の劇場

一五七六年卽ち十二歳のシェークスピアが故郷の町の小學校に通つてゐた時まで、英國にはどこにも一定の劇場といふものはなかつた。では劇は、どこで演ぜられてゐたか？

そこに二つの流れが流れてゐた。それは丁度中世紀の宗教劇道德劇の流れと、ルネッサンスによつて復興した古典劇の傳統の流れと、の二つに相應ずる二つの演出法である。

まづ簡單な方の古典の傳統から檢査する。

ギリシヤの戸外無蓋式の大圓形劇場はローマに到つて、單に勇壯な見世物場たる圓形戲場amphitheatre となる時、正面の舞臺に役立つた建物は不必要となつて、單に中央の pit（闘場）のみが競技爭闘に用ひられて、之を取圍む大きな圓形の見物席と共にローマの一偉觀となつた。

然るにルネッサンスのイタリーが古典劇を復活し又之を模倣するに及び、その劇場も又古典を則るものであつた。そして正面の建築物をいやが上に壯大華麗にし、演劇には建築美の要素をも攝取すると訪つた。そして此建築物は某々の住家、又は殿堂であるが故に、登場人物はその住宅

より呼出されて、又は殿堂に近づき來つて、その前で演ずるといふ仕組にするの約束を强いられてゐた。

英國が同じく文藝復興期に乘じて古典劇の模倣に着手した時、又かくの如き古典風のイタリー式の劇場を欲したであらうが、その願ひは充されなかつた。彼等は學校のホール又は宮廷の一部分を使用し得たに過ぎなかつた。そこでホールの一方に幕をはり、之に何某の家と記し、その前で演じたやうである。

イタリーでは最早舞臺の前面に幕を張り、觀衆と舞臺とを截然二つの世界に分つてゐるが、之も許される限り既に十分近代風の額縁式舞臺を造りだしたやうである。

しかし以上は私演劇場のことで、シエークスピアの時代を飾る公開劇場は全然異つた起原と特長をもつたものである。今日「シエークスピアに還れ」と叫ばれるものは、決してイタリー風模倣の古典式劇場を指して云ふのではない。シエークスピアの舞臺は中世紀に根生えた宗教劇、道德劇の系統を引いたもの、即ち全然今日の劇場とは變つた樣式のものである。

此の所謂シエークスピアの舞臺を窺ふために、一とわたり宗教劇以來の歷史を參考しなくてはならない。

古典劇に對するシエークスピアのロマンチック・ドラマ（浪漫派の劇）は、いろいろの點で區別せられるが、その相異の主要な一つは、場所の一致に對して更に頓着しない點にあるかと考へられる。古典劇の模倣者等は其點で、いやに小やかましく、舞臺の前の一つの建物に執着し拘泥することが餘りに甚だしいやうであるが、此考へ方の崩れて來た姿が、舞臺方面から窺はれる事は頗る興味あることである。

中世紀劇の發芽たる教會內の宗教劇に於ては、場所について矢張り面倒くさく考へたらしい。即ち一つの出來事には一つの場所を要し、次の出來事には又次の場所を要求したのである。

宗教劇が教會を出で、僧侶の手を離れて市民の職業組合に移さるゝに及び、劇の上演せられる方法が二つに別れて來た。一つは定着した圓形劇場で、他は移動する車上劇場である。此兩形式は市の都合上と、それぞれの好みに任せて、いづれをも用ひたのであらうが、英國に於ても圓形劇場を用ひた事が恐らく多かつたであらうといはれ（Albrightの說）、まして大陸では殊にさうであつたらしい。

宗教劇はギリシヤの劇の如く年一回の興行である。その一回の日の待たるゝ心持も想像に難くない。道德劇も、恐らく、さう度々演ぜられたものではあるまい。しかし此道德劇も次第に末期に

及んで形も單純となり、そして間劇 Interlude と稱せられて、饗宴の合間々々に、多く貴族富豪を樂しませる役目を帶ぶるに及び、一面に職業的の俳優も出で、需に應じて幾度でも演じたことは勿論である。そして上演の場所も、より都合よい場所を求めた。勿論貴族の宴に侍するには、そこにホールがあつたであらうが、旅俳優はそんな場合をのみ當てにしたのでは生活し得られなかつたであらう。そこで彼等の第一に選んだのは宿屋の中庭である。

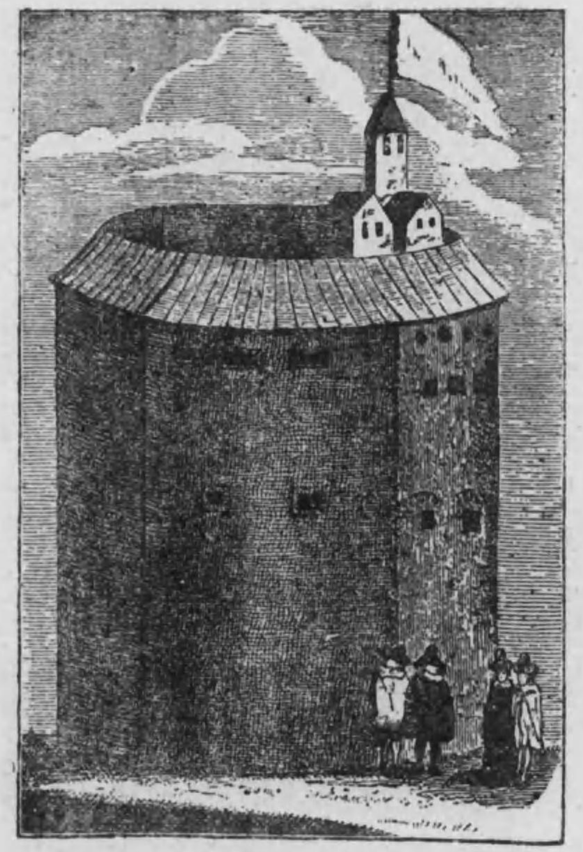
文藝復興の春が來て、そして國民的活躍の氣運が漲るにつれて、舞臺の上に活動する人生を見たがる國人の望は切なるものがあつたらしい。bear baiting（熊いぢめ）や鬪雞などの見世物も長く流行してゐたが、そんなものでは無論滿足が出來なかつた。

ところで他面に、英國にはルネッサンスの春に、宗教改革の北風が早くも吹きすさむといふ狀態にあつた。殊に英國獨特のピューリタニズムは一部の人々に陰鬱な影を投げかけてゐた。彼等は芝居を以て惡魔の學校となし、極力その擡頭を壓迫しようとした。そして彼等の勢力は殊にロンドン市に盛であつたので、遂に一五七五年には市内に劇場設立を禁止する法令を發布した。劇場の未だ建築せられてゐないのに、之を禁止する法令の出た事は、劇場を建築したいといふ許可を乞ふものゝ相當にあつた事を意味する。それを阻止して遂に市の法令となつた以上、最早止むを得ぬと見たのか、此令の出た翌年卽ち一五七六年に市の北の城壁外に劇場を立てる者があつた。壁外は市の監理外にあるので前年の法令も施すに由ないのである。これが英國で立てられた第一の劇場で、名づけて單に The Theater と云つたのも、他に紛らしいものゝなかつた事を語つてゐる。その翌年一五七七年、やはり同所に接近して The Curtain 座が立つた。シェークスピアの初期の作少くとも十二種は此二つの劇場で上演せられたのである。

約十年の後、一五八七年には、地をテムズ河の南、所謂 the Bankside（河岸）と呼ばれる遊覽地に撰んで一の劇場が建てられた、名づけて The Rose といふ。次に其れより少し西に The Swan が一五九四年に建てられた。

そのうち一五九六―七年に、市内の盛場である Ludgate の内側に The Blackfriars Theater が建つた。これ一見反則のやうに見えるが、此地は寺院領であつて市の采配を受けないのと、又劇場も a private theater と銘を打たれてある。此私演劇場といふ意味は、今日の意味とはずつと異つてゐる。それは劇場に屋根があり、從つて雨天でも冬の寒空にでも興行ができる。そして暗いから蠟燭を點じてやり、箱席（ボックス）には錠がかゝり、無論入場料も高い。隨つて上流客の集まる處。此 Blackfriars 座は宮廷などの芝居の系統を引いて、全體が四角の建物で、舞臺も前に見物の間

に突出せずして、一方の端の全部を仕切つて舞臺としたらしい。シェークスピアが筆を取つてゐた頃の唯一の重要な私演劇場で、後 Whitefriars, The Cockpit, Dalisbury Court などの私演場が出來たが、皆範を此 Blackfriars に取つたもので、人氣の點でも遙に劣つてゐた。此座は長く殘り後の Drury Lane や Covent Garden の先祖となる。



The Globe Theater

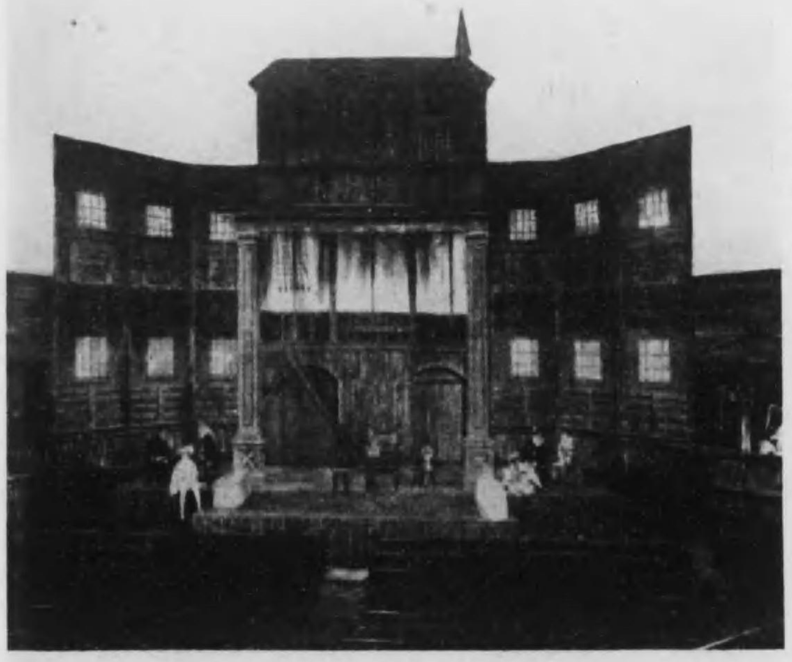
一五九九年夏の興行には、テムズ河南の Bankside に一座が出來た。The Globe と呼び、重に夏の興行用に供した。シェークスピアの重な劇は此 Globe の公演劇場と、Blackfriars の私演劇場との兩所にて上演せられたのである。此 Globe 座は一六一三年火災にて燒失したが、再建して一六四四年まで繼續した、沙翁と最も關係深い劇場である。

一六〇一年の七月 The Curtain とあまり遠くない所に、Globe に學んで、一の劇場が建ち、the Fortune Theater と呼んだ。此座は下級の民衆相手で、外形が圓くも六角形でもなく四角で、內部も又四角であつた事が特長である。次で一六一三年グローブ座が燒失した時、やはり Bankside に the Hope Theatre が出來た。

そこで結局シェークスピアの時代には七つの公演劇場と一つの私演劇場があつただけである。收容人員は三百人乃至千二百、大なるは三千人を容れたともいふ。

是等の劇場の如何なる形體のものであつたかは、今日明白に知る材料がない。地圖に現はれた外觀の如きは單に圓形、六角形又は四角形の外容を示し、小さな棟から旗を上げてゐるのを知る位に止まる。

シェークスピアの舞臺が今日のと異る要點は、下の諸點であらう。(勿論公演劇場を云ふので、私演劇場若くは宮廷興行などは別である。)



An Elizabethan Stage

一　劇場が圓形、六角若くは四角の壁のやうな建物で、中央には屋根なく、隨つて太陽の光の下に興行したこと。

二　舞臺が觀客席のなかに突出して、舞臺と觀客席とを截然と區別すべき幕がない。

三　舞臺が大抵四部に分れる――前面 front, 內部 inner, 背後 back, 及び上部 upper stage.

四　大方三種の幕があつた。內部舞臺の前面卽ち heavens を支へる二本の柱の間に一つ、內部舞臺の後ろ背後舞臺の前に一個、そ

して上部舞臺卽ち balcony に一個。是等を自在に開閉して、上演を自在にする。

五　戸口は少くとも前面舞臺の左右に二個、背後舞臺の後ろに一つ、上部舞臺にも同樣三個あつたであらう。しかし場合によつて、思つたよりも自在に幾つも使用したかも知れない。

六　奏樂室が舞臺の左右のいづれか又は背後にあつたらしい。

七　背景が全然なかつたとは考へられぬが、今日のやうに舞臺全部を實景の如くにしようとする努力はなかつた。たゞ內部舞臺の背後に畫いた布を垂れて、幾分實景を示さんとはしたらしい。

此舞臺に於ける上演が、今日の舞臺に於ける上演と、効果の點にどんな差を生ずるか。

一　舞臺と觀客とを親密にする。卽ち親炙式で、役者と見物との距離が非常に近い。

二　寫實の點には欠けるやうだが、觀客の想像力を呼起して遙に豐かな詩趣をそへる。幕の開閉によつて觀客の心を亂さない。

三　舞臺の建築美繪畫美に邪魔せられないで、劇の詩が生きてくる。simple and plain で、thoughtful drama に適してゐる。舞臺面にでなく役者にでなく劇そのものに注意の集中といふことになるから。それが今日では spectacular（壯觀的）になつて美しくなつた。

四　前・內・後・上の四種の舞臺を交互に使用する事によつて、又舞臺の飾付けに手間取れる事な

くして、敏捷に、興味を中絶させずに芝居が運んでゆく。

五　舞臺構造上の必要から生ずる solemn ending（嚴肅な結末）も終生惡戰苦鬪の悲劇にふさはしく、喜劇の dance ending（踊りで仕舞になること）にも又よろし。

六　舞臺が見物席の中へ張出してゐて、我が能舞臺の如く、多くの方面（三方或は甚しきは四方）から見られるのであるから、舞臺に立つ役者は、繪畫的効果よりも寧ろ彫像的効果を旨としなければならぬ。

作者が同時に stage manager 舞臺監督（十分の意味で）であつた事も、又此時代にふさはしい事のやうに考へられる。

間劇 Interlude と共に職業的俳優が生れたが、彼等が數に於て增加すると共に、之を取締るの必要を生じたと見え、一五七一年の國法に由り、國內の高貴の人(personage of higher degree)から許可を願出るべき事が定められた。さもなくば彼等は浮浪者として取扱はれるのであつた。ところで上は陛下を初め貴族達は喜んで彼等の需に應じ保護者となつたので、彼等の位地は却て强固となつた。シェークスピアがロンドンへ出た頃、若くは劇場に近づいた頃には、六の俳優團體があつたらしい。此等の團體は各々其保護者の名を戴く(「レースター伯團」などの如く)ので、保護者の移動につれて名稱も變化した。シェークスピアの屬してゐた團體は、一六〇三年に King's Players（王室俳優團）と名乘るに至つた一團である。

俳優には、大人の俳優の外に、少年俳優もあつたが、女優といふものは未だ無かつた。此少年俳優は見習小僧で、大人の俳優の部下に屬し、最初彼等の役割は劇中の歌を唱ふのであつたが、その優ぐれた技術のため、遂に婦人の役割は皆此少年俳優のものであつた。オフィーリヤもデズデモーナも。日本の「おやま」を考へれば、何も珍らしはない。尤も沙翁の劇には、主要な女形が一の作に二人以上は無かつたから、さう多くの婦人役を要しなかつた。一六一六年ベン・ジョンソンのいふには、シェークスピア所屬の團體で女形を勤めてゐた Richard Robinson は、どの婦人よりも衣裳の着付が上手で、曾て女裝して或る婦人の會合に行き、遂に見現はされなかつたと。

女形は假面 mask を用ひたらしい。尤も假面は女形ばかりでなく、他の場合にも用ひた形跡がある。卽ち一人の役者が多くの役をすぐ引つゞいで演ぜねばならぬ場合の如き。

役者の數は一座八名から十名であつたらしい。かく比較的少數で、而かも當時の劇は多くは多人數の登場を要したが故に、役者は都合によつてどんな役でも引受けた。場合によつては、甲の役で退場して、すぐ乙の役で登場せねばならぬことがあつた。すると double cloak を着けてゐ

て、裏かへしにすると、すぐ次の役に間に合ふ、そして作りひげだの、かつらだのを代え、場合によつては假面をつけて、すぐ次の役で飛出す。立派な役者が斯く端役をも引受けて厭はなかつた事からして、作者の方では、どんな端役、一寸した注進役にも、遠慮なく立派な白を書いて置く事が出來た。これは注目に値ひする。

國民の演劇熱勃興の時代とて、芝居の人氣につれ役者の收入多く、立派な生活をして學者や法律家に羨まれてゐた。役者志願のものも隨分あつたと見え、as plentifully "as spawn of frogs in March" と記された。

舞臺裝置 scenery には金をかけなかつたが、衣裳には大分贅澤なものを用ひた。

前に幕がないから、戸を出てから前まで大分の時がたつ。マクベス夫人も手紙を讀み讀み默讀して前へ出たであらう。

退場の時凡てのものを引込ます必要があつた。

劇場は晴天の日には日曜日の外毎日開場。開演時間は午後二時又三時から二時間又二時間半。入場料は pit（土間）が一片（四錢）乃至六片。gallery（棧敷）の最高も半クラウン（一圓二十五錢）を越えず。

演出の型、科白の種類

演出の有樣については無論精細を知る由がないが、あのロマンチックな不羈奔放な文體と對應して、やはり誇大した、力をこめ過ぎるほどこめたやり方らしい。大股に床ふみ鳴らして歩く、吼えるやうにわめく、といふ有樣で、refined and delicate effects を求めるのでなかつた。

(Tchehov などの Art Theatre と全く反對)。startling effects を好んで、broad swears（無遠慮な惡たれ口）などをも構はず用ひ、「あらし」の水夫などは水をボタボタ垂れて登場した。

役者と見物と頗る接近してゐたから、顏面や手足の僅かの表情、聲の微かな抑揚まで十分に注意せられてゐた。白は口早やに述べられるのであるが、それも此近接のために可能となる。

一定の型の出來てゐたことは stage direction（とがき）から察せられる。——

一、囚報に接した者は地上に倒れる。（ローミオーやタイタス・アンドロニカスなど）。

二、狂氣又は絶望は髮を振り亂す。（「リチヤード三世」に於けるエリザベスなど）。

三、變裝（disguise）——女が男に、男が女に假裝すれば、すぐ、長年連添ふた女房でも亭主でも欺いて更に氣どられぬといふやり方。「ヴエニスの商人」の法律家ポーシヤと書記ネリツサは、いかにも不自然であるが、シエークスピアには他にそんなのは多くない。「リー

ア王」のエドガーは狂を裝ふて大分ごまかしが利くやうになつてゐる。「十二夜」のヴアイオーラは誰をも欺きはしないし、「御意次第」のロザリンドは女としてオーランドーに逢つてゐないのだがこれも尤も。

四、獨白（soliloquy）――（イ）心内の思ひ惱みを言葉に現はすもの。ハムレットの樣な心理的に少しも不合理さを感ぜぬ場合もある。（ロ）單に事件を觀衆に知らせるためのもの。「リチヤード三世」の第一場の如き。これは甚だ感心しない、しかし都合のよい方法。

五、傍白（aside）――對手に聞えぬ體にて獨語するもの。此はあまりに不自然な、拙劣な工夫である。沙翁も隨分多く之を用ひてゐるが、尤もらしい傍白は一つもない。

沙翁劇關係の俳優

リチヤード・バーベーヂ Richard Burbage (1567?—1619)

シェークスピア劇團の柱石。一生を俳優として捧げて當代第一の稱ありし名優。ハムレットを初めリチヤード三世、リーア王、オセローなど重要な悲劇の主人公に扮した。

すぐれた orator で、又いかにも活躍する科に群を拔いてゐた。だから見物は「彼が白を述べてゐる時ほど喜んだ事がなく、之れを止めた時ほど悲んだ時はなかつた。しかし白を述べない時でも依然として卓出した俳優で、白を述べ終つてからも、その役を輕んぜず、其の表情其の身ぶりで、いつ迄も其の役を高所に維持してゐた」と記されてある。

背は低かつたが、顏の表情が實に巧みで、その顏を見てゐれば思想も氣分も一目瞭然であつたと云はれた。

非常な人氣で、時の國王ヂエームス一世の后の崩御數日にして彼は歿したが、彼れの葬儀の方が遙に盛大であつた。

一六〇二年といへば今日から三百三十餘年前、ロンドン市内の一劇場ブラツクフライアー座の樂屋では、ハムレットの父の亡靈に扮した三十七八才の溫雅沈着の人を取卷いて、七八人の重立つた役者が、その人の指圖を熱心に聽いて居る。彼は書きおろし當時の「ハムレット」の主人公に第一に扮した三十六才ばかりの肥つた男を顧み、かく述べる――

『白をば私が只今述べた通り、輕くすらすらと言ひまわして貰ひたい。例のわざとらしい白廻しを聞くほどなら、町のお觸れ奴に吩咐けて、わめかせた方がましといふもの云々』

それから墓掘の役を勤める男に向ひ――

『それから、道化方を勤める者は、書き記してある文句の外、しやべつては相成らぬ。淺墓な見物を笑はせるため、我から笑ふ手合ひもある。さうしてゐるうちに、芝居の大事な要所は一向疎かにせられる。よからぬ事ぢや』

皆んなが此訓言を眞面目に耳傾けてゐるのも無理もないので、此役者こそ作者を兼ねて當時日の出の勢のシェークスピア自身であつたから。そしてハムレットに扮したのが渾名King Burbageで、肥つた堂々たる男、役に非常に熱心で、最後の幕が下りるまでは決して樂屋に退かない。自分の出ない時にも幕内にかくれて、一寸でも氣持の變らぬ工風をする。他の役者の白を述べる時にも、バーベーヂの表情の變化を視てゐるのが非常に愉快であつたと云はれる。此名優の故と又作の故とで、彼れのハムレットは非常に有名であつたと見え、彼が死んだ時、シェークスピアは次の如き哀悼の辭を彼れの爲に作つた——

『彼は逝つた。
そして彼と共に何といふ世界が逝つて了つた事であらう。
友人も何も、何といふ空虛か。
どこからどこ迄、彼は類ひない男であつた。
もう二度と若いハムレットが
呼吸は切れがちながら愛する父の死に向つて
「仇を返へせ」と呼ぶことはなからう。
屢々彼が墓の中に飛込むのを見たが
自分があの狂せんばかりの戀人であつたやうに
眼のつけどころが眞に逼つて
ほんとに死ぬる積りかと思はせた』

優人としてのシェークスピア自身——

彼は作者としての外、舞臺の人としても相應の名聲を有したとは多く信ぜらるゝ處であるが、なかなか立派に演じたといふ說と、役者としては大してすぐれずといふ說とある。自作の「ハムレット」に於ける亡靈や「御意次第」の忠僕アダムに扮したと傳へられて居る。一體に quiet parts（靜かな役、ふけやく?）がうまかつたらしい。

「劇場に於けるシェークスピア」の著者 William Poel は彼が「ローミオーとジューリエット」のベンヴォーリオーを演じたと推定してゐる。hazel eye や卵形の頭や、grandsire（祖父さん）

といふあだ名、及び peace-loving（穏か）で tact（機轉）のあるベンヴォーリオーの役が、その風采性格の何となく相似た沙翁には最も適するらしい。

エドウィン・ブース Edwin Booth（一八三三―一八九三）

近世米國に於ける沙翁劇演出の名人。ハムレット、オセロー、イヤーゴー、ブルータス等に扮したが、殊に其のハムレットは天下一品の稱がある。凡そ俳優たるほどの人は一生の思ひ出に一度はハムレットをやつて見たいと思ふのであるが、「ブースの生きてゐる間は誰もハムレットを演じない」といはれ、又「彼はハムレットを演ずる爲に生れた」といはれた程である。元來が俳優に稀有な氣高い人格者で、皇子の如き高雅な心、憂鬱な氣質、内省的な傾向、冥想的な頭、親友と共にある間は快活であるが一般に引込勝ちで、沈默、いつも崇嚴な事を考へてゐる、先天的にメランコリーの男、その微笑さへも、非常にスキートではあるが涙よりも悲しい。弟のジョンが大統領リンカーンを暗殺した時「こんな事が一生の中にありはせぬかと、いつも豫言に慄へてゐた」と自ら云ひ、先妻の顔が汽車の窓越しに見えるといひ〳〵してゐた。それほどに神經過敏。それに一體が、やさ形で、高尚な頭、表情の深い黑い眼、顏色が動き易い、色々な情操の云ひ表はせる聲。此人のハムレットが惡からう筈はない。非常に高尚な深刻な一篇の詩となつて、そして本人はハムレットは狂人でないと確信してやつたが、結果は殆ど狂に近かつた、と云はれるのだから、正に理想のハムレット。

エドマンド・キーン（一七八七―一八三三）

シャイロックやハムレットなど悲劇の主人公を演じて英國で天才の譽高かりし此名優のことは、既に「ヴェニスの商人」の章中に記してあるにつき、こゝに繰返へさず。

附錄

「アントニーとクレオパトラ」第一幕譯稿

〔編修者曰く、「世界文學全集」中の著者所譯「沙翁傑作集」六篇に次で、著者は尙病間譯筆を進め「アントニーとクレオパトラ」に及んだが、病急かに革まりて、遂に其第一幕の終に近いところで途切れて了つた。玆に其の在るがまゝに未定稿を掲げる。是れ實に著者の絕筆である。〕

アントニーとクレオパトラ

第一幕。

第一場。——アレグザンドリヤ。

クレオパトラ宮殿の一室。

デメトリウスとファイロー登場。

ファイロー。　いや全く、大將のはいりかたと來たら
圖拔けだ。　あの素晴しい兩眼、

曾ては戰陣の縱列、集團、の上に、
鐵甲の軍神(マーズ)そのまゝ、爛々と輝いたものだが、今ぢや伏せたり、屈めたり、
躬々如としてそのお役目を
日に燒けた額の見張りに果してゐる。彼の將帥らしい心臟は、
大戰の亂鬪に當つて、よく胸の締鐵(しめがね)を
ぶつ切つたのだが、いつもの氣象は一切放棄、
風(ふいご)櫃となり、扇となり、
イジプトっ娘(こ)の情慾(ほてり)を冷(さま)すだけのものさ。
勇ましい喇叭(ファンファーレ)吹奏。アントニー、クレオパトラ、その侍女、從者の列、宦官（去勢の宮人）
は女王を扇ぎながら登場。

ほら、やつて來るぞ。

よく注意し給へ、すれば解らう
世界を支へる三柱(さはしら)の一本が、變り果て、
遊女の幇間(フール)となつてる樣(さま)が。よく見給へ。

クレオパトラ。　眞實戀なら、いか程か云ふて。
アントニー。　數へられる程の戀は、貧しいものさ。
クレオパトラ。　わたしどの程度まで愛されるのか、境を決めたいのです。
アントニー。　すると止むなく新天新地を求めなくてはなるまい。

　　從者一名登場。

從者。　御前様、ローマからの消息にござります。
アントニー。　　邪魔な、要領をいへ。
クレオパトラ。　いゝえ、アントニー、聞いてお上げなさいよ。
奥様御立腹の事かも知れませんよ。それとも、わからないわ、
まだ鬚も生へないシーザーが
強力な命令を貴郎に出して、「かうしろ、あゝしろ、
あの王國は征服すべし、あれは釋放せい、
之を遂行せずんば、所罰さるべし」とくるかも。
アントニー。　　あなた、なんでそんな事を！

クレオパトラ。　大方よ！　けれど、全くありそなことです。
貴郎もう爰に滯在してはいけませんよ、免職てのが
シーザーから來ます。だから、お聞きなさいよ、アントニー。
奥様の招還狀はどこ？　ぢやない、シーザーの招還狀？　御兩人の？
使者を呼入れなさいよ。あら、わたしイージプトの女王に相違ないやうに、
ほんとに貴郎赤い顏してさ、アントニー、貴郎のその血こそ
シーザーの御家來だか。それともあなたの頰が、そんな朝貢をするのね、
かしましいフルビヤのわめく時にさ。さ、御使者！
アントニー。　ローマをしてタイバー河に流れて溶け、此整然たる帝國の
廣大なるアーチも破滅させい！　予の安住地は此地だ。
諸王國も泥土、我等の葬土の大地は、
人間も養へば、禽獸をも育てる。人生の氣高さは
かうする事さ〔と抱擁し〕かやうな氣の合ふた二人、
而かもいづれ劣らぬ對の二人が、かくなし得ることは、

全世界を證人に立て、間違つたら罰を受けてもよい、
他に比類はあるまい。

クレオパトラ。　偉い虚言家！

この人なぜフルビヤと結婚しときながら、その奥さんを愛しなかつたのでせう？
私は愚かなやうに見えてもさうではありませんよ。アントニーは、をつつけ
舊の(不實な)己れに歸りなさる。

アントニー　　決して。クレオパトラに動かされてからは（予も變つた）。
さあ、戀の女神と、そのものやさしい時を愛するなら、
堅苦しい會見などで、時を空費すまい。
我々の生命の一分一秒たりとも、何か娯樂なくして
送つてはならん。今夜の遊樂は？

クレオパトラ　　大使達の接見。

アントニー　　莫迦な、負けずの女王！
此人には何でも似あう、怒つても、笑つても、
泣いても。此人の感情の亢奮は一として
美しく見えるやうにならぬものはない(のだから叶はない)！
もうそもじから以外には使者はない。二人つきりで
今夜は街中歩きまわり
民情を察しよう。さ、わが女王、
昨夜君はそれを熱望してゐた(ではないか)。(從者に向ひ)何も謂ふな。
〔アントニーとクレオパトラ從者を從へて退場〕

デメトリウス　シーザーはアントニヤスにかうまで輕んぜられてゐるのか？

ファイ　君、彼がアントニーでない時には、往々かくの如く
當然常にアントニーと伴ふべき
その偉大の特徴を大に缺くのさ。

デメトリウス　　全く笑止千萬、
ローマで彼のことをこんな風に話せば
さらの虚言家だと云はれるのだが、彼は自分でその虚言でない事を立證してゐる。どうか

明日にでもなれば、立派な行ひをして貰いたいものだ。御機嫌よろしう！　〔兩人退場。

第二場――同所。他の一室。

チヤーミヤン、アイラス、アレグザス、及び一人の占師登場。

チヤーミヤン　アレギザス樣、ねいアレギザス樣々、何から何までアレギザス樣、殆ど絶對完全のアレギザス樣、どこに居るのよ、あなたが女王樣にあんなにまでお讃めなさつた占師はさ？オー、わたし、それは〳〵御亭主が知りたいのよ、そら、よく云ふでせう、女房を取られて大威張でゐるつてな私の未來のハスさ！

アレグザス　占師！

占師　何御用ですか？

チヤーミヤン　此人なの？　あなた、物事を知つて居るといふのはあなたですか？

占師　大自然の無限の秘密書中
少しは讀むことができます。

アレグザス　お手をお見せなさい。

イノバーバス登場。

イノバーバス　至急馳走を運びなさい。酒を十分にな、
クレオパトラさんの健康を祝して飲むんだから。

チヤーミヤン　どうぞあなた、好い運を下さいね。

占師　私は運を作りません、豫言するだけです。

チヤーミヤン　ではどうぞ、好いのを豫言してね。

占師　あなたは今よりもまだ〳〵ずつとよくなります。

チヤーミヤン　縹致の事よ。

アイラス　ぢやない、年老つてからお化粧するつて事よ。

チヤーミヤン　皺くちやなんて、鶴龜々々。

アレグザス　占先生のお邪魔をしてはいけない。氣を付。

チヤーミヤン　シーツ！

占師　あなたは愛されるよりも寧ろ愛する方になります。

チヤーミヤン　一層大酒飲んで肝臟（戀愛の占むる所と考へらる）でも暖める方がましだわ。

アレグザス　まあ〳〵、お聞きなさい。

チヤーミヤン　よろしい、何かすてきな運をね！　朝のうちに三人の王様と結婚し、みんな死別して寡婦となり、五十になるとひよっくり子供ができ、その子にユダヤ人の王ヘロデが臣下の禮を執る（キリストを指す）といふやうにね。それとも私をオクテーヴィアス・シーザーと夫婦に成らせ、御主人と同格にして下さい。

占師　あなたは今仕へてお出なさる方よりも長命します。

チヤーミヤン　オー素敵！　わたし無花果（しば〳〵有毒にて人を短命ならしむと信ぜらる）より長命の方がずつと好きよ。

占師　あなたの今までの運勢が、之から來るものよりづつと立派でした。

チヤーミヤン　では大方私の子供等は私生兒なんでしようよ。

どうぞ、わたし一體幾人男の兒や女の兒を持たなくてはならないの？

占師　若しあなたの願ひの一つづゝが受胎し

一つ一つの願ひが實のれば、まづ百萬。

チヤーミヤン　およしよ、お馬鹿さん！　魔法使だから許してあげるものの。

アレギザス　あなたはシーツの外には誰もあなたの願ひの秘密を知る者はないと思つてゐるんだ。

チヤーミヤン　いゝわよ、さ、アイラスのを見て。

アレギザス　みんな運勢を知りたいのだ。

イノバーバス　俺のと、それから大抵の者の今夜の運勢はだ――醉拂つて眠る。

アイラス　さ、此掌、貞操と書いてありますよ。他に何はなくとも。

チヤーミヤン　丁度ナイル河の大水が凶作と書いてあるやうにね。

アイラス　いや、狂人、あんたなどに占はできませんよ！

チヤーミヤン　まあね、油ぎつた掌が氣の多い前兆でなかつたら、わたしそれこそ耳も搔けないお馬鹿です。どうぞね、此人には仕事日並の平凡な運勢を云つて上げてね。

占師　御兩人の運勢は同じぢや。

アイラス　けれどどうして、けれどどうして？　もつと細かく謂つて下さい。

占師　もう謂ひました。

アイラス　わたし此人より一寸だけでも運が善くないの？

チヤーミヤン　とにかく、わたしより一寸だけ運が善いとしたら、どこにその一寸を望みます。

アイラス　御亭主の鼻にぢやないわよ。

チヤーミヤン　私共の悪い考を天よ願くば矯正し給へかし！　アレギザスさん――さあ、此人の運勢、此人の！　どうぞ此人の奥様は子供の出來ない婦人でありますよう、美はしきアイシスの神よ、あなたにお願ひいたします！　そしてその奥さんが死にまして、次にもつと悪いのを與へ給へ！悪いのの後に悪いのが來、最後にいつち悪いのが、笑ひながら墓に彼を、五十度も女房を寢取られた頓間亭主を、送つて行きますよう！　アイシスの神よ、私の此祈を聽し召し給へ、よしや一層重大なる事柄をば拒み給ふとも。アイシスの神、あなたにお願ひいたします！

アイラス　アーメン。愛する女神よ、人民の輿論であるその祈を聽上げ給へ！　なぜなれば、美男子がだらしなき女房を持つてゐることの斷腸の思ひある事であるやうに、醜悪な野郎が操正しき女房を持つてゐる事も哀愁の極みであります。故に愛するアイシスよ、適宜といふ事を失はず、彼に相當する運勢を與へ給へ！

チヤーミヤン　アーメン。

アレギザス　どうだらう、一體、俺を物笑ひの亭主にすることが此輩の自由になるのだつたら、自分で淫賣婦になる位い平氣なんだ、きつとさうするんだ！

イノバーバス　シーツ！　アントニー將軍がおみえだ。

チヤーミヤン　ぢやないよ、女王ですわ。

クレオパトラ登場。

クレオパトラ　將軍を見ましたか？

イノバーバス　いえ、お目にかゝりません。

クレオパトラ　爰においでではなかつたか？

チヤーミヤン　いえ、奥様。

クレオパトラ　遊樂に氣が向いてゐられたのに、突然、ローマ人心が起つたのです。イノバーバスさん！

イノバーバス　何か御用で？

クレオパトラ　お探しして、こちらへお伴して下さい。アレギザスはどこにゐる？

アレギザス　爰に、御用を御待ち居ります。殿がおみえです。

クレオパトラ　見ない事にします。みんなあちらへ。　〔一同退場。

アントニー使者一名と從者を從へ登場。

使者　奥方フルヴィヤ様が最初に兵を起されました。
アントニー　俺の弟のルーシヤスに向つてか？
使者　左様。
しかし間もなくその戰は終となり、當時の事情が
お二方を味方となし、軍勢を合せてシーザーに對抗せられました、
ところが戰ひシーザーに利あつて
接戰一回にして御二方をイタリイから驅逐致しました。
アントニー　で、もつと惡いところは？
使者　凶報は性質上之を傳へる者を災ひします。
アントニー　それは愚物か卑怯者の場合に限る。云たり。
俺には過去は過去だ。かうだ——
俺に眞實を語る者は、よしやその話の中に死があらうと
俺は詔はれたが如くに聞かうぞ。
使者　レピーナスは——
之がなまやさしからぬ報告です——彼れパルシヤ軍と共に
ユーフラチーズからかなたのアジヤを席卷し、
彼の勝誇つたる軍旗は、シリヤから
リヂヤに又アイオニヤに、震撼いたします。
然るに——
アントニー　アントニーは、と謂ひたいのだらう、——
使者　オー、御前！
アントニー　存分に謂つてくれ、世間の口の葉を取繕ふに及ばぬ。
クレオパトラの名をローマで謂はれてゐる通りに呼ぶがいゝ。
フルヴィヤの用語を用ひて毒つき、俺の過失を罵倒して
眞實と惡意の述べ得る限りの特權を以て
やつて貰はう。オー、我々が雜草を生やすのは
我々の昌んな心が停滯してゐる時だ。そして我々の耳に逆らふ忠言は
譬はば之を耕作するやうなもの。暫時　左様なら。

使者　御意を相待ちをります。

〔退場〕

アントニー　シシヤンの者、こら、報告だ！　そこで呼べい！

第一從者　シシヤンからの御使者、左樣な方がゐられますか？

第二從者　お召を待つて居ります。

アントニー　出頭させい。

此強いイージプトの足鎖を斷切つてしまはなくてはならぬ、

さもないと痴情のために身を滅ぼす。

他の使者登場。

第二使者　奥方フルヴイヤ樣には御逝去でござります。

アントニー　何用だ？

どこで死んだ？

第二使者　シシヨンで。

〔と一書を捧呈する。

御病氣の期間、其他更に重要な事で

御前の御承知ならねば相ならぬ件は、之れにござります。

アントニー　退れ。

〔第二使者退場。

偉大な精神が去つた！　此事をこんなにまで俺は熱望してゐた。

我々が嘲弄と共に一蹴し去るものを

又我々のものであれかしと願ふ。現時の快樂は

運命の輪の轉回によつて

正しくその反對となる。逝つて見れば、善い女だつた。

彼女を押のけた此手が又彼女を引戻したいわい。

俺はこの蠱惑の女王から離れなくてはならん。

百千の損害が、(現に) 知つてゐる惡事以上に、

俺の無爲怠慢から孵化する。どうぢや、イノバーバス！

イノバーバス再登場。

イノバーバス　何御用ですか？

アントニー　急ぎ矣から出發しなくてはならん。

イノバーバス　はて、するとわが婦人連をみんな殺して了ひますぜ。それ、無情といふ事は彼等に取つて致命的ですからな。我々の別離を忍ばうものなら、死が合言葉になります。

アントニー　俺は行かなくてはならん。

イノバーバス　止み難き事情の下には、女位い死なせろです。何でもない事に捨てゝしまふのは、氣の毒でせうぜ。勿論女と大義との間では、女なんど物の數ではありませんがね。クレオパトラ様は、此事のちらとした噂を聞いたゞけでも、すぐ様死なれます。これどころか、ずつと劣らない勤機の爲めに、あの方が死なれるのを二十偏も見たことがあります。どうも考へますのに、死といふもののうちに何か素質があつて、あの方に對して何となくしなだれかゝる行爲をするのですな。それ程にも女王は死について敏捷だ。

アントニー　男の思ひもつかぬほど狡猾なのだよ。

イノバーバス　あ、あ、どうして、どうして。あの方の熱情を造るものは、純なる愛の至妙の部分以外にありません。あの方の大風大水をなんで溜息だとか涙だとか呼べませう。年代記に載つたこともないほどの大暴風雨です。之れがどうして狡猾でありませう。萬一さうとしたら、ジョーヴ神のやうに、雨を降らすさへあの方には出來る。

アントニー　あの女に逢はなかつたらよかつたに！

イノバーバス　オー、將軍、然らば驚嘆すべき作品を見ずに終る事となりませうぜ。さうした惠を受けなかつたとすると、あなたの旅行も不信用になります。

アントニー　フルヴィヤが死んだ。

イノバーバス　え？

アントニー　フルヴィヤが死んだ。

イノバーバス　フルヴィヤ様！

アントニー　死んだ。

イノバーバス　はて、將軍、神々に感謝の捧物をなさい。神明の思召に適つて女房に死なれる時には、地上に多勢の仕立屋がある事を男に示しなされるのです。古い衣服がすり切れると、新しいのを造る者に事は缺かぬといふて慰めなさる。フルヴィヤ様の外に女は居ないとなると、それこそ全くの深傷（衣服の型との地口あり）以て哀悼すべき事件でございませう。（しかし目下の）此悲みには慰みの冠がついてゐる。古いけだしが新しい長襦袢を生み出します。これ位いの悲みに流す涙は玉葱にでもありますよ。

アントニー　妻が領内に着手した要件は
予の不在を許し得ない。
イノバーバス　あなたが爰で御着手なされた要件も、あなたが居なくてはどうにもなりません。
特にクレオパトラ様の件、あれは全然あなたの御滯在を待ちます。
アントニー　もう輕薄な答辯はよせ。士官共に
我等の目的を訓示してくれ。女王には俺から
此火急策動の理由を打明け
出發の許しを求めよう。何もフルヴィヤの死が
更に焦眉の動機を添へて
強く我等を動かすばかりでなく、
ローマに於て事に當つてゐる友人達の手紙も亦
我等の歸國を懇請して止まない。セクスタス・ポンピイウスは
シーザーに向つて戰を挑み、
海の帝國を支配してゐる。かの頼み難ない民衆は、
價値ある者も、その價値の過去のものとなるまでは、
愛を之に結付けるものでないが、今や
傑物ポムペイの樣々な尊稱をば、彼の一子に向つて
ふり注ぎ初めた。そこで彼は名聲威力共に高く、
氣魄と元氣は更に高く、卓拔な武將は外にはないといはん許りに、
世に出て來た。此威力が增加はれば
世界の果々まで脅威するかも知れない。容易ならぬ事が生れでんとしてゐるが、
馬の毛のやうに、命だけあつて
まだ毒ある蛇に化けないだけだ。(馬毛を水に入れれば化して毒蛇となるとの迷信による)　部下の者一
同に向ひ、
我等の意圖、此地より急遽出發を要望すと、傳へてくれ。
イノバーバス　必ず左樣いたします。　〔一同退場。
第三場。同所。他の一室。
クレオパトラ、チヤーミヤン、アイラス、及びアレギザス登場。

クレオパトラ　あの方はどこです？
チヤーミヤン　あれからまだお目にかゝりません。
クレオパトラ　どこに、誰と、何をしておいでか、見て來て下さい。
わざ〳〵遣はすのぢやないよ。悲げな御様子だつたら、
私はダンスをしてゐると云ひなさい。上機嫌なら、
急病だと報告しなさい。さ、急いで、そしてすぐ歸つて來なさい。〔アレギザス退場。
チヤーミヤン　マダム、私考へますのに、ほんとうにあの方を愛してお出でなさいますれば
その御手段は同じ愛をあの方様から引き出し遊ばされる
所以ではないかと存じます。
クレオパトラ　何をしろといふの、私のしない事で？
チヤーミヤン　何事に限らず御讓り遊ばされ、一つとして御機嫌に逆らはぬよう。
クレオパトラ　馬鹿みたいなお説教ね。それこそあの人を失ふ方法だよ。
チヤーミヤン　あんなにまでおからかひ遊ばされるのはどうでせうか。私は忍耐といふことを推
奬いたします。

私共は度々怖がつてゐるものを後には憎むやうになります。
あら、アントニー様がお出でです。
アントニー登場。
クレオパトラ　（チヤーミヤンだけに）　わたし病氣で氣難かしいのよ。
アントニー　洵に殘念ですが、志すところを云はねば、——
クレオパトラ　ああ、あちらへ連れて行つて、チヤーミヤンや。わたしきつと倒れます。
こんな風で長く居れる筈はない。此の兩脇は生身だもの
とても耐えやしない。
アントニー　扨、わが切愛する女王よ、——
クレオパトラ　どうぞ、ずつと離れてゐて下さい。
アントニー　どうしたのか？
クレオパトラ　解てゐますよ、そのお目附で、何か吉報があるのです。
何と云ひます、あの式を擧げた女は？　貴郎行てもよろしい。
ほんとにあの女が貴郎を爰へ來る許しなど出さなかつたらよかつたに！

彼女などに云はせはしないから、貴郎を爰に引付けとくのはわたしだなんて。
わたしにそんな力はありはしない。彼女の者です貴郎は。

アントニー　神々こそ最もよく知召さん――

クレオパトラ　　オー、女王ともある者で
こんなにひどく欺されたものは他にはない！　けれど初めつから
いろんな計略がめぐらされてゐた事は見てゐた。

アントニー　　クレオパトラ、――

クレオパトラ　どうして貴郎がわたしのもので、しかも實ある人だなんて思つて居ませう？
誓言の百萬だらで高御座の神々を搖動かしたつて、
貴郎つて人はフルヴィヤに不實だつたのだもの。途徹もない氣狂だつたわ、
あんな口だけの誓約、誓つてゐるうちにもう破るのに引かゝるなど！

アントニー　　いと麗はしの君、――

クレオパトラ　いゝえ、どうぞ、別れるのに言譯の色などつけず、
挨拶をしてさつさとおいでなさい。逗留てほしいと仰せの節は
かれこれ云ふ時間もありました。あの時には別れることなど、何もなかつた。
永遠が我等の唇に、眼に、
祝福が上れる眉に、どの部分とても
天の香味を持たぬほど貧しいところはなかつた。今とても變りはない、
それとも、世界一の武將といはれる貴郎が
世界一の虚言家に變つたのです。

アントニー　　まあさ、マダム！

クレオパトラ　わたしに貴郎だけの背丈があつたら、
イージプト女王にも魂があると知らせてやらうものを。

アントニー　　お聞きなさい、女王、
時勢の强ゆる必要は、暫時の間
我等の奉仕を强要するが、予の此一杯になつた胸は
擔保としてあなたの所に留ります。わがイタリイは
內亂の刄に輝き、セクスタス・ポムペイウスは

ローマの港にひたと攻寄せます。
國内兩軍の力相等しきところ、
日和見の徒黨を生じ、曾て憎まれたる者も力を得れば、
新たに愛を加へらる。かの罪せられたポムペイは、
父の名聲を繼承して富有となり、現政府の下に
志を得ざる輩の心に
一歩々々喰入り、その勢ひ侮り難い。
しかして泰平無事も休息にうみ果てては
いかな無謀の變化を用ひても之を癒やされんと願ふ。なほ予一身に關する事で、
又あなたに取つても予の行くを安全ならしめるは
フルヴィヤの死です。
クレオパトラ　年齒は重ねても愚かしさを免れぬわたしにしても、
子供らしく欺される事だけはなくなりました。フルヴィヤが死んだなんて！
アントニー　殁りました、わが女王、
爰を（書簡をさして）御覽、そして御暇あらせられん折、
彼女の惹起した擾亂の次第をお讀み下さい。終のところに、わが至上の君、
いつ、どこで、殁りましたか御一見下さい。
クレオパトラ　オー最も僞の愛！
貴郎が悲みの涙を以て滿すべき聖なる壺は
どこにあります（近親の涙の壺を墓に葬る習慣あり）。今こそ解りました、
フルヴィヤの死で解りました、私の時もどんなお取扱を受けることか。
アントニー　もう口爭ひはやめにして、予の胸に抱いてゐる計畫を
聞く用意をして下さい。その成るも敗るも
あなたの忠告次第です。
ナイラス河の泥土に生命を與ふる太陽の火に誓つて云ふ、予の行くは
あなたの武士として、忠僕としてで、和するも戰ふも、
あなたの選ぶがまゝです。
クレオパトラ　此レースを引切ておくれ、チヤーミヤン、さ。

いえ、もういゝの、その儘にして。私ぢき病氣にもなれば、快もなる、

アントニーの愛のまゝです。

アントニー　　わが大事な女王、忍耐、

そして彼の愛に眞實の證言を與へて下さい、（今や）

名譽ある審判の席に立てゐます。

クレオパトラ　　フルヴィヤさんにもそんな事を云つてたのですつてねい。

お願ひです、あちらを向いて、あの方の爲に泣いてあげて下さい。

それから私に離別の挨拶をして、そして此涙はイージプト女王に捧げるのだと

さう云つて頂戴ね。さあどうぞ、素敵な白ばくれの

一場のお芝居をしてしかも完全に名譽のやうに

觀せて御覽。

アントニー　あなたは予の血を熱しさせる。もうよして下さい。

クレオパトラ　まだ〳〵上手にやれますよ、之れでも結構だけれど。

アントニー　扨この劔かけて、——

クレオパトラ　それから楯にもかけて。此人段々に改めてくる。

けれ共まだ最上ではありません。御覽、そら、チャーミヤン、

此のハーキュリーズの子孫のローマ人は

憤激の動作にもよくお似合ひのこと。

アントニー　もう行きます。

クレオパトラ　　禮儀正しい方、もう一言。

貴郎、貴郎と私とは別れなくてはなりません、けれどそれぢやないの、言ふことは。

貴郎、貴郎と私とは愛し合つてゐました、けれどそれでもない。

そんな事は云はなくともよく御存知のはず、何だか言ひたいのでした、——

オー、わたしの忘れがちな記憶はアントニーそのまゝ

わたし何もかも忘れてしまつた。

アントニー　　女王には　わるふざけを

御家來としておいでになればいざ知らず、さなくば

御自身ふざけた方であると解釋せねばなりません。

クレオパトラ　　そんなふざけ心を
此クレオパトラほど、胸の近くにまじめに蓄へることは、
それこそ汗を催す大仕事でせう。しかし、貴郎、私を許して下さい。
私の地位に似つかはしい振舞も、あなたのお目によしと映らねば
私の命を奪ふものですから。あなたの名譽があなたを招いてゐる、
だから私の憐むに足らない愚痴に耳傾けず、
あらゆる神々あなたと共に行き給はん事を！　あなたの御劔の上に
桂の樹の勝利は坐し、坦々たる成功は
あなたの足下に撒かれん事を！

アントニー　　さあ行かう。さ、
我々の別離は留りもし又行きもする、
あなたは爰に留れども予と共に行き、
予は爰から急ぎ行くともあなたと共に爰に留る。
さあ！　　〔一同退場。

第四場――ローマ。シーザー邸。
オクテーヴィアス・シーザー、書簡を讀みつゝ、並にレピダス、
兩人の從者等登場。

シーザー　レピダス君、君も一讀の上、やがて御理解にもならうが、
此シーザーの生れつきの惡德故に我々の偉大な同僚を
憎むのではありません。アレグザンドリヤからの
報告はかうです、彼は釣魚に耽り、酒に親しみ、
夜の燈火を宴會に費やし、男らしからざることのクレオパトラに劣るは、
トレミイの女王の女らしからざることの彼に劣ると相同じ。
又殆ど使者には接見せず、若くは
我々といふ政權分擔者のある事を考へるらしくもない。
君のあそこにて見出すものは、萬人の陷りがちな
あらゆる過失の總加とでもいふべき人間です。

レピダス　　私は彼の善良さを悉く

蔽ふてしまふほどな不良性があると思つてはならない。
彼の過失はいはゞ天の箒星の
夜の暗さに一層光輝くが如きもの、自分の不量見で買求めたのでなくて
親讓り、好んでするといふより
變へることのできないものだ。

シーザー　君は甘すぎる。假りにだ
トレミイの床にころげ込むのも
一回の宴樂に代へて一王國を與へてしまふのも、
下司下郎と席を同じうして杯の取やりするのも、
眞晝間街道をよろめき歩き、汗臭い卑僕共と
嗔嘩を初めるのも、何も不都合はないとする。いや、
こんな事は彼に似合ふとでも云ふがいゝ——
實際はこんな事が瑕にならぬとすれば
彼れの組織はよつぽど珍しいと云はねばならぬが——しかしアントニーが

どうあつてもその汚點を辯解することのできないのは
彼の輕々しさから、これ程の重荷を我々が忍ばねばならぬといふ點だ。彼の閑暇を
淫樂で充すといふだけなら、
大嘔吐を吐くとか、骨乾きを病むとか、
そんな借金取が來るだけだ。しかし此の有事の時、
太鼓の音は彼の遊樂から彼を呼醒し、彼れみづからの領土も
又我等のも、共に事の容易ならぬことを叫んでゐるのに、之を空費するとは——これ叱責に相
當する、
かの青年の、知識に於て成熟しながら
その經驗を質入れして目前の快樂を求め、
かくして判斷力に反抗する者を我々の叱責する如く。

著者年表

明治十五年十二月岡山縣備中國川上郡玉川村に生まる

明治二十八年　同縣立高梁中學校に入學

明治三十三年　同校卒業、上京して伯父留岡幸助氏の經營に係る巣鴨の家庭學校に於て少年の感化教育の事業に携はる

明治三十四年東京專門學校（後の早稲田大學）豫科に入學、翌年同大學部文學科に入り、三十八年七月卒業

明治三十九年アメリカに渡り、ハーバート大學に入學、キットリッヂ、ベーカー其他の諸教授に就き英文學史、英國劇史、作劇法、シェークスピア等專攻

明治四十四年歸朝、早稲田中學校に英語教授

著者年表

大正五年早稲田大學文學部講師となる、同七年教授に任ぜられ爾來英文學科主任として英文學史、英國劇史、シェークスピア研究、文學概論等の講座擔當、其間又同大學高等師範部及び日本女子大學にも出講

大正十年九月『文學概論』出版

大正十二年『シエリーの詩論と「詩の擁護」』（英詩文研究叢書第一篇）出版

大正十三年ドリンクウオーター戯曲『エブラハム・リンカーン』譯（新潮社「海外文學新選」の第六篇として）出版、ゴールズワージー戯曲『小夢曲』及『小男』譯同上第四篇中に掲載

昭和二年『英文學史要』出版

昭和三年『現代英米文藝思潮』春秋社發行「大思想エンサイクロペヂア」第十卷の中に掲載

大正十三年晩春呼吸器を病み其後一時恢復せしが、昭和三年夏頃より病氣再發、翌四年四月一日病勢急かに革まり二日午前一時廿七分永眠

昭和四年九月『ハムレツト物語、マクベス物語』出版

昭和四年五月『沙翁傑作集』（ハムレツト其他五篇の翻譯）新潮社「世界文學全集」中の一篇として出版

昭和六年六月六日初版印刷
昭和六年六月十二日初版發行

シェークスピア研究
定價金二圓五十錢

著作者　横山有策
編修校訂者　東京市牛込區早稲田鶴巻町四四三　增田藤之助
發行者　東京市牛込區早稲田鶴巻町一〇七　角田誠造
印刷者　吉原良三

發行所　東京市牛込區早稲田鶴巻町四四三　東京泰文社
振替東京六〇六九三番

東京・株式會社康文社・早稲田

著作權所有

故早稲田大學教授 横山有策著

増補改訂 文學概論

四六判三三二頁 定價二圓

初刊以來十七版を重ねたる名著

同上

英文學史要

菊判四三〇頁 定價三圓廿錢

同上

シェリーの詩論と「詩の擁護」

四六判一七八頁 定價一圓

シェリーの詩論の研究と、其有名なる論文 A Defense of Poetry の譯註とより成り、併せてイエーツの論文「シェリーの詩の哲學」を譯載す

發行所 東京泰文社

終